
転生物語

G M S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生物語

【著者名】

ZZマーク

N4604W

【作者名】

GMS

【あらすじ】

初めて書いたものです。

なので期待はしないでください。

そして、これは多少お気に入り作品に影響されてます。

そして内容としてはマヤの予言の通り滅びた後作者だつたらどうするか？

というのを考えて書いています。どうか温かい田で読んでください。
ちなみに最低でも毎週土曜に更新予定です。

第1話 ハンド・オブ・ザ・ワールド（前書き）

間違いなく下手ですが、楽しんでください。

第1話 ハンド・オブ・ザ・ワールド

2011年10月28日

人類は滅亡した。

というわけでおれたちは神様に文句を言いに来ている。

ちなみに筆頭は俺、石崎遊輝。

友達は生きているとき少ないほうだったがこんな理不尽な死があるかという生きているときの知り合いというか学校のメンバー、小学校、中学校で一緒にいた同級生を集めて抗議に来てた。どうしてこんなことになったのかといつと……

10時間前

「緊急速報、緊急速報

急に隕石がコースを変え地球に向かってきています。

衝突予想時刻は3時間後の午後3時です。

アメリカ政府は核ミサイルで粉碎しようとしたが隕石が大きすぎて破壊に失敗。

もう手段が残されていません。

この隕石の予測落下地点は太平洋の中心部で落ちたら地球の陸地すべてを飲み込むような津波が起きると予測されています。

世界のビッグたちはこの時のために作られた地下シェルターに避難してますが、もうどのシェルターも満杯になってしまっています。私たちは滅びゆくしかないのでしょうか。

……

そしてあちこちのシェルターを家族とともに回って入れてくれないかとまわっていたが

時間が来てしまいお陀仏となってしまったというわけだ。そして神様との面会

神「どうしたのだ、そんな血相を変えて」

「いつもわかつていつてるだろ。

「ふざけんな

「どうして俺らが死なないいけないんだよ。

俺らは未来ある若者だつたんだぞ。それに来てはいなが俺の母親
だつてあと20年は生きてられたはずだ。

「いつも両親だつてそうだ。

「なんで俺たちを殺したんだ。」

神「殺したとは失礼じやの。しょうがないじやろ、たまたま死ぬ運
命だつたんじやから。」

「いつも本当に神か。ふざけてる。

「わかつた死んだことはとやかく言わない。だがな、短い人生にさ
れたんだ。

「対価くらい払ってくれ。」

「何か嫌な予感がするがしょがないきいてやるかの。

神「わかつたワシにできること何りもしょ。」

「その言葉本当に書おう。」

神「ああ神の名に誓おう。」

「では私たちの願いをかなえてください。

そうですね、（私たちの平均寿命・死んだときの年齢）÷10の願

いをかなえてもらひとこひのせじうどしょ。」

「むむ、多すぎる氣がするがいいじゃらひ（「れ以上ひむわへ言わ
れたくないしの。）」

「では私は死んだとき15歳だったで平均を70にしましょう。
(70 - 15) ÷ 10は5 . 5ですので5個願いをかなえてくだ
さい。

余った0 . 5の願いは弟にかなえさせいやつてくださこ。
そうすれば6個弟に願いをかなえてもらえるので。」

神「わかつた。」

「では5つの願いを言こます。

1つ目 不老不死の命をください。年齢や姿は自分でなりたいと思
つた風に変化されられるよつてこしてくだせ。」

神「不老不死か、してもいいがもしジの過ぎたことをしたら即刻地
獄に落とされるぞ。

それでもいいのかの。」

「かまいません、2つ目の願いは
時空間移動能力をください。時間と空間つまり異世界に行つたり過
去に戻つたりする力です。」

神「いいじゃらひ」

「やして3つめその世界にあつたアイテムを出せるポケットをくだ
れこ。」

神「いいじゃねつ、ただし具体的にどういうものか思い浮かべないととりだせぬぞ。」

「わかりました。

そして4つめ遊戯王デュエルモンスターズのカードをアニメ・漫画・ゲームオリジナルも含めて絵柄・効果ごとに10枚ずつください。

5つめは遊戯王G?の世界に転生させてください。日付は十代たち主人公と同じ年に受験できるように生まれさせてください。」

神「わかつた、それでいいのだな。いきなりだが行くぞ。」

その瞬間光に包まれ俺は氣絶した。

第1話　Hンド・オブ・ザ・ワールド（後書き）

感想やどうすればもうとよくなれるなどの意見お待ちしています。

第1回主人公プロフィール（前書き）

初期設定です

第1回主人公プロフィール

石崎遊輝

身長 十代と同じくらい

体重 50キロぐらい

顔 ふつう

好きなデッキ ドラゴンデッキ 速攻展開デッキ 強奪デッキ

好きな人 性格がいいやつ デッキの実験に手伝ってくれるやつ

嫌いな人 めんどくさいやつ ナルシスト

特技 フラグメイク【無意識】 読書

プロフィール まず金の荒稼ぎのためにこの世界に卒業したらどの世界に行くか検討中
性格はいいんだがたまに本音がただ漏れになる。
そのうち神に新たなチート能力をもらおうと思って
いる。

前世で死ぬ直前ダイエットをしていたので小食が癖
になっている。

第2話 新たなる始まり √S新規モード試験官A（前書き）

第2話です

第2話 新たなる始まり √S名もなき試験官A

第2話 新たなる始まり

Side 遊輝

痛つてえええーー

いつたいなんなんだよ。

つてあれいくらなんでも俺小さくないか。

まさか、つてマジで赤ちゃんかよ。なんで赤ちゃんの時から意識あるの。

ま、いいか便利だし。一気に飛ばして9歳、俺に届け物が届くよつになつた来た。

送り主は天神尾、あの神様か。

一緒に手紙、「おぬしの望みのものじや。」みじかいな。
意味は分かつたけど、よしデッキを作りまくつて試してみるか。
ということで再び時は流れデュエルアカデミアの試験当日
筆記は9番か結構簡単だつたんだけどどこで間違えてんだろ。
遅刻? そんなの会場の近くに止まつてたんだ、するわけないだろ。
さて問題はどのデッキを使うか?

まあこれで行くか。シンク口? エクシーズ? そんなの使うわけないだろ。

使つても闇のデュエルの時だけだな。

アニメではわからなかつたが、1桁は順番が遅いらしい。

まあそんなことを考へているうちに俺の番か。

なんだ、クロノス教諭じやなくて名もなき試験官Aが相手か。
だが本気で叩きのめさせてもうらつ。

「成績が優秀だつたようだが実力はどうつかな、はからせてもらひおつ。」

「お願いします。」

「礼儀が正しいのはいいことだ。では始めるぞ。」

「「デュエル決闘」」

「先攻は私が貰う、ドロー！」

先手必勝とか、ズル！

まあ後攻で万々歳だけど

初期ライフ4000だからすぐ終わるな。

「私はミノタウロスを攻撃表示で召喚！

さらにカードを2枚セットターンエンドだ」

そういうえばソリッドビジョンで決闘デュエルするのは初めてだつたな
思つたより綺麗だな。

だが貴様に次のターンは来ない。終わらせてもらおう。

「（完全にソリティアだな）俺のターン、ドロー、よしまず強欲な壺を発動。

2枚ドロー

そして手札から大嵐発動

フィールドの魔法・罠を全て破壊。」

「私の攻撃の無力化が

だが、もう1枚の伏せカードの効果発動

黄金の邪神像の効果により邪神トークンを特殊召喚だ。」

「では、次にライトニング・ボルテックスを発動手札の真紅眼の黒竜を墓地に送り試験官のモンスターを全て破壊。」

「なに、私のモンスターが全滅だと。」

「さらに死者蘇生発動、墓地の真紅眼の黒竜を特殊召喚。

さらに手札の真紅眼の闇竜を特殊召喚。

そして速攻魔法発動、飛龍天舞。デッキからドラゴン族モンスターを4枚まで送り攻撃力をその枚数×300ポイントアップする！

俺はデッキからドラゴン族モンスターを4枚墓地に送り、攻撃力を1200ポイントアップさせる！

さらに手札の未来融合フューチャーフュージョンを発動。

F・G・Dを指定デッキからドラゴン族モンスターを5枚墓地に送る。

そしてレッドアイズ・ダークネスドラゴンは墓地のドラゴン族モンスター×300ポイント攻撃力が上がる。

墓地のドラゴン族モンスターは10枚よつて3000ポイントアップ。

真紅眼の闇竜の攻撃力は $2400 + 1200 + 3000 = 6600$

いけ真紅眼の闇竜 ダークネス・ギガ・フレイム。

「ぐはああーー、まさか1ターンキルをされるとは君は強いね。

お疲れ様、君の勝ちだ

結果は後日連絡される。」

「1ついいですか。」

「なにかね。」

「もし合格したらオシリスレッドに入れてください。」

「何、君だつたらラーアエローに入れるぞ。
それでもオシリスレッドに入るというのか。」

「はい、お願ひします。」

そう言つて去つて行つた。もちろん俺が。
それにしても弱いねえ！

1ターンキルの上、オーバーキルとか
本当に弱い。

手札が良すぎただけか。

でももうちょっとといじめたかった。

とこりで会場の皆が恐れるような、尊敬するようなまなざしを向けてくるのは氣のせいか。

ま、いいやこれから的人生頑張ろう。

とりあえず、主人公である十代のデュエルまで待とつ。

遅刻して遅れてきた十代のデュエルを見た感想は
チートドローをこの目で見れたな。
ありや運良すぎだろ。

そのあとはさつさと帰つた。

面白くなかったし。

そして数日後、俺の元にデュエル・アカデミア合格の通知が来た

第2話 新たなる始まり √S初もなき試験管A（後書き）

なんというか試験管A弱くしそぎた？

第3話 死者蘇生ではない切り札 VS万丈目 十代編（前書き）

前後編で書いてみました。

第3話 死者蘇生ではない切り札 VS万丈目 十代編

Side遊輝

計画通り

オシリスレッドだ。

原作に入しまくつてやる。ふつふつふつ

俺は今船でデュエルアカデミアに向かっている。

前世でも乗り物で酔つたことはなかつたからこれぐらいは余裕なのだよ

なんてつたて某山のぐにゃぐにゃ道で攻略本を手にゲームをできたくらいだからな

暇だったのでテックを作つていた。

カードは時空間移動能力があるからいつでも取り出せる。

今作つているのはオジャ万丈目をぶちのめすためのテックだ。しかも時間をかけて傷ぶり、プライドを潰し

地獄の底に叩き落とせるようなテックだ。

万丈目いわくドロップアウトボーリ、基十代が倒すだろうがな。

そんなことを考へてゐるうちに到着した。

校長の話は無視。とにかく無視。

でもやつてるうちにめんどくなつたから仮病で抜け出そうとしたら何か寒氣がしたのでやつぱりやめた
いつたいなんだつたんだ。あの寒氣は

Side auto

Side神

さぼりは駄目じゅや、さぼりは
だがミスつたのう
あのような失敗をしてしまつとはのう
時が来たらきやつに頼むかのう

Side auto

Side 遊輝

入学式が終わりレッド寮に俺は來た
ちよどよさそづじやないか
これから拠点に
接触を取つておくが主人公一味に

「おおーーー君」

「なんだああ

「俺新入生の石崎遊輝つていうんだ
友達になつてくれないか」

「いいぜ、それじゃあさ早速デュエルしようつざ

本当にデュエルバカだな

「なんか失礼なこと言われた気がする

「きのせこじやないか（こいつ心読めたつけ）」

「それより『テュヒ』」「『』めんそれは無理」ちえ、なんでだよ？

「こま新しいデッキ作つてさ、それができたら『テュエル』してやるからわ」

「わかつた、だけど絶対だぞ」

あれこいつこんなに引き下がりやすい性格だつけ
ま、いいや

「あ、そういうえばそこのかイザーの弟は」

「なんでそれ知ってるんすか、あなたとは今はじめてあつたのに」

「それは単純さ、俺は近いうちにカイザーに挑む
それだけだ」

俺はそれだけ言つて部屋に向かつた。確か一人部屋だけど一人だつ
たけ

後ろでカイザーって何ソレオイシイノとか

あんな奴がお兄さんに勝てる訳ないっすとか聞こえた気がするナビ
無視

あ、よく考えたら俺つて万丈目に呼ばれない可能性高くねえ

そう思つてた時期が僕にもありました

原作通り歓迎会、そして原作で十代に贈られたのとほぼ同じ内容の
手紙いやビデオメール

そして行こうとしたとき十代と会い一緒に来ました。

どうせ途中で『テュエル』終わるはずだし

だがそうは問屋が卸さない

俺は脇間のうちに校長に許可を得たからな

そして「デュエル開始前

「十代受け取れ」

俺は2枚のカードを投げる

「このカードは?」

「お前のピンチを救うはずだ、デッキに入れてデュエルしてみる」

「わかった、何だか知らないけどサンキューン」

「ドロップアウトボーリ、俺様をいつまでまたすきだ」

「もう済んだぜ、行くぞ万丈目」

「万丈目さんだ」

「「デュエル」」

原作と同じように「デュエルが進んでいく

そして、原作で死者蘇生を引いたところまできた

本来ならここでストップだが

校長が「デュエルをこつそり観戦するという条件で許してくれた

「このカードは、遊輝

お前のカードは、遊輝

俺は魔法力ードミラクルフュージョンを発動

「ここで引いたかさすが主人公流チートドロー
周りの観戦者がきれいつてうるさいけど無視
そういうえば校長どこで見てるんだる?」

「俺は墓地のE・HEROフレイムウイングマンとE・HEROス
パークマンを除外し

新たなるE・HEROを召喚する

来い、E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン」

「攻撃力2500だと」

「十代そいつには攻撃力が上がる効果があるが
今はそんなの関係ないとどめを刺せ」

「物騒な言い方だな

いわれなくてもこれでとどめだ

シャイニング・フレア・ウイングマンで万丈目にダイレクトアタック
シャイニング・フレア・シユートおおおおーー」

「万丈目さんだあああああ

次は俺か

「で、万丈目

俺とやるか。まけたばっかだけどな」

「今のはまぐれだ

俺が肩のオシリスレッドに負けるわけがない

「ふーん

そうか、そんなに死にたいんだな

じゃあ少し、いやかーなり頭冷やそつか

某魔法少女と某緑色の電車ライダーのせりふをがつたいたさせたような
セリフだな

「ふざけるな、死ぬのは貴様だ」

「「デュエル」」

第3話 死者蘇生ではない切り札 VS万丈目 十代編（後書き）

次回をお楽しみに

次回 第4話 遊輝の新デッキ VS万丈目 遊輝編

第4話 我流サイバー流 VS 万丈目 遊輝編

S.i.d.e 遊輝

「「デュエル」」

「先攻は俺様からだ

俺はヘルソルジャーを攻撃表示で召喚
ターンエンドだ」

俺のターンか、だが

「俺のターンドロー とその前に校長さんが出てきていますよ

「校長だって、どうゆうひとだ貴様」

「俺たちも聞いてないぜ」

みんな驚いてる、それにしてもバカかこいつら

「それに関しては私から説明します。

実は僕……

回想 S.i.d.e 校長

「夜、施設を借りたいと?」

「はい、不穏な噂を聞きまして」

「尊ともうのは?」

「オシリスレッドの私たちが気に入らない一部のオベリスクブルーが私たちにデュエルを仕掛けようとしているのです。噂レベルですが気になるので本当にそういうことが起きた時貸してもらえるようにしてもらいたいのですが」

「引き下がつてはもらえないですね
わかりました、ただし二つの条件があります。」

「ありがとうございます
それでその条件とはなんですか?」

「一つはそのよつな事態になつたとき連絡を必ずください
二つはデュエルを観戦をしてください」

「へ?

連絡はともかく、観戦ですか?」

「はい、君の実力には田を見張るものがあると聞いていまして
気になつていたのですよ。

観戦していいですな(わくわく)」

ああ、楽しみだ

もし本当にあつたらびのような素晴らしいデュエルが見れるのだろうか

「わかりました

ただ私が呼ぶまで姿を現さないでください
ありがとうございます

では「

「ちよー」

回想終了

Side 遊輝

「とゆづり訳ですか」

「校長先生がここにいる訳は分かつたけど、でも遊輝
どうして最初は隠してんだ」

「なんとなく

あえてこうなら見ての通りです

「見ての通りって、あ

「なぜ、ここに校長が

万丈目は放心状態か
ま、いいやるか

「じゃ今度こそ俺のターンドロー
サイバー・ラーゴアを攻撃表示で召喚
そのあと手札を4枚セットしターンドンド

「サイバーモンスターだと」

「どうして、遊輝が兄さんと同じサ

「翔君、兄さんと同じじつで」

「あのようなサイバーモンスターは見たことがない
しかも彼のようなサイバー流の生徒は見たことがない」

上記のような声がしたので一言俺は答えた

「我流ですから」

いろいろ驚く声も聞こえるが無視

「だがそんな雑魚壁にもならん
攻撃力400を攻撃表示だとなめるな
ヘルソルジャーで雑魚に攻撃
ヘルアタック」

「トライップ発動サイバー・サモン・ブラスターを2枚
さらにトライップ発動サイバー・シャドー・ガードナー、王宮のしきたり」

「さらに機械族モンスターが特殊召喚されたので2枚のサイバー・
サモン・ブラスターの効果で600ダメージ」

「つく、だが攻撃は通る」

馬鹿め

「破壊されたラーヴァの効果でダメージは受けない
さらにデッキのラーヴァを特殊召喚

600ダメージもう一度食らいやがれ

「つぐ、カードを一枚伏せターンエンドだ」

主人公補正でも入ったか

「命削りの宝札発動

効果で手札が5枚になるようにドロー

永続魔法前線基地を発動

効果で手札のゾドラゴンヘッドを特殊召喚

サイバー・サモン・ブラスターの効果で600ダメージ

残りは2200か

次は？ヘッドキヤノンを召喚

?ヘッドキヤノンとゾドラゴンヘッドを除外し?ゾドラゴン・キ

ヤノンを

特殊召喚

もういつちょうど600ダメージ

ターンエンド」

つくつくつく

悔しそうな顔だ

何より校長の前で負けそうで絶望して

危ない、危ない、危うく暗黒面に落ちそうだった

「お、おれのターンエンドロー

「その瞬間罠発動」

つく残り1000

だが俺の勝ちだ

大嵐発動」

俺の王宮のしきたりと前線基地が破壊された
問題ないけど

「さりに、カードを2枚伏せターンエンド」

「俺のターンドロー

手札の強欲な壺発動

2枚ドロー

さらに次元誘爆を発動

? Yをデッキに戻しYメタル・ヘッドとヘッド・キャノン
を特殊召喚

600ダメージ

まあ、出す必要はねえがYメタル・キャタピラーを召喚
3体合体、XYZドリフロン・キャノンを特殊召喚

はい終わり

じゃまた、オ・ルボワール（「きげんよつ）」

そういうて某怪盗のように去つて行つた

後日談だが、俺がレッドなんぞに2敗もといつていただき
また、O H A N A S H I してやるか
基、嫌がらせデッキでのデュエルだが

第4話 我流サイバー流 VS 万丈目 遊輝編（後書き）

今週は1話投稿です

第5話 主人公魔改造計画

S.i.d.e 遊輝

「おおい十代いるか」

万丈目とのデュエルから数日後
俺は十代たちの部屋を訪ねた

「なんだ遊輝が、デュエルするのか
するなら早くしようぜ」

「アニキー、アニキみたいなデュエルバカはそいつじゃないよ
で、遊輝君何しに来たんすか」

「おお、遊輝じゃないか、どうしたんだ今日は

「今日はちょっと十代に話があつてな」

俺はあるのデュエル以降、十代たちと仲良くなつた
いろいろと話しているうちに翔や隼人とも仲良くなつていた

「俺に？」

「やつぱデュエルか するなら早くやむつ」

「いやいやそれもあるんだがほかにもあるんだよ
ちょっと部屋に来てくれないか」

「わかつた、じゃその用事がおわつたらデュエルしようつ」

「わかつた

「じゃあ行くつや

話が終わつたので俺と十代は俺の部屋まで行く

「じゃあさつそくなんだが

お前のデッキのことだ

「俺のデッキ?

それがどうしたんだ

「いやちよつとな

お前最近強敵に勝つてはいるんだがかなりギリギリじゃないか
運よくいいタイミングでデッキが答えてカードが来てくれて
今は勝つていいけどいつか絶対に勝たなくてはいけないデュエルを
するときも来るかもしれない

その時に備えてデッキの強化を一緒にしないかって話だよ
カードは俺のやるからさ

「やうやう」とか

でも俺は今まで十分だと思つんだけだ

「おいおい

いつまでそのチートドローが続くのかわからないんだが

「チートドローってなんだよ

「それは置いてとこで

じゅあよつと」

「なんだそのでつかいケース
もしかしてそのケースの中身全部カードか？」

「その通り

「これを使って十代のデッキをまか……ゲフングフン改造するぞ」

「なんか嫌なこと言いつらうになつてなかつたか」

「氣のせいだ

「早速やるぞ」

危ない、危ない

「なんか言われた氣がするんだけどなあ
まあ、遊輝がそこまで言ひならやるか」

助かつたあ

「じゃ、やるか

「じゃあまずデッキを見せてくれ」

「わかった

「これだけどうだ」

「うーん

「スタンダートなE・HEROデッキだな

「だけどドロー系のカードとかいろいろ足りないな
例えば天よりの宝札これを入れるのはどうだ」

「天よりの宝札、すげえいい効果じゃねえか
サンキュー

といりでこのヒーローなんだ
エアーマン？見たことないけど効果はすげえ

「デッキサーチ系もお前のデッキには足りないからなやるぜ
あとこれなんてどうだ
フォレストマン デッキと墓地から毎ターン融合をサーチできる力
ードだ

おまけに守備力も高い」

「すげえ

こんなE・HEROがいたのか」

とここんな感じでデッキ改造が進んでいった

「ありがとな遊輝

お前のおかげでいいデッキが作れそうだぜ」

「なあに礼なんていらないわ

それより最後にこれ

最強クラスの融合で出せるE・HEROだ
出すのも簡単だしやるよ」

「え、いいのか

と言つたかこいつら全部効果がえげつない「えに召喚が簡単じゃねえか
ほんとサンキューな」

「だから礼はいらないうて
また今度デュエルしようぜ

お前のデッキ改造が終わつたらな

バタン

ドアを閉めた

「さあてこれからどうなるかな

第6話 クロノスの策略 √S 明日香 十代編（前書き）

魔改造十代√S ただの明日香

第6話 クロノスの策略 VS 明日香 十代編

Sideクロノス

シードー・ラ明日香が質問にすらすら答えてるーーの
それに比べてシードー・ル翔はダメダメですーーの
やつぱりオシリスレッドはダメダメですーーの
それにもドロップアウトボーリーは生意氣ですーーの
よくもわたしに恥を書かせてくれましたーーのね
このままで済むとおもつたら大間違いですーーの
口紅塗つてキスマークつけてこれで出来上がりーーの

「ぬほほほほ」

Side auto

Side 翔

「初めて会った時からあなたのことのが好きでした
今夜女子寮の裏で待つてます、天上院明日香」

やつたああむふふふふふふふ

夜

「まあ明日香様からのワープレーターですって」

「うん、えへへ、ねえ」

「ばつかね、オベリスクブルーの女王明日香さんが
あんたなんかにラブレターなんて書くわけないでしょ」

「嘘じやないよ、今夜女子寮の裏で待つてますって僕のロッカーに
ほり」

ガサガサと出して見せたら変な取り巻きにいたれた

「私」んな汚い字書かないわ」

「オシリスレッドの殿方はそんなことすらわからぬんですね」

「え、じゃいつたい誰が」

「あらこれ宛名が遊城十代になつていてるわ」

「え、え、嘘お
ほんとだあ」

ええ、アーキあてえ

「偽のラブレターにつられて」「のこのこやってくるなんて」「おまけに間違いだし」

「おちひみやお」

「ねえ」

「ねえ」

「「」の」とせ学校側に報告しましょ」

「お風呂を除くなんて破廉恥極まりないわ」

「だからのぞいてなって」

「みんなでねえうて何の調子」

「ああ」

おもこ

「いえ、なんでもありませんわ
おさわがせして申し訳ありません」

「やべ、ではみなさん早く部屋に戻つておやすみなさい」

「明日番さん」

「わたしにちよつと考へがあるの
誰かが遊城十代を痴漢に仕立てあげるために私の名をかたつて呼び
出そうとしたのね」

「

Side auto

面白こじやない

Side 明日番

「いづれあいつとは一戦交えなければと思つていたのよ
それに同じ遊輝という名を持つあいつとも

Side auto

Side 遊輝

丸藤翔は預かっているか

「十代急ぐぞ」

「ああ」

十代と俺は女子寮に言つた

話を聞く限りクロノスが原作同様やつたらしい
で、俺と十代が明日香とデュエルして一人とも買つたら解放する
か、やるか
とりあえず十代がさきにデュエルだ

船で十代と明日香が湖の真ん中に行つた

「いくわよ」

「おおし、来い」

「「デュエル」」

「わたしのターンドロー
エトワールサイバー召喚」

痴女が現れた

「さりにリバースカードを伏せターンエンドよ」

「次は俺のターンだドロー

俺はE・HEROプリズマーを召喚
E・HEROプリズマーの効果発動
デッキのバブルマンを墓地に送る

さらに融合を発動

プリズマーと手札のクレイマンを融合
現れよE・HERO アブソルートZero

あいつの効果いかに生かす

「さりにR・ライトジャスティス発動
その伏せカードを破壊するぜ」

「ドゥーブルパッセが」

「更にミラクル・フェュージョンを発動
墓地のバブルマンとクレイマンを融合
現れよE・HEROガイア」

もう明日香の負けか

原作よりはるかにあつさり

そしてあつとゆう間にけたがついたな

「ガイアにはこのカードが融合召喚に成功した時、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して

発動する。

このターンのエンドフェイズ時まで、選択したモンスター1体の攻撃力を半分にし、

このカードの攻撃力はその数値分アップする。とゆう効果がある
十代、新しいカードのまわりはどうだ」

「すげえよく回るぜ
遊輝サンキューな」

「な、遊輝のカード

あの見たことがないカードばっかだと思つたらあなたのだったのね」

「そうだ、それよりお前の負けだ」

「おつとそだつたエトワール・サイバーの攻撃力を半分にする
その後600ポイント攻撃力をアップさせるぜ」

E・HERO アブソルートZero 2500
E・HERO ガイア 2200+600=2800

エトワールサイバー 1200÷2=600

600 - 2500 - 2800 = -4700
4000 - 4700 = -700

後半1ターンキルか

「やつたな十代
次は俺が殺る」

「おこおかしな響きがしたぞ」

「きのせいだ

まつてろ、すぐその痴女から助けてみせん

「誰が痴女よ

ふざけないで

「あんな露出魔みたいなモンスター使っておこして何言ひてるんだ」

「へへ」

「アニキ助かつたす
ゆつせもがんばってくれっす」

「もううらんだ

さあやるわ、痴女

「だから、誰が痴女よ」

「だからお前だ

もう一回言わせるきか

この鬼畜女、あんな露出魔みたいなモンスター使っておこして何言つてるんだ」

「あれがサイバーガールよ

ああゆう見た目なんだからじょつがないでしょ

「言い訳はいいわけ

デュエルだ痴女

「いい加減にしなさい
痴女言うな」

「まあいいや
このとりやりも飽きてきたし」

「「デュエル」」

第6話 クロノスの策略 VS 明日香 十代編（後書き）

次回 遊輝の攻め

使用デッキは戦士族中心かアンティークフォートレスです
どっちがいいか感想に書いてくれたら多かつた方を使います

第7話 戦士対サイバー・ガール VS 明日香 遊輝編

「「デュエル」」

さて、この痴女どう滅ぼすか
ううん、よしリストクトデュエル
あれで行こうかな
いや、めんどくさいし
速攻でつぶすか

「先攻は俺がもうう
俺のターンドロー（成程、この手札なら3ターンかな）
モンスターをセット
リバースカードを2枚セット
ターンエンド」「

「私のターン、ドロー
(ここは一気につぶす)
融合発動

手札のエトワール・サイバーとブレード・スケーターを融合し
サイバー・ブレイダーを召喚する!」

赤と灰色の痴女

なんだよ、この痴女使い
もしかしなくとも、おもてではあんな風にふるまつてるけど
露出狂とかやだなあなんでそんなやつとデュエルを」

「失礼な

私は露出狂じゃない」

「心を読まれた？」

「遊輝、途中から声に出てたぞ」

「あ、そなんだ
どうでもいいけど」

「まあいいわ

サイバー・ブレイダーで伏せモンスターを攻撃

馬鹿め、馬鹿め、馬鹿め
なんでそんな単純かね

「な、ビッグ・シールド・ガードナーですって
つぐ、500ダメージ」

そう、ビッグ・シールド・ガードナーの守備力は2600
サイバー・ブレイダーの攻撃力は2100
よつて500の反射ダメージ

「つぐ、私はカードを2枚伏せターンエンド」

はい終わり

「俺のターンドロー
フォトン・ケルベロスを召喚

こいつの効果によつてお前はこのターントラップを発動できない
俺もだけど」

「なんですか？」

「そして、速攻召喚発動
ビッグ・シールド・ガードナーを生贊にコーコロイドを召喚」

「コーコロイド、僕と同じロイド系のカード？」

「さらに、俺は超融合を発動

このカードの効果は手札を一枚捨てる。
自分または相手フィールド上から融合モンスターカードに
よつて決められたモンスターを墓地へ送り、
その融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。
このカードの発動に対して、魔法・罠・効果モンスターの効果を発
動する事はできない。

だ」

「それってどういふこと

「うるさいことだ

俺は自分フィールドのコーコロイドと痴女のフィールドのサイバ
ー・ブレイダーを融合
こい、コーコロイド・ファイター」

「な、私のサイバー・ブレイダーが
あと痴女っていうな」

「コーコロイド・ファイターの攻撃力と守備力は
素材にしたモンスターの合計だ
つまり2100+1200で3300」

「…………」（あります）

「はこ終わり

「一つオロイド・ファイターとフォトン・ケルベロスでダイレクトアタック」

3500 - 3300 - 1300 = - 1100

「じゃあ、翔は返してもらひば
十代やねに帰るから、早く帰れよ」

「お、お！」

次はビーンなゲッキでヒューホルしようかな

帰宅後、夢の中

「久しふりじやな」

「あ、神（笑）さんじやなこですか
何のようすですか」

「（笑）はこいら「早く要件言え」わかつたから殺氣を向けるのやめてくれんかの
では、いうが、その世界に紛れ込んだあるカードを手に入れてほし
いのじや

見つけた後はどうするかはそっちの判断に任せ
自分で所持するのもいいし、わしにわたすのも構わん

「分かりました

で、そのカードは？」「

「光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）じゃ
精靈が宿っている
そのカードの回収の理由はその精靈の力じゅ
力が強すぎたので、マニアの羽と言えば分るかの」

「やうやう」とですか

光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）その回収理由
は大体わかりました

では、そのカードは私があずかっていいんですね」

「わかった、ではな

そのカードは漫画で埋まっていたといふにいる

頼むぞ」

次の日

俺は家を5時に出て光と闇の竜（ライト&ダークネスドラ
ゴン）の回収に向かつた

「たしかに」と

掘つてみると、やつぱつあつた

「ギヤアアアアアアアオ」

光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）の精靈が現れ
た、しかもなぜか暴れているし
わ、急に人型に

え、ブラック・ジャック？

縫い目ないけどブラック・ジャック？

「デュエルウウウ」

え、デュエル？

え、もしかしてデュエルで勝たないといけないの？
まあ、勝てるだろうけどさ

「分かったデュエルだな
やるから落着け」

「デュエルウウウウ」 「デュエル」

第7話 戦士対サイバー・ガール ▶S 明日香 遊輝編（後書き）

まさかのデュエル

光と闇の龍（ライト&ダークネスドラゴン）▶S 遊輝

第8話 ドラゴンの戦い VS 光と闇の竜（ライト&エム・ダークネス）

今日は漫画のみで出たカードがかなりです

第8話 ドラゴン軍団との戦い √S光と闇の竜(ライト&ダークネス)

Side 遊輝

「デュエルウウウ」「デュエル」

「俺のターンから行くぜ

俺はE・HEROフォレストマンを守備表示で召喚
カードを2枚伏せターンエンド」

「ワレ タアアアアン

マホウ ハツドオオオオ コウリュウノキラメキ
テフダ ドラゴン 2マイ ステル
デッキ ヒカリ ドラゴン ショウカアアアアン」

な、あいつはライトハンド・ドラゴン
確か、あいつはシンクロだつたはず
そうか、漫画では効果モンスターだった
とゆうことは漫画万丈田デッキか

「レッド・ワイアーム ショウカアアアアン
ライトハンド・ドラゴン コウカ ハツドオオオ
コウシユ 500サゲ アイテモンスター コウシユ
ガル
ライトニングギャラクティカアアアア
」

つぐ、フォレストマンが

「レッド・ワイアーム フォレストマン コウゲキ」

「ヒーローバリア発動

効果により戦闘を無効化

「ライトニング・ドラゴン、ロウゲキ
シャイニングブレスウウウウ」

「ヒーロー・シグナル発動

フォレストマンは破壊されるが効果によりクレイマンを守備表示で
特殊召喚

「カード 1マイ セットオオオ
ターンエンドオオオオ」

「俺のターンドロー

俺は強欲な壺を発動、2枚ドロー

俺は融合を発動

手札のスパークマンとフィールドのクレイマンを融合
來い、E・HEROサンダー・ジャイアント
手札を1枚捨てレッド・ワイアームを破壊

「レッド・ワイアーム ハカイ プレイヤー 500ダメージイ
イイ」

「つぐ、ライトニング・ドラゴンにサンダージャイアントで攻撃」

「トラップ ハツドオオオオ

リュウノキリン ジブンフィールド ドラゴン テフダ モドス
ドウレベル ドラゴン テフダ ショウカアアアアン
ゴイ ダークハンド・ドラゴン」

「つぐ、攻撃をやめ、カードを2枚ターンエンド」

「ワレ ターン ドロー
ダークエンド・ドラゴン コウカ ハツドオオオ
コウシユ 500サゲ サンダージャイアント ハカイ
ダーククライシスウウウ」

サンダージャイアントが

「サラニ ゴウヨクナツボ ハツドウ 2マイ ドロー
マホウ ハツドオオオ コウリュウノキラメキ
テフダ ドラゴン 2マイ ステル
デッキ ヒカリ ドラゴン ショウカアアアアン」

まづい ライトとダークが出た

「ダークエンド・ドラゴン コウゲキ
ダークパプティズムウウウ」

「ぐわああああ」

つく

4000 - 2100で残り1900か

マズイ

「コレテ トドメダアアアア

ライトエンド・ドラゴン コウゲキイイイ
シャイニングブレスウウウ」

「速攻魔法発動

ライトエンド・ドラゴンの元々の攻撃力をエンドフェイズ時まで半分になる。」

「ソレデモ コウゲキ トオル
ノコッタ ライフ ワズカ
オマエ ナニ デキル」

$$1900 - 2600 \div 2 = 600$$

「そんなことわからないぜ

俺のターンドロー

俺は命削りの宝札発動

効果で自分の手札が5枚になるよう、自分の「チック」からカードをドローする

「コノ タイミング ドロー?」

「ライトニングボルテックス発動

手札を1枚捨て、お前の場のモンスターをすべて破壊

E・HEROフェザーマン召喚

ミラクルフュージョンを発動、フィールドのフェザーマンと墓地のバーストレディを融合

来い、フレイム・ウイングマン

更に2枚目のミラクルヒュージョンを発動

フレイム・ウイングマンと墓地のスパークマンを融合

来い、シャイニング・フレア・ウイングマン

こいつは、攻撃力が、自分の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカード1枚につき300ポイントアップする。

墓地には3体のE・HERO

よつて攻撃力は3400

更に伏せていた装備魔法発動

団結の力をシャイニング・フレア・ウイングマンに装備
これでシャイニング・フレア・ウイングマンの攻撃力は4200
いけシャイニング・フレア・ウイングマン
シャイニング・シート

「ギャアアアアア」

4000 - 4200 = - 200

つく、危なかつた

それより、ブラックジャックが倒れた
と思つたらカードの中に入つて行つた
よし、持つて帰るか

その日の放課後

光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）が起き俺はい
きさつを話した

俺の正体

ここがお前の世界とは異世界だとゆうこと
お前の主は性格が全然違うこと
そして、この世界の遊城十代やハネクリボーのこと
そして

「お主が今日から我的マスターと云ふことでいいのだな

「ああ、これからよろしく」

「ああ、よろしく頼むぞ新しきマスター

この世界のマスターのしもべになるのは我には無理だ」

「分かつていい」

「では、人間体になつておいで
ドラゴンのまま、小さくなれる」ともできるがマスターはどうちらがいい

「アーリアのまま小さくなつてこてくれ」

「分かつた、マスター」

そうゆうと

光と闇の竜（ライト&アーリア・ダークネスドラゴン）はそのままハ
ネクリボーほどの大ささにしたよくなつた

「じゃあ、行くかライネス」

「ああ、マスター」

第8話 ドラゴン軍団との戦い √S光と闇の竜（ライト&・ダークネスドラゴン）

光と闇の竜（ライト&・ダークネスドラゴン）の名前はライ
ネスです。

これから的是っキでたまに出できます。
感想待つてます。

それと出してほしい精霊・カードがあつたら書いつけてください。
できる限り善処します。

これからも精霊はたまに増えます。
ここからはネタバレになるので少し間をあけます。

セブンスターZ編で最低3体精霊を増やします。

第9話 万丈目の逆襲 十代VS万丈目

Side遊輝

「翔、十代は？」

「起きなかつたからしじうがなくおいてきたつす」

「そりなんだなあ
俺たちも遅れそりだつたからおいてきたんだなあ」

「そりなのか

今日は月一テストの日
原作通りだと今頃

Side auto

Side十代

「おおおお

遅刻だ、遅刻だ、遅刻だ

「つづん

「遅刻だ、遅刻だ、遅刻だ」

あの人

「ああ、俺はもう弱いんだよなあ

「手伝ひばりがござる」

「遅刻しちつよ、今日はテストなんだ」

「遅刻がなんだよ、困つてこらおばさんを見過しちゃう

あ、あぶねえ

「おおおお、坊や」

「先の事なり何とかなるぜ、俺は任せ
な、任せはせ

「すまないねえ」

そんなことねえぜ

とつあえず今はおぼれを手伝つ

Side auto

Side 遊輝

と、こんな感じだな
じやあテストやるか

.....

なんだここの問題

簡単すぎる

- 1問目　この学校のクラス
オシリスレッド・ラーイエロー・オベリスクブルー
この元となつたカードたちのことを何という？

答えは三幻神だろ

ついでに言うならオシリスの天空龍・ラーの翼神龍・オベリスクの
巨神兵だろ

- 2問目　デュエルには特殊な勝利条件をもたらすカードがあります
それを一つ答えなさい

答えは封印されしエクゾディア・ウイジヤ板・終焉のカウントダウ
ンとかだろ

封印されしエクゾディアはエクゾディアパーザがすべて手札にそろ
うことが条件

ウイジヤ板は死のメッセージがすべてフィールドにそろひつことが条件
終焉のカウントダウンは20ターン経過が条件
と有名だしなめてんのか

- 3問目　次のうちドラゴン族モンスターを選びなさい

- A マスクド・ドラゴン
- B クリボー
- C ワタボン

いやいやいや

ドラゴンってもはや名前に入ってるし
どう考へてもAだろ

4問目 ブラックマジシャン・ガールは誰の「テッキ」にしか入っていない？

一応俺も持っているけど

武藤遊戯だよなあ

もしかしてこの程度の問題なのかデュエルアカデミアの問題って

とこんな感じで問題を解いていったわけだ

そうすると

原作通り十代が入ってきて

原作通り万丈目と言い合いになつて

原作通り空氣と痴女にみられて

原作通りパックを買いに行つて

原作通りクロノスが新パックを買い占めて

原作通りトメさんに翔と十代がパックもらつて

違つたことといえば遊輝、つまり俺も十代に聞かれて新しいのはいらないって答えたことくらいかな

そんでしばらく時間が飛んで

「えええ

なんで万丈目と俺がデュエルを」

「入学試験であれほどの成績を残した君と

オシリスレッドの生徒とはつりあいがとれないーノです

そこでシニヨール万丈目こそが君の相手にふさわしいと判断いたしましたーノです

もちろん君が勝てばライエローに昇格することになります
ですがいかがですかーノ遊城十代君

「の申し出受けの氣になりますーの」

「で、本音は」

「それはシーコール万丈田にドロップアウトボートで何を言わせようとしているーノですシーコール石崎」

「うう」

「いいぜ

俺、いろんな奴とデュエルをやってみたいどんな奴からの挑戦でもつけたいんだ！！

「ならば、シーコール万丈田とのデュエルを受けるーノですね」

「よし」のまえのはまぐれだと証明してやる

「「デュエル…」」

「行くぜ万丈田…！」

「万丈田さんだ」

「俺の先行ドローー」

(クリクリー)

「ハネクリボーカ

(最初から来てくれるとは心強いぜ

なら)

E・HEROのクレイマンを守備表示で召喚
カードを2枚伏せるターンエンドだぜ」

「雑魚ぞろいの駄目ヒーロー『テッキめ

お前のもろさを見せてやる

俺のターンドロー」

ああ、オジャ万丈目

調子に乗ってる

まいつか、どうせ一夜の夢ほどはない幻想なんだから

「（いきなりクロノス教頭からもらつたレアカード）
俺はマジックカード打ち出の小槌を発動」

「何」

「このカードと手札の中のいらないカードを『テッキに戻しシャツフ
ルし新たにその枚数分ドローする

そして俺は」

「え、4枚もカードを取り換えるの？」

「自分の手札からいらないカードを捨て新たにカードを入れ替える
ことができれば

手札に好カードが入る確実が高くなる」

今のセリフは「え、4枚も……」が翔でその下が空氣だ

「しかも打ち出の小槌は使い捨てのカードではない

何度も「デッキに戻ること」により何度も俺の手中に入る

再び打ち出の小槌を発動

打ち出の小槌ともう一枚のカードを「デッキに戻し再び2枚をドローする

いですよ」^{ヴィ} - タイガー・ジェット攻撃表示で召喚

「更に手札から永続魔法前線基地を発動

ターンごとに一度手札からレベル4以下のモンスターを一体特殊召喚することができる

このターン^{ダブル}W - ウィング・カタパルトを^{ヴィ}攻撃表示で特殊召喚^{ヴィ}でよ^{ダブル}W - ウィング・カタパルトそしてV - タイガー・ジェットヒ

融合

うわ、名にこの旧型ロボットアニメ的合体
ふるいわあ

「VW^{ヴィダブル} - タイガー・カタ「その瞬間トラップ発動奈落の落とし穴、
そのモンスター除外してもらひぜ」なんだと」

お、十代

こんな仕掛けたのかあいつもずいぶんガチ「デッキに近くなった
もんだな

「俺のVW^{ヴィダブル} - タイガー・カタパルトが
つく、カードを1枚伏せてターンエンド」

あちこちから万丈目真面目にやれとかヤジが飛んでる

「俺のターンドロー

万丈目、また勝たせてもらひぜ

大嵐発動、さらに苦渋の選択発動
俺が選ぶのはこの5枚だ」

E・HERO スパークマン2枚とE・HERO フュザーマン2枚
それにE・HERO バーストレディ1枚

「E・HERO バーストレディを手札に加えろ

「さらに強欲なツボを発動2枚ドロー

天使の施し発動3枚ドロー手札を2枚捨てる

ミラクルフュージョンを発動墓地のE・HERO バーストレディ
とE・HERO フュザーマンを除外しE・HERO フレイム・
ウイングマンを召喚

更にミラクルフュージョンを発動E・HERO フレイム・ワイン
グマンとE・HERO スパークマンを融合

E・HERO ^{H・レメンタルヒーロー} シャイニング・フレア・ウイングマンを召喚

効果により俺の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカード1枚につき攻撃力を300ポイントアップ
そして墓地には3枚のE・HERO

攻撃力900アップだ

「…………攻撃力3400……」「…………」

うるさい

その程度で騒ぎやがつて

「そして手札からハネクリボーを召喚」

「…………かわいい…………」

「つるやい

「命削りの宝札を発動

手札が5枚になるようにドロー
進化する翼を発動

ハネクリボーと手札2枚を墓地に送り

ハネクリボーをハネクリボー LV10に進化

更に墓地に送ったカードにE・HEROと名のついたカードが一枚
いたのでE・HERO シャイニング・フレア・ウイングマンの攻

撃力は3700

「…………」 攻撃力3700……」 「…………」

「E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマンで攻撃
シャイニング・ショートオオオオオオオオ——」

「うわあああああ——」

4000 - 3700 = 300

「いくぜ相棒
ハネクリボー LV10で攻撃」

「うわああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ

300 - 300 = 0

「ガツチャ、楽しいデュエルだつたぜ
あと、校長先生
俺はオシリスレッドが好きなんだ
ラーエローにはならないぜ」

「そうですか

分かりました、では改めて勝者遊城十代」

「「「「「うおおおおおおおおおおおお」」」」

で、十代戦が終わったわけだ
ちなみに俺はモブキャラと戦つて勝つたぜ
もちろん圧勝
つて俺は誰に話しているんだ？

第10話 間のデュエル（笑） 十代VSタイタン

Side遊輝

これはある男の話だ

この男は学生だった

いつものように学校に行つた
いつものように授業を受けた

しかし用事があつて帰るのが遅れてしまった

その男はようがなくいつもと違つ道を通ることにした

それは公園の中を突つ切る道だ

その公園に入つたとき何かが変わつた

周りに何もないはずなのに何か重圧感が

周りで風が吹いてなく

季節は夏なのに背筋に寒気が

何よりも見えてる光景がおかしい

「いつたいなんなんだ、これは
なんなんだよ」

男が見たものそれは

いくつもの死体の山と
それを上から見下している男

男は驚いた

そして男が顔を向けた時更に驚いた
だが驚いたのは一瞬
すぐに気絶をしてしまった

男が見た男の顔は

男自身だった

あとで分かった話だが

その公園は昔の死刑場の跡地の上に作られたらしい
そしてそこで死刑執行を男の先祖がしていたそうだ

だからかもしれない

あんな死体の山を見たのは

「で、どうしてそんなに震えている

この程度の話の一つや二つ、誰でも知っているだろう」「

今俺らがしているのは
ちょっとしたゲームだ

カードの束からカードを引いて

そのカードのモンスターのレベルと同じだけ怖い話をするというもの
あれら、タイタン戦前のヤツだ
え、なんでそんなこと覚えているって

転生者歴が長いんだから記憶もあいまいになってるんじゃないかな
って

まあ普通はな

実はライネスの時の話だ

ライネスっていうのはライト&ダークネスドラゴンの俺の
相棒の精靈だ

この小説内の出番はまだろくにないがいつも仲良くしている
この世界の十代やハネクリボーとも仲良くなつたみたいだ
まあ、そのことは置いておいて

あの時ライネスがこの世界に来てしまつた理由が原因だ

どうやらあの神（笑）がやらかしたらしい

それで俺はさらなる褒美の一つや一つあつてもいいんじゃないかと
思つたわけだ

そして髪（誤字に非ず）の近くにいた天使たちも俺の意見に納得して
くれて

嫌がる紙（誤字に非ず）を調べ、じゃなくて肉体G、じゃなくてご
うご、じゃなくてO H A N A S H I したわけだ

具体的に言うとアイアンメイデンとか電氣椅子とかギザギザの板の
上で正座させて石を乗つけていくやつとか火あぶりとか拷問車輪と
か運命の輪とか人間サンドバックとかetc

ま、天使さんの方が思い切りやつてたけど

ラジエルさんとか最後に行くときはもうどこぞの悪役見たく

わああああは、は、は、はとかそんな感じで馬鹿笑いしていたわけで

ほんとストレスたまつていたんだなラジエルさん

ご愁傷様ですって思つたりして

少し脱線したけど

それで新たな能力をもらつたわけだ

それは転生前のものを含むすべての記憶の絶対記憶

今後一瞬でも見たものを完全に覚える瞬間記憶能力

いくら覚えて也要領に余りができる圧倒的な脳の容量

そして覚えたものの中から必要な記憶を引き出す星の本棚の縮小版
みたいな能力

これらの能力をもらつた

今まで話さなかつたのは使う機会がなかつた

それだけだ

ちなみにこんなにもらえたのは天使さんのおかげ
具体的には言わない

バイハー もめじやない位グロかつた

言えるのはそれだけだ

「そんなことないっすよ

その話マジで怖いっす

むやみに人に話さない方がいいっすよ遊輝君
呪われるっス」

「そうなんだなあ
その話はやばいんだなあ」

「ああ、さすがの俺もビビッたぜ」

「やうか、今考えたんだが

「……はー?」

とそんな話をしていると

「おやおや、なんだか楽しそうなことをしてゐようぢやない?」

出た、大徳寺基アムナエル

今思えばテレビでなんでこんな都合がいい時に出てきたのか不思議
に思つ

「どれどれー？ つと……これはビリコウホールなんですか」「やー？」

「えっと、山の中から一枚引いて、そのモンスターカードのレベルに心じた怪談をするんです。」

と、二つの間にか翔が説明をしていた

「じゃあ私も」「いや？」

「」「「おおつー！」」「」

レベル12、『F・G・D』ハライフ・グラン・ダブルを引く

原作通り廃寮の話を先生がし

原作通り俺がいることを除けば廃寮に行くことになった

時は流れ

次の日の夜

「つおおおおお、すっごえ……」

「ひー……アーキー、やめとこいつよ探検なんて……
もし呪われちやつたりしたらどうするのやー。」

「や、そなんだな十代。や、やめておいたほうが、い、いこと、
思うんだな」

すると痴女が来た

「あ、痴女だ」

「誰が痴女よ

あなたたちは何をしているの

この廃寮は立ち入り禁止よ?」

「あ、アーチキ、立ち入り禁止だつて。じゃあ本當にやめとこたまつ
がいいよ~……」

「俺はまだでもことと黙つたまじな

「何言つてるんすか
立ち入り禁止つすよ」

「もうなんだなあ

怖いのは嫌なんだなあ
それ立ち入り禁止だしあはづけられないと黙つたまじなあ

「別にいいじゃないか

犯罪はばれなきや成立しないつて言葉もあるし

「「「それは犯罪者の理屈つす（理屈なんだなあ）」」

と、俺らが話していくと

「じゃあ明日番は、そんな立ち入り禁止の寮の前で何してたんだよ」

「私は……」

「兄が、ここで行方不明になつたの
こいつが帰つてくるんじゃないかつて……だから、レバント花を飾

つてゐる」

「行方不明だつて……！？」

「それなら、こいつよつ。俺たちは、その手がかりを探すために、あの廃寮へ行く。

遊びじゃなく、捜索なら立ち入り禁止の場所に入つたつて、そういう文句も出でこないと思う子など……？」

「ダメよ。クロノス先生がこのことを見つたら、目の仇にされるる十代は、

きつと何らかの処分を喰らひつくなるわ」

「…………よく言つじやないか。『バレなきゃ犯罪は成立しない』つて」

「アニキもー？」

と話していると

原作通り明日香があきらめた

原作通り廃寮に入る

原作通り10JJOHNと書かれた天上院吹雪の写真を見つける

原作通りエトワール・サイバーのカードを見つける

原作通りタイタンとデュエルする場所に行つた

原作通り十代とタイタンがデュエルすることになつた

んだが

今の十代ならタイタンなんて瞬殺だろう

「「デュエル」」

「先手を取らせてもらおう、ドロー

私はインフルノクイン『デーモンを攻撃表示で召喚』

「デーモンテックキか

「このカードがフィールドに存在するとき
デーモンと名のついたモンスター一体の攻撃力を1000ポイント
アップする」

「え

「つて」とは

『デーモン』がつなりをあげ攻撃力を上げる

「確かにデーモンテックキは強力なデック
だが場のモンスターを維持するためにスタンバイフェイズごとにラ
イフを払い続けるというでつかい代償がつくぜ」

十代、それはフラグだ

まあ、今の十代には関係ないか

「ふつふつふ、代償だと？

そんなものは必要ないのだが、このカードの前ではな
フィールド魔法発動」

まぶしいな

演出はもうちょっとと考えてくれ

「なんだ？」

いい趣味してるな

このフィールド魔法

翔たちはうるたえてるな

「さしそうめ地獄の一丁目（パンティモニウム）とでも言つておこいつか

私はフィールド魔法 万魔殿（パンティモニウム） - 悪魔の巣窟 - を発動した

「パンティモニウム？」

「そつこのカード」により
デーモンデッキを維持するコストは発生せず
デーモンと名のついたモンスターは戦闘以外で破壊されたとき
転生する能力を得るのだよ
さあ、お前のターンだ

おっとこの娘が気になるようならお前の田に入らぬよつとしてやる

赤い骨のようなものが出てきて
痴女の入った棺桶を沈めた

「明日香！－」

「汚いぞ」

「卑怯者」

「なんとでもいえ、これが闇のゲームだ
なんならお前たちも消してやるつか！－」

「いやこれでいい

「 「え」 」

「十代が本気になった
昔の十代だったらきつかったかもしれないが今の十代ならどうだ？」

「成程、今のアーティなら」

「俺はだんだん相手がかわいそうになってきたんだなあ」

「俺が勝てばいいんだ、ドロー
俺は大嵐を発動」

「なに！」

私の《万魔殿^{パンデイモニアム} - 悪魔の巣窟 -》があ

「さらりに苦渋の選択を発動
俺が選ぶのはこの5枚だ」

万丈目戦と同じE・HERO スパークマン2枚とE・HERO
フェザーマン2枚
それにE・HERO バーストレディ1枚

「E・HERO バーストレディを手札に加えろお」

「2枚目の苦渋の選択を発動
今度はこの5枚だ」

E・HERO ワイルドマン2枚
E・HERO ハーメンタルヒーロー^{ハーメンタルヒーロー}
E・HERO フオレストマン2枚

E・HERO クレイマン1枚

「E・HERO クレイマンを手札に加えるお」

「3枚目の苦渋の選択を発動
最後はこの5枚だ」

E・HERO バブルマン3枚

E・HERO ネクロダークマン2枚

これはまさか俺が考えた十代が使用している中で最も凶悪なあのコンボか？

「しつこいでおE・HERO ネクロダークマンを手札に加えるお」

「俺は融合を発動

手札のE・HERO バーストレディとE・HERO クレイマン

そしてE・HERO ネクロダークマンを融合
来いV・HERO トロニティー」

あ、決まった

「VJのカードが融合召喚に成功したターン、

このカードの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になるぜ
代わりにダイレクトアタックはできないけどな

だけど、さらに命削りの宝札発動

5枚ドロー

更に強欲な壺を発動する

2枚ドロー

今度は天使の施し発動3枚ドローし2枚墓地に送る

手札抹殺を発動

7枚の手札を捨て7枚ドロー

手札のE・HERO エッジマンをE・HERO

エレメンタルヒーロー

ネクロダークマ

ンの効果で生贊なしで召喚

更に二重召喚

デュアルサモン

エレメンタルヒーロー

2体目のE・HERO エッジマンを2枚目のE・HERO

エレメンタルヒーロー

フレイム

ロダークマンの効果で生贊なしで召喚

ミラクルフュージョンを発動墓地のE・HERO バーストレディ

とE・HERO フェザーマンを除外しE・HERO フレイム・

ウイングマンを召喚

更に2枚目のミラクルフュージョンを発動E・HERO

エレメンタルヒーロー

フレイム・

ウイングマンとE・HERO スパークマンを融合

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマンを召喚

効果により俺の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカーボ一枚につき攻撃力を300ポイントアップ

墓地には22枚のE・HERO

攻撃力6600ポイントアップだ

そして2枚目の命削りの宝札発動を発動

手札が5枚になるようにドロー

3枚の一族の結束を発動

このカードの効果は自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が

1種類のみの場合、自分フィールド上に表側表示で存在する

その種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップするだ

よって俺の場のすべてのモンスターの攻撃力2400ポイントアップ

更に団結の力2枚をE・HERO シャイニング・フレア・ウイングマンに装備

攻撃力6400ポイントアップ

場を整理すると

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン

2500+6600+2400+6400=17900

HERO × ハジマン×2 ハジマンタルビーロード

$$2600 + 2400 = 5000$$

V・HERO トライヒー

$$\begin{array}{r}
 2500 \\
 \times 2400 \\
 \hline
 7400
 \end{array}$$

「な、
な」

ああ、タイタンはここにいる

151/2

全員で攻撃だ！」

$$\begin{array}{r}
 40000 \\
 -19000 \\
 \hline
 11000 \\
 -10000 \\
 \hline
 1000 \\
 -900 \\
 \hline
 100 \\
 -90 \\
 \hline
 10 \\
 -10 \\
 \hline
 0
 \end{array}$$

わ
す
ご
い

原作の「離れて」

十代のデッキなんて1枚も残ってないぜ

すごい悲鳴

「」愁傷様つす

「」愁傷様なんだなあ

「明日番は返してもいいが

あ、逃げた

「待て」

な、これは
今はデュエル中じゃないぞ
なんで足元のウイジャの目が光っているんだ

第10話　闇のデュエル（笑）　十代VSタイタン（後書き）

今回十代が使つたデッキのコンセプトは
墓地にカードを送りまくつて E・HERO^{エレメンタルヒーロー} シャイニング・フレア・
ウイングマンの攻撃力を上げるというものです。
はつきり言つて十代だからこそのまでまる。

第1-1話　闇のテュエル　VS闇よつ深き深淵よつこでし者（前編）

注意 アスラクラインではありません。

第1-1話 閻のテュエル VS 閻よつ深き深淵よつてでし者

S·i·d e 遊輝

何故ウイ・ジヤの目が光っているんだ
最初に俺が思ったことはそれだった
その後気づいた時には行動を俺は起こしていた

「翔！－隼人！－十代！－

早く逃げろ！－

こいつはタイタンの偽モンの闇じやない
本物だ、取り込まれるぞ！－

「「「「どうこう」とつすか（なんだなあ）（だ）」「」

そんな」といつてゐつた俺と十代
そしてタイタンが闇に取り込まれてしまつた

「な、なんだ一体？」

「「「これは……何が起つたのだあ？」

「闇だ

おそらくさつきのテュエルが原因だろ」

「なんだとお」

「ところで遊輝はなんでそんなことを知つているんだ？」

「本物の闇のデュエルをしたことがあるからだ……」

「なんだと

闇のデュエルは実在したのか。」

「ああ、おそらくそのうち闇が俺らを
あ、危ない」

謎のバケモンがタイタンに襲い掛かつてきたのを俺が助けた

「気をつける

」「こいつら俺らを食う氣だぞ、一か所に集まるんだ」

「分かった」

近寄つてくる闇をハネクリボーが追い払っていく
しかし力がやはり足りない

「ライネス、頼む」

「分かったマスター」

そういうとライト&ダークネスドラゴンのライネスが現れる

「ドーラゴンー？」

「俺の相棒の精霊だ

十代は眞の姿見るのは初めてだつたな

「ああ、こんなにでかかったのか」

そんなこんなで闇から逃げていると
たくさんの闇が一か所に集まっていた

「なんなんだ
一か所に集まつていいくぞ」

「なんだあ
黒いのが固まつていいくぞ」

黒いのが固まつていいく
人のか

な、あれは
そんな馬鹿な

「デュエル」

「デュエルをしろといふのか
ならおれがやる」

「遊輝」「小僧」「マスター」

「心配するな
絶対に負けない
それに勝たないと帰れそうもないし」

「分かつた、気をつけろよ」

「もちろんだ

「デュエル」

相手が闇なら遠慮することはない
まがい物とはいえ力がこもつているこのカードを使つぞ
相手の姿がドーマなのも気になるしな

「私のターンドロー

私はフィールド魔法オレイカルコスの結界を発動」

オレイカルコスの結界だと

そんな馬鹿な

なんであのカードが、いや一つ心当たりがあるな
あのバカ神があああああああああああああああああ
あああああああああああああああ
なんてミスしてくれたんだ

ヤバい

これは本格的にいかなくては

「オレイカルコス・ミラーを発動

手札のレベル4オレイカルコス・ギガースを2枚墓地に送り
ミラーナイト・コーリングをデッキより特殊召喚
ミラーナイト・コーリングの効果により
ミラーナイトトーケンを4体特殊召喚
さらにミラーナイトトーケンに銀の盾カウンターを乗せる

ターンエンド」

ミラーナイト・コーリング 攻撃力 $0 + 500 = 500$
ミラーナイトトーケン×4 攻撃力 $0 + 500 = 500$

「なんて高速展開だ

遊輝がんばれ

「頼むぞ小僧」

「遊輝と呼んでくれタイタン」

「わかった、頼むぞお遊輝」

「もちろんだ

俺のターンドロー

エルフの剣士を召喚

そして「ライフを1000ポイント払いレジェンド・オブ・ハートを発動

「レジェンド・オブ・ハートだと

きさま名もなき龍に選ばれたものか」

「知らない！」

レジェンド・オブ・ハートの効果によりデッキから「ティマイオスの眼」「クリティウスの牙」

「ヘルモスの爪」をそれぞれ一枚ずつゲームから除外しデッキの「ティマイオス」「クリティウス」

「ヘルモス」をそれぞれ1体ずつ特殊召喚

「なんだこのモンスターあーたちは
見たことがないぞ」

「精霊は感じないが強い力を感じる」

「マスターこのカードは

「細かいことは気にするな

速攻召喚発動

手札の幻獣王ガゼルを召喚

更に命削りの宝札を発動手札が5枚になるよひでロード

2枚目の速攻召喚を発動

2体目の幻獣王ガゼルを召喚

3枚目の速攻召喚を発動

2体の幻獣王ガゼルを生贊にブラック・マジシャンを召喚

現れる黒衣の魔術師

十代とタイタンはブラック・マジシャンの登場に驚いている

「「ブラック・マジシャン！！」」「

「更に強欲な壺発動2枚ドロー

師弟（してい）の絆（きずな）を発動

デッキからブラック・マジシャン・ガールを特殊召喚

今度現れたのは黒衣の魔術師ブラック・マジシャンの弟子
ブラック・マジシャン・ガール

「「ブラック・マジシャン・ガール！！」」

「ブラック・マジシャン・ガールは遊戯さんのデッキにしか入って
いないはず

遊輝はなんで持ってるんだ

「デッキに入れてるのか遊戯さんしかいないだけだろ
世界に一枚じゃブルーアイズや神並みのリア度だぞ」

「それもそう……なのか？」

「まあいい、さらに2枚目の命削りの宝札を発動
ティマイオスの 眼（まなこ）を発動
効果によりブラック・マジシャン・ガールを墓地に送り
来い、竜騎士（りゅうきし） ブラック・マジシャン・ガール」

ブラック・マジシャン・ガールは進化し
ティマイオスに乗った鎧を着たブラック・マジシャン・ガール
竜騎士（りゅうきし） ブラック・マジシャン・ガールが現れる

「なんなんだあ
あのカードたちはああんなカード見たことないぞお」

「なぜ、お前なんかが名もなき三龍を従えているのだ
しかも世界に1枚しかないはずなのに」

「いつとぐが「ピーチじゃないぜ」

一度整理してみよう

自分の場

竜騎士（りゅうきし）	ブラック・マジシャン・ガール	攻26
00 守1700		
ブラック・マジシャン	攻2500	守2100
ティマイオス	攻2800	守1800
クリティウス	攻2800	守1800
ヘルモス	攻2800	守1800

「ライトニングボルテックスを発動

手札を1枚捨てミラーナイトトーケン4体とミラーナイト・ゴーリングを破壊」

「だが、ミラーナイトトーケン4体は鏡の盾カウンターを1個取り除くことで

破壊を免れる」

「なら、2枚目はライトニングボルテックスを発動
今度こそミラーナイトトーケンを破壊」

「なんだと」

十代たちも「唖然としている

「これが遊輝の本気?
うおーーーすぐえたたかいてえぜ
こいでたら遊輝デュエルだぞ」

「分かつたよ

だがこのデッキを含むいくつかのデッキは闇のデュエル専用だからな
俺のメインデッキとだ」

「おまえらあ

少しば場所を考えるお

いい加減私もおこるぞおお

「わあつたよ、ヘルモスの効果でデッキのモンスターを3枚除外
このターン3回攻撃ができるようになる
行くぞ止めだ

全員で攻撃いいいいいいいいいいいいいいいいいい

-	4
6	0
7	0
0	0
-	2
3	8
9	0
0	0
-	2
8	0
0	0
-	2
8	0
0	0
-	2
8	0
0	0
=	-
-	1
5	1
0	0

ドームの形をしたものは砕け散り
そこに光が差し込んだ

「マスターあそこが外につながっています
急いでください」

「行くぞ十代、タイタン」

「ああ、わかつた」 「分かつたぞお」

そして俺たちは闇の中から脱出した

そのあとのことば
だいたいの形を話そん

まず翔と隼人に説明をした

半信半疑だったが中で起きたことを信じてくれた

理由は十代の説得と俺のフラック・マジシャン・ガールのカーデだ
次に目覚めた明日香にも説明した

その際タイタンが明日香に土下座をしているのがシユールだつた
そのあとはタイタンと話し合ひ
タイタンが似非闇のデュエリストをやめること
次にその技術を生かし別の仕事に就くことで見逃すことが決定した
のだが

「何故私はここにいるのだあ

石崎遊輝」

そう今、タイタンは俺の部屋にいる

「頼みがあつてな

実は前からカードをオークションに出でようと思つていたのだが
出し方を知らなくてな
教えてもらおうと思つて
あ、そようそ

お前の住居をよーいしてやつたぞ
校長を脅したらレッド寮の近くにぼつたて小屋を作ってくれた
好きに使つていいぞ

「ありがたい

礼を言わせてもらおう

だがいいのか私なんかをかくまつような真似をして

「何を勘違いしているのか知らないが

俺はお前を利用しているんだぞ

代わりに情報屋となつてくれないか

周りの情報を得るためのパイプがほしいんだ
もちろん金を払うぞ

「

「分かった

そういうことにしておけ」

「では頼むぞ」

これで最初にここに来た目的
いや、この世界に来た目的が達成できる
金儲けというな

第11話 間のテュエル VS 間より深き深淵よりいでし者（後書き）

『オレイカルコスの 結界（けつかい）』効果

フィールド魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、自分フィールド上のモンスターの攻撃力は500ポイントアップする。

また、自分フィールド上の魔法・罠カードゾーンはモンスターカードゾーンとしても扱い、

自分は魔法・罠カードゾーンにモンスターカードを召喚、特殊召喚する事ができる。

自分フィールド上のモンスターカードゾーンと魔法・罠カードゾーンにモンスターカードが存在する場合、相手はモンスターカードゾーンのモンスターを攻撃対象に選ばなければならない。

このカードは魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない。

『オレイカルコス・ミラー』効果

儀式魔法

「ミラーナイト・コーリング」の降臨に必要。手札かフィールドから、レベルが6以上になるようカードをリリースしなければならない。

このカードはデッキから「ミラーナイト・コーリング」を自分フィールド上に

儀式召喚扱いとして特殊召喚する事ができる。

『オレイカルコス・ギガース』効果

効果モンスター

レベル4／地属性／岩石族／攻撃力400／守備力400

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

このカードのコントローラーはドローフェイズをスキップする。

このカードが破壊され墓地へ送られた場合、このカードを特殊召喚する。

その後、攻撃力を500ポイントをアップする。

《ミラーナイト・コーリング》効果

儀式・効果モンスター

レベル6／光属性／機械族／攻撃力0／守備力0

「オレイカルコス・ミラー」により降臨。

このカードが特殊召喚に成功した時、「ミラーナイトトーカン」（機械族・光・星1・攻／守0）4体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「ミラーナイトトーカン」が特殊召喚に成功した時、鏡の盾カウンターを1個乗せる。

「ミラーナイトトーカン」の攻撃力は、ダメージ計算時このカードと戦闘を行う相手モンスターと同じ攻撃力になる。

「ミラーナイトトーカン」がフィールドを離れる場合、代わりに鏡の盾カウンターを1個取り除く。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在する「ミラーナイトトーカン」に乗つている鏡の盾カウンターが取り除かれた時、

そのトーカンに鏡の盾カウンターを1個乗せる。

《レジエンド・オブ・ハート》効果

通常魔法

1000ライフポイントを支払い、自分フィールド上の戦士族モンスター1体をリリースして発動する。

デッキ・手札・墓地から「ティマイオスの眼」「クリティウスの牙」

「ヘルモスの爪」をそれぞれ1枚ずつゲームから除外する。

その後、デッキまたは手札から「ティマイオス」「クリティウス」「ヘルモス」をそれぞれ1体ずつ特殊召喚する。

それらのモンスターが特殊召喚に成功した時、相手フィールド上に存在する

「オレイカルコス」と名のつくフィールド魔法カードを全て破壊する。

この効果は「魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない」の効果を持つ

「オレイカルコス」と名のつくフィールド魔法カードを『える。

《ティマイオス》効果

効果モンスター

レベル8／光属性／戦士族／攻撃力2800／守備力1800
このカードは通常召喚できない。

「レジェンド・オブ・ハート」の効果で特殊召喚する。

このカードは表側表示で存在する限り、自分のメインフェイズ時に墓地に存在する

効果モンスターを1体選択してゲームから除外する。

このカードの効果はエンドフェイズ時までゲームから除外した効果モンスターの効果を得る。

《クリティウス》効果

効果モンスター

レベル8／光属性／戦士族／攻撃力2800／守備力1800
このカードは通常召喚できない。

「レジェンド・オブ・ハート」の効果で特殊召喚する。

このカードが表側表示で存在する限り、墓地に存在する

通常罠またはカウンター罠のカードを1枚選択してゲームから除外する。

このカードの効果は効果処理終了までゲームから除外した通常罠またはカウンター罠のカードの効果を得る

《ヘルモス》効果

効果モンスター

レベル8／光属性／戦士族／攻撃力2800／守備力1800
このカードは通常召喚できない。

「レジェンド・オブ・ハート」の効果で特殊召喚する。

「レジェンド・オブ・ハート」の効果で特殊召喚する。

このカードが表側表示で存在する限り、自分のデッキからモンスター
一カードを3枚ゲームから除外する事で、

このターンのバトルフェイズ中に3回の攻撃を行う事ができる。

『 師弟 （してい）の 絆 （きずな）』 効果

通常魔法

自分フィールド上に「ブラック・マジシャン」が
表側表示で存在する場合に発動する事ができる。

自分のデッキ・手札から「ブラック・マジシャン・ガール」1体を
表側守備表示で特殊召喚する。

『ティマイオスの 眼 （まなこ）』 効果

通常魔法

自分フィールド上から融合モンスターカードに決められた
融合素材モンスター1体を墓地に送り、

その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

また、自分フィールド上に「オレイカルゴスの結界」が存在する場
合、

このカードは発動する事ができない。

『 龍騎士 （りゅうきし） ブラック・マジシャン・ガール』 効果

融合・効果モンスター

レベル7／闇属性／ドラゴン族／攻撃力2600／守備力1700

このカードは「ティマイオスの眼」の効果で

「ブラック・マジシャン・ガール」1体を墓地へ送った場合のみ、
エクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

手札を1枚捨てる事で、相手フィールド上のモンスター1体を選択
して破壊する。

第2回主人公プロフィール（前書き）

フラグメイカーのはずなのに
まだフラグを立てていない理由判明

第2回主人公プロフィール

石崎遊輝

身長 十代と同じくらい

体重 50キロぐらい

顔 ふつう

好きなデッキ ドラゴンデッキ 速攻展開デッキ 強奪デッキ サイバーデッキ

好きな人 性格がいいやつ デッキの実験に手伝ってくれるやつ
十代

嫌いな人 めんどくさいやつ ナルシスト 馬鹿神

特技 フラグメイク【無意識】 読書

プロフィール まず金の荒稼ぎのためにこの世界に
卒業したらどの世界に行くか検討中

性格はいいんだがたまに本音がただ漏れになる。

前世で死ぬ直前ダイエットをしていたので小食が癖

になっている。

最近十代との友情に芽生え前よりもデュエルが好き
になってきた

いつも面倒をかける馬鹿神が嫌い

だが、そのたびに天使とともに折檻して新しい能力

をもらつてゐる

拷問だが

能力値（新規）

フラグメイカーレベル 1 4

チートドローレベル 1 25

ただしキレると測定不能に

デッキ構築レベル 1 20

マッドサイエンティストレベル 1 5

魔力 1 5

気 1 5

レベル1は非表示

能力（新規）

第1話参照

不老不死

特殊な不老不死で肉体年齢を任意で変化できる
神様曰くやりすぎると地獄に即刻落とされる

時空間移動能力

時間と空間を超える能力

時間を超える能力は過去・未来に行ける

空間を超える能力はドラえもんのどこでもドア強

一つを合わせることで異世界に行ける

4次元ポケット改 ドラえもんの4次元ポケットみたくなんでも出せるポケット

神様がいろいろ入れてる

ただしその世界にあったものしか取り出せない

第10話参照

絶対記憶能力 転生前の記憶を含むあらゆる記憶を絶対に忘れない能力

ただし覚えすぎるとオーバーヒートする

瞬間記憶能力 一瞬でも見たものを完全に覚える能力

光の速さでも見れば覚える

圧倒的な脳の容量 この世のすべてを覚えても潰えない脳の容量
これがおかげで絶対記憶能力のオーバーヒートが起こらない

地球の本棚(ぼ) 地球の本棚の縮小版

自分がおぼえているものの中から必要な知識

識を引き出す能力

地球の本棚と違い問題などの答えなどを問題を考えるだけで

知識を呼び出せる

描写をしないが第11話の件で神を天使とともに折檻して手に入れた能力

魂容量10倍

自分の本来の魂の容量を10倍ほどに増やす
これによりより強い力を入手可能に

限界点突破

鍛え続けることで限界なく際限なく強くなる能力

魔力+気

うになった

普通はあまり上がらないが限界点突破により魔力
を使えば使うほど

気を使えば使うほど最大値が上がる

ダイオラマ魔法球生成 自分の望むダイオラマ魔法球を作る能力

例としては

中では年を取らない1時間が1日になる別荘
トリコの食材が出てくる別荘
いろいろな武道を手ほどきしてくれるロボ
がいる別荘など

第2回主人公プロフィール（後書き）

主人公がチートになつていく気がする今日このころ
もちろんあのバカ神がこれで止まりはしません
何をするかはネタバレなので言いはしませんが

ちなみに十代のチートドローレベルも上がっています
原作ではレベル現時点でもうくらいだとすればすでに35くらいです

ちなみにレベルは俺の主観です

第12話 制裁デュエル 十代&遊輝VS迷宮兄弟

Side 遊輝

「「」を開ける…」」を開けるんだ！」

来たか

だがトラップ発動

盗聴器 + テープレコーダー

こいつらによりこの頭のいかれたアカデミア倫理委員会の犯罪までの言動を証拠として残せるのだ

ちなみにこれはダイオラマ魔法球生成（第2回主人公プロフィール参照）で作った

「諜報活動にピッタリな魔法球」の中に入つたらなぜかあつた便利だなあ

これで「あらゆる呪いの解除が可能な魔法球」とか作つたら何が入つてゐるんだか

「断る…！」

俺は不審者を家に入れる趣味はない

もちろんすでにテープレコーダーはオンだ

このいかれた野郎どもはおそらく次の発言で自滅する

「私たちはアカデミア倫理委員会だ…！」

速やかに開けないとこのドアをダイナマイトで爆破する…！」

はいまず一つ犯罪発言もらいました

ありがとうございます

「分かりました！出ますよ、出ます」

でたら校長室に呼ばれ言いたい放題言われた

「で、制裁デュエルですか

それはいいですけどここからは俺のターンだ
まずはこれを聞け」

『私はこここのクロノスという教員に雇われたあ
遊城十代という小僧を潰してくれとなあ』

校長たちの顔が青くなっている

「次はこれだ」

『私たちはアカデミア倫理委員会だ！！

速やかに開けないとこのドアをダイナマイトで爆破する…』

また青くなつた

いや青を通り越して白色になつてゐる

「アカデミアの大人は法律を知らないのか

どう聞いてもクロノス教員は今はいい人だが少し前は悪い奴だつた
タイタンに十代を潰せと言つてゐるようにしか聞こえんかったが

「捏造だ！！」「捏造なのーね」

「じゃあ本人に来てもらつか

今この学園にいるぞ

校長は分かつてゐるようだがな

次にアカデミア倫理委員会の発言だ

アカデミア倫理委員会は爆発物取締法というのを知らんのか
それにこれは脅迫だらう

よつて制裁デュエルに一つくらい提案をしてもいいだらう
それで + - 0 だ

条件は「どちらで選んだ代表2名とそちらが選んだデュエリストでデュエル

もし、奇跡的に、百億分の一にも二じりが負けたら俺、十代、翔は

退学

勝つたら、クロノス教員の給料の90%を3か月間俺、十代、翔に

渡す

以上だ

反論は認めない

もし約束を破るようだつたら海馬コーポレーションにそいつきの音声
を送り

世界中のマスクにも送る

では俺は帰る

ちなみに代表者は俺と十代だ

強い奴をよこさないと5ターン目に終わるぞ
さらばだ」

後ろで騒いでた全員を置いて

寮に帰つた

その後

「おい十代

デッキ調整のために「デュエルだ」と書いてデュエルしたり
翔のトラウマの話を聞いて十代とカイザー（笑）がデュエルをしたり
原作イベントが起きて制裁デュエルの日になった

「相手は、あのデュエルキング、武藤遊戯と戦つたことのある伝説のデュエリストナーネ。」

あ、そうかい
あのハゲ二人か

「我ら流浪の番人」

「迷宮兄弟」

「お主達に恨みはないが……」

「故あり、対戦する」

「我らを倒さねば……」

「道は開けん！」

「いざ、勝負！」

雑魚め

「では、両者
位置について」

一人でデッキを合わせている

二人ともE・HERO デッキだ
しかも俺のデッキにはE・HERO と対をなす奴らもデッキに入
れている

そう悪魔のHERO、E-HEROだ

くつくつく

あがいてくれよ

闇（やみ）の守護神（しゅごしん）・ダーク・ガーディアンを出せたらとつておきを見せてやるからな

「タッグパートナーへの助言は禁止なのーね、パートナーのフィールドと墓地も自分のフィールドと墓地として扱えるーの、両チームライフポイントは8000なのーね、では！！」

「――「デュエル！――」」

「俺のターンドロー

ダーク・フュージョンを発動

手札のE-HERO フュザーマンとE-HERO バーストレギーイを

暗黒融合

イーピルヒーロー

来いE-HERO インフェルノ・ウイング

更にミラクルフュージョンを発動

墓地のE-HERO フュザーマンとE-HERO バーストレギーイを

融合

来いE-HERO エレメンタルヒーロー フュニックスガイ

リバースカードを1枚セットターンエンドだ

なんだあのHEROは

すげえ禍々しいぞ

それに暗黒融合つて

などなどどうるさいが十代は気にしていない

実は俺の正体を告知からこの日までに話したからだ

その時いくつかのカードを見せた
だから十代とは本氣でデュエルができるし
眞の俺のデッキのいくつかをつかえる

「私のターン、ドロー！」

迷つて頭に書いている方

「私は地雷蜘蛛を召喚

私はこれでターンエンドだ

それだけか

「行くぜ、俺のターンー・ドローーー！」

始まる魔改造十代による悪夢のレクイエム
悪夢のパーティー

悪夢のダンス

もうだれにも止められない

「強欲な壺を発動

2枚ドロー

更に融合発動

手札のE・HERO フレイム・ウイングマン
イを

融合

来いE・HERO ^Hフレイム・ウイングマン

更に2枚目^Hの融合を発動するぜ

E・HERO ^Hフレイム・ウイングマンとE・HERO スパーク
マンを融合

来い E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン
エレメンタルヒーロー

更にミラクルフュージョンを発動

遊輝のE・HERO フュニックスガイと墓地のE・HERO ス

パークマンを融合
エレメンタルヒーロー

来い E・HERO シャイニング・フュニックスガイ

すげえ、あんな強そうな融合モンスターが3体も
迷宮兄弟びびつてねえか

あの一人強すぎる

なんだ、あの引きの良さ

俺にも分けてほしいぜ

とか聞こえる

それにしてもなんで観客がいるんだ？

「命削りの宝札を発動

手札が5枚になるようにドロー

更にカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

宮って書いている方

「私のターン、ドロー！」

「私はカイザー・シーホースを召喚」

「更に魔法カード、生け贋人形を発動
自分の場のモンスター1体を生贋にすることで手札からレベル7の
モンスターを特殊召喚する

私は兄者の場の地雷蜘蛛を生贋に手札から風魔神・ヒューガを特殊
召喚」

「すまぬ、兄者」

「いいや、お前のためならば犠牲にともなるつ」

「だが、それでは私の気がすまない

私は兄者を対象に魔法カード、闇の使命者を発動

「カード名を1枚選択、そのカードが相手のデッキに入つていれば、

相手はそのカードを手札に加える

私が選択するのは雷魔神・サンガ」

「ふふふ、ありがたい

勿論、我がデッキに雷魔神・サンガは私のデッキに入つている」

せこいよな、これって

絶対に入つてるに決まつてんじやん

「私はこれでターンエンド。」

「俺のターンドロー

俺は命削りの宝札を発動

5枚ドロー」

「やるのか遊輝」

「ああ、十代

あこづらのカードを利用してつくして潰す

「はははは」

十代に苦笑いされるとは
なんかやな感じ

「俺は E・H^{エルメンタルヒーロー}ERO バブルマンを召喚

更に速攻召喚発動

2体目の E・H^{エルメンタルヒーロー}ERO バブルマンを召喚

そして前のターンに伏せておいた超融合を発動

超融合の効果は

手札を1枚捨てる。

自分または相手フィールド上から融合モンスターカードに
よつて決められたモンスターを墓地へ送り、
その融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。
このカードの発動に対し、魔法・罠・効果モンスターの効果を発
動する事はできない。

(この特殊召喚は融合召喚扱いとする) だ

俺は俺の E・H^{エルメンタルヒーロー}ERO バブルマンと貴様のカイザー・シーウースを

超融合

来い E・H^{エルメンタルヒーロー}ERO The シャイニング

更に2枚目の超融合を発動

俺は俺の E・H^{エルメンタルヒーロー}ERO バブルマンと貴様の風魔神・ヒューガを

超融合

来い E・H^{エルメンタルヒーロー}ERO Great TORNADO

E・H^{エルメンタルヒーロー}ERO シャイニング・フレア・ウイングマンと

E・H^{エルメンタルヒーロー}ERO シャイニング・フェニックスガイは

自分の墓地に存在する「E・HERO」と名のついた

カード1枚につき攻撃力を300ポイントアップという効果と共に
持つている

墓地の E・HERO は 6 枚

攻撃力 1800 ポイントアップ

E・H^{エルメンタルヒーロー}ERO The シャイニングは

ゲームから除外されている

自分の「E・HERO」と名のついたモンスターの数×300ポイントアップするという効果を持っている

除外されているE・HEROは4枚

攻撃力1200ポイントアップ」

ここで場を整理しよう

E・HERO The シャイニング
ヒーロー

攻撃力 2600 + 1200 = 3800
イビルヒーロー

E・HERO インフェルノ・ウイング
エレメンタルヒーロー

攻撃力 2100
エレメンタルヒーロー グレイ特
E・HERO Great TORNADO
トルネード

攻撃力 2800
エレメンタルヒーロー

E・HERO シャイニング・フェニックスガイ
エレメンタルヒーロー

攻撃力 2500 + 1800 = 4300
E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン
エレメンタルヒーロー

攻撃力 2500 + 1800 = 4300

「いけ
全弾発射オオオオオオオオオオ
フルバースト

「「グわああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああ」

8000 - 3800 = 4200
4200 - 2100 = 2100

2100 - 2800 = - 700
- 700 - 4300 = - 5000
- 5000 - 4300 = - 9300

「では校長
さらばです

もう一度とあのよつやことしないよつて言つてください
そして、課題の追加とかはしないでくれよ

それだけ言つと俺は帰つた

十代からそのあとのこと聞くと
課題がなかつた以外原作と変わらなかつた

第12話 制裁デュエル 十代&遊輝VS迷宮兄弟（後書き）

といふことで

十代と遊輝の二人による躊躇の話でした
もうこのペアに勝てるペアはほとんどいないんじゃないか?
これが魔改造とチートの力だ
わあっはっはっはっ
なんてね

第13話 冬休み前の決闘 VS十代 第1戦 罪と光炎

S.i.d.e 遊輝

制裁デュエル後のこと。簡潔に話そう
三沢と万丈目のデュエルは原作通りだった
SALのイベントはすでに研究所を海馬さんに「置名」でちくつて消しておいたからなし

以上だ

短いって

だってこれから

原作とは違う激戦をしまくるんだから
今、俺と十代はダイオラマ魔法球の中にいる
ちなみにこの魔法球はダイオラマ魔法球生成で「デュエルにピッタリな魔法球」を作つてできたものだ

「十代デュエルしないか」

「いいぜ、やろう

それにして珍しいな、お前からデュエルしようだなんて
どうかしたか

実は十代に話してから十代が
老化しないし時間の流れが違うなんて便利な場所夢みたいじゃねえか
デュエルしまくれるし
とか言ってよく来て俺とデュエルするようになつていた

「実はな冬休みに出かけようと思つんだよ異世界に
ほら、俺不死だから何年も出てもばれないだろ、時間操作もで

きるし

だからじょびりく出ていく前に何戦もしてから修行に行こうかと
つてことで出ていく前に何戦もしてから修行に行こうかと

「そういう」とか

分かつたぜ、とりあえず何戦するんだ?」

「10戦でどうだ

「じゃあさつそくやるつぜ

「「デュエル」」

「俺のターンからだ、ドロー!

俺はファイールド魔法 *Sin* *Woruld* [OCG版] を発動

更に手札の *Sin* サイバー・ハンド・ドラゴン [映画版] の効果
を発動

エクストラテックのサイバー・ハンド・ドラゴンを墓地に送り特殊
召喚

更に手札の死者蘇生を発動

墓地のサイバー・ハンド・ドラゴンを特殊召喚

レベル10サイバー・ハンド・ドラゴンと

レベル10 *Sin* サイバー・ハンド・ドラゴン [映画版] をオー
バーレイ

2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築

エクシーズ召喚 超弩級砲塔列車グスタフ・マックス

ゼアルで勘違いで遊馬を襲つた神月アンナが使つたチート級エクシ

ーズ

効果がヤバい

「げ、そいつかよ」

「超弩級砲塔列車グスタフ・マックスの効果を発動
オーバーレイユニットを1つ取り除き2000ダメージを『える』」

4000 - 2000 = 2000

「っく」

「リバースカードを3枚伏せターンエンド」

「俺のターン、ドロー

俺は天使の施しを発動

3枚ドローし手札を2枚捨てる
さらに融合を発動

手札のE・HERO フレイムザーマンとE・HERO バーストレギーを融合

來いE・HERO フレイム・ウイングマン

更に2枚目の融合を発動するぜ

E・HERO フレイム・ウイングマンと手札のE・HERO ス

パークマンを融合

來いE・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン

普通ならヤバいが

「甘い！」

速攻魔法Sin(シン) Cross(クロス)を発動

効果により墓地のSin(シン)サイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚
更にトラップ発動 Sin(シン) Claw Stream(ストリーム)

このカードは自分フィールド上に「デコ」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合に発動する事ができる

効果によりE・HERO シャイニング・フレア・ウイングマンを
破壊

だけど今の十代なら

「なら強欲な壺を発動

2枚ドロー

更にミラクルフュージョンを発動

墓地のE・HERO フレイム・ウイングマンとE・HERO スパークマンを融合

再び現れる

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン

やつぱり

「E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマンは墓地のE・HEROと名のついたカード一枚につき攻撃力を300ポイントアップする
俺の墓地には2体のE・HEROがいる
よって攻撃力3100

いけE・HERO シャイニング・フレア・ウイングマンで攻撃
シャイニング・ショート

だが防ぐ

「トラップ発動

くず鉄のカカシを発動

攻撃を防ぐ

「そいつかあ

ならカードを一枚伏せターンエンド」

「S.i.n サイバー・エンド・ドラゴンはS.i.n (シン) Cross (クロス) の効果で除外される

俺のターンドロー

超弩級砲塔列車グスタフ・マックスの効果を発動

オーバーレイユニットを一つ取り除き2000ダメージを取れる

「そうはさせないぜ

地獄の扉越し銃を発動

ダメージはお前に受けてもいいぜ」

4000 - 2000 = 2000

「やつぱりそれか

強欲なカケラを発動

ターンエンド」

「俺のターンドロー

俺も強欲なカケラを発動してターンエンドだ」

「俺のターンドロー

強欲なカケラに強欲カウンターを一つ乗せる
カードを伏せターンエンドだ」

「俺のターンドロー

強欲なカケラに強欲カウンターを一つ乗せるぜ

更に壺の中の魔導書を発動

3枚ドロー」

「俺も3枚ドロー」

「E・HERO バブルマンを召喚

超融合を発動

手札を1枚捨て

俺のE・HERO バブルマンと遊輝の超弩級砲塔列車グスタフ・

マックスを

超融合
来いE・HERO ガイア」

「つち

「2体のモンスターで攻撃だ」

「手札の速攻の力カシを墓地に捨て効果を発動
戦闘を無効化」

「ならターンエンドだ」

「俺のターンエンドロ」

強欲なカケラに強欲カウンターを1つ乗せる

強欲なカケラを墓地に送り2枚ドロー

更に手札のSin 真紅眼の黒竜【OCG版】の効果を発動
デッキの真紅眼の黒竜を除外し

特殊召喚

更に可変機獣 ガンナードラゴンを妥協召喚

レベル7可変機獣 ガンナードラゴンとレベル7Sin 真紅眼の

レッドアイズ・ブラックドラゴン

黒竜「OCG版」をオーバーレイ

2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築

エクシーズ召喚

来い N○・11ビッグ・アイ

更にトラップ、闇次元の開放を発動

効果により除外されている真紅眼の黒竜を特殊召喚

二重召喚を発動

2体目の可変機獣

ガンナードラゴンを妥協召喚

レベル7真紅眼の黒竜とレベル7可変機獣

ガンナードラゴンをオ

バーレイ

2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築

エクシーズ召喚

来い N○・11ビッグ・アイ

2体のビッグ・アイの効果をそれぞれ発動

エクシーズ素材をそれぞれ1つ取り除き

相手のモンスターのコントロールを得る

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマンと

E・HERO ガイアのコントロールを得る

いけ2体でダイレクトアタック

2000 - 2500 = - 500

- 500 - 2200 = - 2700

「くつそお、負けたあ」

「そういうなつて

俺もかなり危なかつたぜ

じゃあ少し休憩してから次のデュエルをしようぜ」

「次は俺が勝つぜ」

「いや、今度も俺が勝たせてもらひ」

これ以降はいい合いなのでカットします（作者）

『Sin（シン）Cross（クロス）』効果

速攻魔法

自分の墓地に存在する「Sin」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを召喚条件を無視して自分フィールド上に特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズ時にゲームから除外される。

チートドローディッシュが戦うと大変なことに

ちなみに十代には未来どんなことがあるかは話していません
なので未来に出てくる1点物のレアカードだとそうゆうカードを使うとき言っています

最後にこの世界ではといって

第1回アンケート

今回はアンケートを取りたいと思います

アンケートの項目は

遊輝のパーティに入る精霊の募集です
項目は

1つ目 ナンバー1 スターダスト・ドラゴン

2つ目 ナンバー2 N.O.・39希望皇ホープ

3つ目 ナンバー3 可変機獣ガンナードラゴン

4つ目 ナンバー4 E - H E R O イーピルヒーロー インフェルノ・ウイング

5つ目 ナンバー5 その他

最も多かった意見を採用します

締め切りは12月1日です

その他に意見が入ったときは項目を追加します
途中経過は後書きにて報告します

第14話 冬休み前の決闘

VS十代

第2戦 究極

第3戦

暗黒と神鳴（前）

魔を切り裂く神鳴流
なんてね

第14話 冬休み前の決闘 VS十代 第2戦 究極 第3戦 暗黒と神鳥

Side 遊輝

「十代そろそろ2戦目やろ?」

俺の映画OOG混合金剛デッキと十代のシャイニング・フレア・ウイングマン主体のE・HERO OOGデッキの激戦から数分後

「よおし今度は勝つぞ

遊輝、デュエルだ

「デュエル」「デュエル」

「今度は俺のターンからだ

融合を発動するぜ

手札のE・HERO スパークマンとE・HERO クレイマンを融合

来いE・HERO サンダー・ジャイアンツ【OOG版】

さらに2枚目の融合を発動するぜ

手札のE・HERO スパークマンとE・HERO ネクロ・ダーク

マンを融合

来いE・HERO ダーク・ブライトマン

俺はカードを1枚伏せターンエンドだ

「俺のターンドロー

え、これ何?

「俺は苦渋の選択を発動
俺が選ぶのはこいつらだ」

封印ふういんされしエクゾディア

封印されし者の右足

封印されし者の左足

封印されし者の右腕

封印されし者の左腕

「え、まじかよ
そのテッキつて」

「分かつてる

言いたいことは分かる

でも適当に選んだらこの「テッキだつたんた
すまん

本当にすまん」

「分かつたよ遊輝

とつあえず封印されし者の左腕を選ぶぜ…………。」

「死者転生を発動手札を一枚捨て
封印ふういんされしエクゾディアを手札に
カードを2枚伏せターンエンド」

「おれ「トラップ発動補充要員

封印されし者の右足と封印されし者の左足と封印されし者の右腕を

墓地から手札に

俺の勝ち」やっぱり

そのテッキはお願ひだからもう使わないでくれ

頼むから使わないでくれ
もうそのデッキとはやりたくない

エクゾディア怖い

ああ、十代が壊れる「フフフフフ

「分かったから十代
頼むキヤラ崩壊しないでくれ」

それから約1時間後

「デュエルやるぜ」

あれから頑張つて説得したら
何とか復活しました

「今度は俺のターンから行くぜ
俺のターンドロー

俺は手札抹殺を発動
手札を5枚捨て5枚ドロー」

「俺も手札を5枚捨て5枚ドローするぜ」

「更に墓地に送られた

2枚の暗黒界の狩人 ブラウと暗黒界の軍神 シルバの効果を発動

2枚の暗黒界の狩人 ブラウで2枚ドロー

更に暗黒界の軍神 シルバの効果でこのカードをフィールドに特殊

召喚

暗黒界の門を発動する

更に効果を発動

墓地の暗黒界の狩人 ブラウを除外し手札の暗黒界の武神 ゴールドを墓地に送る

1枚ドロー

墓地に送られた暗黒界の武神 ゴールドの効果を発動
このカードをフィールドに特殊召喚

レベル5 暗黒界の軍神 シルバとレベル5 暗黒界の武神 ゴールドを
オーバーレイ

2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築
エクシーズ召喚 燃え上がり N.O.・61 ヴォルカザウルス
更に2枚目の手札抹殺を発動

5枚捨て5枚ドロー

捨てられた2枚目の暗黒界の軍神 シルバと暗黒界の武神 ゴールド
を特殊召喚

更に強欲な壺を発動

2枚ドローする

カードを4枚伏せターンエンド

「俺のターンドロー
大嵐を発動するぜ
魔法・トラップをすべて破壊」

「そつはさせない

マジック・ジャマーを発動
手札を1枚捨て効果を無効化」

「なら2枚の大嵐を発動するぜ
今度こそ破壊だ」

「ならば、こちらもだ

2枚目のマジック・ジャマーを発動」

「3度目の正直だ

「3枚目の大嵐を発動するぜ」

「十代がそんな言葉を知ってるとは驚いたな
つち、その大嵐は無効化できないな」

「失礼だな

俺だつてこれくらい知つてゐるつつの
俺は苦渋の選択を発動するぜ
選択するのはこの5枚だ」

E・HエレメンタルヒーローERO スパークマン3枚
E・HエレメンタルヒーローERO クレイマン1枚
E・HエレメンタルヒーローERO エッジマン1枚

どれ選んでも同じだろ

「E・HエレメンタルヒーローERO スパークマンを選ぶ」

「命削りの宝札を発動するぜ
手札が5枚になるようにドロー

融合を発動

手札のE・HエレメンタルヒーローERO スパークマンとE・HエレメンタルヒーローERO フェザーマン
それにE・HエレメンタルヒーローERO バブルマンを融合
来いE・HエレメンタルヒーローERO テンペスター
更に2枚目の命削りの宝札を発動するぜ
手札が5枚になるようにドロー
更にミラクルフェュージョンを発動

墓地のE・HエレメンタルヒーローERO スパークマンとE・HエレメンタルヒーローERO エッジマンを

融合

来い E・HERO プラズマヴァイスマン

更に2枚目のミラクルフュージョンを発動するぜ

墓地のE・HERO スパークマンとE・HERO クレイマンを融合

來い E・HERO

ヒーローメンタルヒーロー

サンダー・ジャイアント「アニメ版」

E・HERO

ヒーローメンタルヒーロー

サンダー・ジャイアント「アニメ版」の効果を発動

暗黒界の軍神 シルバを破壊

いけヴェイパー・スパーク

「シルバが」

「最後のミラクルフュージョンを発動

墓地のE・HERO スパークマンとE・HERO ネクロダーク

マンを融合

來い E・HERO

ヒーローメンタルヒーロー

ダーク・ブライトマン

更に E・HERO

ヒーローメンタルヒーロー

プラズマヴァイスマンの効果を発動

手札を2枚捨て暗黒界の武神 ゴールドとZo·61 ヴォルカザウルスを破壊

とどめだ

E・HERO

ヒーローメンタルヒーロー

テンペスター カオス・テンペスト

E・HERO

ヒーローメンタルヒーロー

プラズマヴァイスマン ヴァイスパーク

E・HERO

ヒーローメンタルヒーロー

サンダー・ジャイアント「アニメ版」ボルティツ

ク・サンダー

ヒーローメンタルヒーロー

ダーク・ブライトマン ダークフラッシュ

E・HERO

ヒーローメンタルヒーロー

ダーク・ブライトマン ダークフラッシュ

4000 - 2800 = 1200
1200 - 2600 = -1400
-1400 - 2400 = -3800
-3800 - 2000 = -5800

「つよ

プラズマ、ヴァイスマンつよ

負けたああああああああああああああああ

「よつしゃ———

今度は勝つたぜ

ガツチャいいデュエルだったぜ

「次は俺が勝つ

「いや今度も俺が勝つ

以後言い合いなのでカットします（作者）

第1～4話 冬休み前の決闘 VS十代 第2戦 究極 第3戦 暗黒と神鳴（後）

アンケート募集中

第15話 冬休み前の決闘 VS十代 第4戦 究極再び 第5戦 龍とE

Side 遊輝

「デュエル」

「やつらのマジでキレた

十代、手加減できん

俺のタアアアアア――――――ン！――

才才才才才才！！！！」

「やだ、マジで怒らせちゃった

三五
龜去凶
䷗

二重召喚発動発動

三立屋洋風書館にアーヴィングの著書

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

三立鳳洋団讃飯に不思議な事が出来

蝶の短剣
エルマの効果で蝶の短剣
エルマを手札に

立法院圖書館一九九〇年

蝶の短剣
エルマ
をギア・フリードの効果で破壊

王立魔術図書館の効果で3回の魔力カウントを取つ余き

— (三回目) —

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

王立魔法図書館の効果で3個の魔力カウンターを取り除き1枚ドロ

ー（2回目）

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

ー（2回目）

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

王立魔法図書館の効果で3個の魔力カウンターを取り除き1枚ドロ

I (4回目)

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードに装備

王立魔法図書館にカウンターが乗る

蝶の短剣 エルマ をギア・フリードの効果で破壊

蝶の短剣 エルマ の効果で蝶の短剣 エルマ を手札に

王立魔法図書館の効果で3個の魔力カウンターを取り除き1枚ドロ

I (5回目).....

その後27回目でエクゾディアがそろい俺は勝つた
そしたら十代にこんな提案をされた

「あのさ、さすがに10戦疲れるし
次で最後にしないか?」

まさかデュエルバカの十代がこんなこと言つとは思つていなかつたが
宇宙意思(作者)が10個もE・HERO『テッキ』が思いつくかああ
あああと言つてた気がしたので
了解した

なんか最近コメディになつてゐる気がする
とまあメタ発言はここまでにして
5戦目が最終戦になりました

お互いのメインデッキでデュエルです

「「デュエル」」

「俺のターンドロー

光竜の煌きを発動手札のドラゴンを2枚墓地に送り
デッキから光属性のドラゴン1体を特殊召喚する
来いライトエンド・ドラゴン

更に墓地の

光属性 銀河眼の光子竜キャラクシーアイス・フォトン・ドラゴン
闇属性 真紅眼の黒竜レッドアイズ・ブラックドラゴン

手札からライトパルサー・ドラゴンを特殊召喚

命削りの宝札を発動

リバースカードを1枚伏せターンエンド

「俺のターン

ドロー

融合を発動

E・HERO スパークマンとE・HERO ハッジマンを融合
來いE・HERO エレメンタルヒーロー プラズマヴァイスマン

E・HERO^{ヒーロー} プラズマヴァイスマンの効果を発動
手札を2枚捨てライトエンド・ドラゴンとライトパルサー・ドラゴンを破壊

「ならそのとおり

トランプ発動

竜の輝鱗

自分フィールド上のドラゴン1体を手札に戻す
俺はライトエンド・ドラゴンを手札に戻す
そして手札から別の同レベルのドラゴンを特殊召喚する!
光と闇は表裏一体だ! 現れる闇の龍!!

ダークエンド・ドラゴン

分かる人にはわかる

パクリ

(さあ誰のパクリでしょう)

第8話を見ればわかるとおもつよ) 作者

何か電波が

まあいい続きだ

「ならおれは最後の手札を捨て

ダークエンド・ドラゴンを破壊

E・HERO^{ヒーロー} プラズマヴァイスマンで攻撃

ヴァイススパーク

4000-2600=1400

「十代

手札事故でも起じたか?」

(いや、遊輝よ

それでも十分いい手札だと思つや) 作者

また電波が

なんだ今日は

妙に電波が多い

「せうなんだよ

ドローカードが来なくてさ

ポツリ(なんで融合2枚とバブルシャッフルなんだよ)」

(それでも1ターン田から融合できてる時点で十分です) 作者

「うん?

今変な電波が?」

「お前もか

今日は変な日だ」

「まあいいや

ターンエンド!」

「俺のターンドロー

墓地のライトパルサー・ドラゴンの効果を発動手札のドラゴン族の光属性モンスターと闇属性モンスターを1枚ずつ墓地に捨て

墓地より特殊召喚する

戻つてこいライトパルサー・ドラゴン

更に手札のダークフレア・ドラゴンの効果発動

墓地の光属性 青眼の白龍と
ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン

闇属性 ダークエンド・ドラゴンを除外

闇の炎よ舞い上がり 来いダークフレア・ドラゴン
さらに死者蘇生を発動

光と闇を象徴せし竜よ

真理の力を持ちここに現れろ

来い光と闇の竜（ライト&・ダークネスドラゴン）
初めてだなお前の力を使うのはライネス」

「そうだなマスター

何気に我の登場回数も少ないし
使用も初めてだ」

「メタ発言をするな

行くぞ十代

光と闇の竜（ライト&・ダークネスドラゴン）
E・HERO プラズマヴァイスマンに攻撃

シャイニングブレス

ライトバルサー・ドラゴンとダークフレア・ドラゴンは十代にダイ
レクトアタック

パルスストリーム フレア・オブ・ダークネス」

4 0 0 0 - (2 8 0 0 - 2 6 0 0) = 3 8 0 0
3 8 0 0 - 2 5 0 0 = 1 3 0 0
1 3 0 0 - 2 4 0 0 = - 1 1 0 0

「はあ負けたああ
でもガツチャいい勝負だったぜ」

「そうだな

じゃあ外に出るか

数日後

「じゃや、十代俺は行くぜ」

「じゃあな

帰つてきたら『テュエルだ』

「ああ、もちろんだ」

そういうと俺は前の空間を歪め
中に入つて行つた

しまつた

何故か強烈なギャグ回になってしまった
どうしてこうなった

すいません

10連戦は無理でした

第16話 帰ってきた男 VS 人造人間（じんぞうにんげん）・サイコ・ショック

Side十代

冬休みに入つて
生徒のほとんどが家に帰つちまつた
おかげで島はガラガラ
でもさ、俺たち居残り組には最高の環境だぜ
いつでもどこでもデュエルがやり放題
これで遊輝がいればなあ
もつと楽しかったんだけど
あいつとはダイオラマ魔法球つてやつで毎日あつてるけど
やつぱり4人で話したいよな

「ひりん」

「俺はクレイマンを攻撃表示で召喚」

翔の場にはサイクロイドとジャイロイド
周りにいるのはデュエル中の翔と餅を焼いては食つてる隼人と大徳
寺先生

パン

「フニャアアアアア」

「クレイマンで攻撃」

Side auto

S i d e 三人称

十代と翔がデュエルしていたその頃
別の場所

高寺というオベリスク・ブルーの生徒は走っていた

「はあはあはあはあ
助けてええええええええええ」

その男は隼人と大徳寺が餅を食べている頃
オシリスレッド寮の前まで来た

「へえへえ」

「だ、だれかあ」

ガチャアアアン

「は

「ああ

S i d e a u t o

S i d e 十代

ガチャアアアン

「は

な、なんだ

「何いいい」

俺らはデュエルを中止した

「なんだ、いつたいどうしたんだ」

俺は倒れている男に近づいて話しかけた

「サ、サイコ・ショックカーが」

「サイコ・ショックカーがどうした?」

サイコ・ショックカー?

「僕をおいかけて」

「え、なにわけのわからないことを言つてるんだ?」

まさか

「君は確かオベリスク・ブルーの高寺君だにゃ」

「大徳寺先生

先生なら、デュエルの精靈を研究している大徳寺先生な
きつとわかつてくださいますね」

やつぱり

「デュエルの精霊」

「わあ、落ち着くのだにゃ 高寺君
最初から話してみるのだにゃ」

「は、はい

あれはまだ冬休みに入る前の事でした
僕たち高寺オカルトブラザーズは

「高寺オカルトブラザーズ?」

「同じオベリスク・ブルーの向田と井坂で組んだ
デュエルのオカルト面を研究するグループなんです
特に僕らはデュエルの起源ともいえる
精霊を研究していました

そしてあの日

僕らは今までの研究の成果を試そつと
精霊を呼び出すことにしたのです
ウイジヤ板を使って」

「3体の生贋をささげる
さすれば我は蘇える
そう文字は語りました」

「いけませんね

デュエルの精霊と心霊学と一緒にしてはダメなんだにゃあ

「で、高寺君たちはなんて答えたの」

「分かりましたって」

「おいおい

「えええ」

「カードの生贊だと思つたんだよ
それなのに」

「え、まさ…か」

「次の日

メンバーの一人向田の姿が見えなくなつてしまつたんだ
そして次の日には井坂が
二人とも生贊にされてしまつたんだ」

ヤバくないか

「ええ（ぶるぶる）」

念のために

「冬休みだから実家に帰つたんだろ」

「二人の家にも電話したよ
でも、まだかえつてないって」

「うーん」

「僕は恐ろしくなつて

今日のフェリーで帰りましたんです

そうしたら

船の上に

あれは確かにサイコ・ショックカー

サイコ・ショックカーの精霊

力チャン

なんだ電気が消えた

翔たちも悲鳴を上げてる

「翔、隼人しがみつくな
おめええええ」

「落ち着くのだにや」

「お、お前は

あの黒い男
高寺を抱えてる

「サイコ・ショックカー！」

「あ、まで

「待つてアニメー

「十だあい」

「十代君！――

その後俺らは奴を追いかけて
送電施設についたんだ

「気を付けるこや

「こやは島全体に電気を送る送電施設こや
高圧電流が」

「あ、高寺！」

走りかけていくと急に電撃が走った

「わあ

チーーーン

ビリビリという電氣の音とともに
サイコ・ショックカーが出てきた

翔たちもそれぞれ驚いてる

「先生

精靈はいるって教えてたじやないですか

「み、み、みたのは初めてなんだこや」

「おい、サイコ・ショックカー

高寺たちを返せ！――

「そんなに蘇えりたけりや
俺を生贊にしる」

「十代ー！」

「アニキー！」

「成程、君から発生するパワーはほかの者の並ではないな」

「しゃべったあ」

「3体目の生贊には君の方がふさわしいかもしれん」

「だが条件があるぜ

俺とデュエルしろー！」

お前が勝つたら俺は生贊になる
だが、俺が勝つたら高寺と後の一人を返せ

「いいでしょーー！」

おもしろい、君を生贊として召喚して見せましょー

ビコベリ

「わが生贊よ

君はもう逃げられん

「生贊じゃねえ

俺はオシリス・レッドの十代だー！」

「「デュエー神鳴流奥義
斬空閃」」「ドカアアアアアアン」なんだ

「

急に大きな音がしたと思ったら土埃がたつていて
その土埃が晴れてくると

「そのデュエル、俺が受けよつ」

Side auto

Side 遊輝

サイコ・ショックターのイベントがあつたこと忘れてた
完全記憶能力？

覚えてても思い出そうとしないと無駄なの
ヤバい始まる

「神鳴流奥義 斬空閃」

土ぼこりがたつちまつた

「そのデュエル、俺が受けよう」

「「「遊輝（君）?...」「」」

「なんだこのパワーは
私が10回復活してもおつりがくねるや」

「十代、このデュエル俺がもうつ
おいサイコ・ショックター

条件変更だ

俺が負けたら十代と俺の魂をくれてやる
だが、俺が勝つたらその3人を返し俺の手下になれ

「遊輝、この『デュエル』はお「いいな、十代」あ、ああ（ヤバい、遊
輝はマジだ）」

「そういうことだサイコ・ショッカー

後ろで騒いでいるやつは無視して『デュエルだ』

「いいでしょう

君も生贊にして見せましょう

「契約完了だ

この契約は破られることはない

俺はネギま世界で手に入れたマジックアイテムを使用した

「ついでだ
デス・デストロイ・デス・クライシス大氣よ水よ白霧となれ
彼らの者らに一時の安息を
眠りの霧」

俺、十代、サイコ・ショッカー以外が眠った

「遊輝、何をしたんだ」

「心配するな眠らせただけだ
魔法でな」

「魔法か

君は面白いものを使つよつだ

「行くぞ」

「「デュエル」」

「先攻は私
ドロー」

半透明のカードがサイコ・ショックカーの前に出でくる
一体どうこう仕組み？

「私は怨念のキラードールを攻撃表示で召喚」

怨念のキラードールの攻撃力は1600か

「手札から永続魔法エクトプラズマーを発動
互いのプレイヤーは自分のターンのエンドフェイズ
自分のモンスターを生贊に捧げることで
その攻撃力の半分のダメージを相手に『与える』ことができる」

怨念のキラードールから白い魂みたいなものが出てきて俺にあたった
少し痛いな

でも、あのときの京都での修行に比べりゃあ

4000 - 800 = 3200

「遊輝！！」

「ターンエンドだ」

「俺のターンドロー

融合を発動

手札のブラック・マジシャンとバスター・ブレイダーを融合

来い超魔導剣士 - ブラック・パラティン

伏せカードくらい伏せろや

超魔導剣士 - ブラック・パラティンで攻撃

超魔導無影斬

更に速攻魔法融合解除発動

来いブラック・マジシャン バスター・ブレイダー

2体で攻撃

ブラック・マジシャン ブラックマジック
バスター・ブレイダー 神鳴流奥義

斬魔剣 式の太刀」

4 0 0 0	-	2 9 0 0	=	1 1 0 0
1 1 0 0	-	2 5 0 0	=	- 1 4 0 0
- 1 4 0 0	-	2 6 0 0	=	- 4 0 0 0

「もう一度言つ

伏せカードくらい伏せろやああああああああああ

「ぎゃあああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ

アニメの時と爆発しようとする

「そつはさせるか

罰ゲーム発動」

罰ゲームでサイコ・ショックカーの魂をカードに封印し爆発を止める

「遊輝、サイコ・ショックカー
弱かつたな」

「ああ、十代

とりあえず少しあそこで寝てる3人を記憶操作するから寝てろ【眠りの霧】」

「な、なんだ、急にねむ……」

パタン

眠った十代とさつきの3人の記憶をアニメのデュエルと同じようこの後
人造人間 - サイコ・ショックカーの描かれた罰ゲームのカードをダイ
オラマ魔法球の中に持つていった
その後中で解放した消えかけた人造人間 - サイコ・ショックカーを
俺の魔力と気で形を整え復活させた
まあ、普段は精霊化してないときついくらいにだけど

その後
何故か人造人間 - サイコ・ショックカーは俺をマスターというよつて
俺には従順?になつたのは別の話

その次のフェリーの日

翔たちに帰つたことにするため帰り

十代たちは

十代たちは原作通りのことがあつたと話していた

第16話 帰ってきた男 VS 人造人間（じんぞうにんげん）・サイコ・ショック

遊輝が作るダイオラマ魔法球はすべて転送装置でつながっています

なんとあの人造人間 - サイコ・ショックを仲間にしました

本編でその後が語られなかつた人造人間 - サイコ・ショック

精靈界に還つたのか、消滅したのかわからなかつた

あの人造人間 - サイコ・ショック

タイタン助けてる人は多少はいたけどこつちは書かれることさえ珍しかつたから

書いてみました

めちゃくちゃフラグがたつてますがこのフラグの回収は遙か先です

よく考えると

人造人間 - サイコ・ショック

めちゃくちゃ弱くね

だつて伏せカードの1枚も伏せないとか

第1回遊輝パーティー紹介

遊輝のパーティーもしくは準パーティーの紹介です

名前：ライネス

種族：デュエルモンスターズの精靈

性別：

姿：人間形態ではブラックジャック

普段は小龍形態

小龍形態とは本来の姿のままハネクリボーホビの大きさに変化した姿

本来の姿は光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）
使用デッキ：漫画版万丈目デッキをもとに強化した光と闇のデッキ
がメイン

サブは遊輝と同じように大量に作っているがおもにドラゴンデッキ

好きなもの：遊輝・漫画版万丈目・十代・同族（デュエルモンスターの精霊）・遊輝の仲間

嫌いなもの：アニメ版万丈目・遊輝に敵対するもの・遊輝の嫌いなもの

特徴：神のミスのせいでの世界に来た

今は遊輝のことを心から信用している

能力：飛翔能力 ドラゴンなので飛べる

ネギま世界にて魔法を勉強しそれと兼用することで燃費が上がった

で燃費が上がった

ネギま魔法 ネギまの魔法

存在そのものが精靈なのが理由か相性がよく魔法の効率がいい

遊輝が現存する魔法を

改良して日本語にしたものを使っている

得意属性は光・雷・闇・影

始動キーはライト・オブ・ダーク・ライトネス

神鳴流 遊輝とともに習つた

レベルは斬魔剣 二の太刀を打て本家より強い

ブレス ドラゴンのブレス

ネギま世界やゼロ魔世界のドラゴンのものを参考に

エレメントブレスを打てるよう

能力値：チートドローレベル 1 62 参考 ユベル戦のアモン
が100レベル

デッキ構築レベル 1 56 参考 リアルな俺らのデッキ構築レベルが50くらい

い

魔力

172 参考 ネギまの一般魔法

先生レベル5

気 1 68 参考 ネギまの一般魔法

先生レベル5

剣術 1 85 参考 ネギまの桜咲刹那

(修学旅行時) レベル20くらい

ブレス 1 100

仮契約者：遊輝

血による契約

この契約により遊輝の持つ全能力使用可能（神様を脅しました）

仮契約カード

称号：光と闇を司るもの

アーティファクト：破滅の光と優しさの闇

（破滅の光は巨大な砲撃 形状はバ

ズーカ 優しさの闇

完全回復・

呪いの解除 形状は指輪 念じると切り替え可能）

徳性：信頼

方位：北

色調：白と黒

星辰性：月

服：ブラックジャックの來ていたやつ

種族：デュエルモンスターーズの精霊

性別：

姿：アニメで出てきた黒いコートに包帯で顔を隠している姿

普段はそのままサイコ・ショックカー

使用デッキ：サイコショックカー 中心のロックバーンがメイン

サブは遊輝と同じように大量に持っているがロックバーンがほとんど

好きなもの：遊輝・同族（デュエルモンスターーズの精霊）・遊輝の仲間・電気

嫌いなもの：遊輝に敵対するもの・遊輝の嫌いなもの・ライネス

特徴：アニメ通り十代とデュエルしそうなところを割り込んできた遊輝に負けた

その後遊輝によって復活をさせられた

能力：飛翔能力 精霊なので使える

ライネスにおさわったネギま魔法で燃費も上がった

ネギま魔法 ラテン語のものも使えるが遊輝が現存する魔法を改良して日本語にしたものを使っている

得意属性は闇・氷・雷・影

始動キーはサイコ・サイバー

ー・サイコ・サバイヴ

サイバー・エナジー・ショット サイコ・ショックターの技

能力値：チートドローレベル 1 37

デッキ構築レベル 1 63

マッドサイエンティストレベル 1 36

魔力 1 51

気 1 42

仮契約者：遊輝

血による契約

この契約により遊輝の持つ全能力使用可能（神様を脅しました）

仮契約カード

称号：最悪の頭脳

アーティファクト：電腦增幅器（魔力・気を上げる、頭脳の強化 形状は電腦增幅器）

徳性：信仰

方位：南

色調：紫

星辰性：冥王星

服：アニメで來ていた黒いコート

第1回遊輝パーティー紹介（後書き）

かなりチートです。

仮契約とはいってもこの世界じゃ当分役に立ちません。

第17話 精霊対決 ライネスVSサイコ

Side 遊輝

影分身から報告が届いた
何故に影分身?という疑問があるかもしだいので説明しよう
冬休みに修行に行っていたが実際の時間にすると100年を超す
その際まず修行チートである影分身を覚えるためにナルトの世界に行つたのだ

そこにいた神デモ隊(神様にマヤのことでデモをする軍隊) 第12番隊第2副隊長の金坂春真といつナルトの世界に転生した同志に教わった

ちなみに神デモ隊は俺を元帥とし30の部隊それに一人ずつ隊長がいてさらにその下に10人ずつ副隊長がいる
その副隊長の下に10人ずつの部下がいるという軍隊風のチームだ
ただ隊長や元帥といつてもえらいわけでなくまとめるための形だけのリーダーだ

つまり横のつなぎりだ

神デモ隊のネーミングセンスは気にしないでくれ

まあそんなわけで影分身ができる訳だ

どうしてそんなことを覚えたかはやはり元帥として形だけだったとしてもまとめていたから力をつけ同志たちのように強くなり仲間を助けられる存在になりたいから

もう一つ、遊戯王の世界でもリアリストはいる

それに精霊の世界に行つたとき対策だ

あのデュエルゾンビとかデスリングとかに対処できるようにでは、説明はここまでにして報告を見てみるか

ナルト世界より

風遁 螺旋丸
螺旋手裏剣

風遁 大突破

水遁 水龍弾

口寄せの術
を使用可能になつた

報告終了

報告を読んで俺が分身を解除すれば新たな術を使えるようになるそ
うだ

ということで早速分身を入れ替えた

実は俺と同じ転生者を見つけたら分身を置いて神鳴流以外はほとん
どいなでさつさと次のどこ行つたからな

とはいえ時々戻してダイオラマ魔法球の中で特訓しまくつたから1
00年くらいたつてしまつたんだが

まあ報告はここまでにして特訓だ

今、ライネスとサイコが向かい合つて
いる

サイコというのは例の人じんをうりんげん造人間 - サイコ・ショッカーの愛称だ

ライネスと俺とサイコで決めたんだが
最初にライネスが

「マスター、ショッカーというのはどうだらう」

「どう発言でサイコが

「私は悪の秘密結社のメンバーではない

君は少し失礼じゃないか」

「どう風に答えて仲が悪くなつたのだ

といふえライネスは面白がつてゐるだけのようだが

そこで訓練という形で
ライネスとサイコが戦うことになった

「ではデュエル開始」

俺がデュエル開始のコールをする
ちなみにここは当然だがダイオラマ魔法球の中だ

「「デュエル」」

「私のターンドロー
私は人造人間サイコ・リターナーを攻撃表示で召喚」

出てきたのは小さい黄色いサイコ・ショックカーだ
攻撃力は600

「更に私は手札から一重召喚を発動
このターン私は2度の通常召喚ができる
私はサイコ・リターナーを生贊に私自身を召喚する」

出てきたサイコ・ショックカー

といつてもホログラムで自分自身出でないけど
やつぱり痛いんだろうな、攻撃当たると

「更に速攻召喚を発動
サニー・ピクシーを召喚」

似合わねえ
すっげえええ似合わねえ
マジで似合わねえ

サイコ・ショックカーが
あのサイコ・ショックカーが
サニー・ピクシー？
あの妖精？

「手札から命削りの宝札を発動
手札が5枚になるようにドローする
更に魔法使い族の里を発動
このカードは自分フィールドに魔法使い族がいるとき相手プレイヤー
ーは魔法カードを使えなくなる
これで君の魔法・トラップは封じた
君はどうするターンエンドだ」

これ圧倒的不利な状態かな

「 我のターン、ドロー

私は手札のサイバー・ドラゴンを特殊召喚する
更に私は手札のTHE^ザトリックキーを手札を1枚捨て特殊召喚する
サイバー・ドラゴンとTHE^ザトリックキーを生贊に
来い 閻を司る我が半身
ダークエンド・ドラゴン
ダークエンド・ドラゴンの効果を発動する
2回攻守を500ポイント下げ
サイコ・ショックカーとサニー・ピクシーを破壊する
我が半身よ、いけ
ダークライシス
更に強欲な壺を我は発動する

2枚ドロー
天使の施しを発動する
3枚ドローし2枚捨てる

私は流転の宝札を発動する

2枚ドロー

更に光竜の煌きを発動する

手札のドラゴンを2枚墓地に送りテッキから光属性のドラゴンを特殊召喚する

来い 光を司る我が半身

ライトエンド・ドラゴン

更に墓地の光属性 サイバー・ドラゴンレッドアイズ・ブラックドラゴンと

闇属性 真紅眼の黒竜ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴンを除外し

来い 锐き光の竜ライトバルサー・ドラゴン

更に我は命削りの宝札を発動する

手札が5枚になるようにドローする

墓地の光属性 銀河眼の光子竜ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴンと

闇属性 レベル・スティーラーを除外し

来い 热き闇の竜ダークフレア・ドラゴン

絶景だな

ドラゴン4体が降臨している

それに比べサイコは調子に乗つて伏せカードを伏せないんじゃなかつた的な顔をしている

「速攻召喚を発動

2体の我が半身を生贊に
我自身を召喚」

サイコの時も言つたが
ホログラムで自分自身出てないけど
やつぱり痛いんだろうな、攻撃当たると

「我を含む3体の竜でアタック

ライトパルサー・ドラゴン パルスストリーム
ダークフレア・ドラゴン フレア・オブ・ダークネス

そして我自身の攻撃
〔ライス・テンペスター・オブスクランス
闇の吹雪〕

40000 - 25000 = 1500
15000 - 24000 = - 900
- 9000 - 28000 = - 3700

ピ-----

俺は笛を鳴らした

「勝負あり

勝者ライネス

それとサイコ、お前は伏せカードを伏せろ」

「これからは気を付けますよマスター」

「またデュエルしてやるぞサイコ」

「いいでしょう

調子に乗っていると次は負けますよ
ライネス先輩」

「お前らやめろ

とりあえずデュエルの訓練終わり

俺は学校行くからこれからネギま魔法の訓練をサイコにつけておいでくれライネス」

「分かったマスター
安心して言ってくれ」

この時俺は知らなかつた
今日があのウザい、十代目くわやか部長との初の邂逅の日だつた
ことを

第17話 精霊対決 ライネス×サイコ（後書き）

はい、最後ので分かるように次回はさわやか部長が来ます

第1-8話 わわやか部長との邂逅 VS 綾小路リシリ 十代編（前書き）

今まで最長になってしまった。
あの熱血馬鹿のセリフ長すぎや。

第1-8話 わざやか部長との邂逅 VS 綾小路ミシル 十代編

Side 遊輝

「今日の体育はテニスを行います」

何故テニス?

まさか今日があの熱血馬鹿との邂逅の日か?
いや違つてくれ

朝の特訓を見てから来たがあんなのと会いたくない
ただでさえストレスがたまってるんだ
暴走しちまう

まあ、サイコを仲間にできてよかつたけど
ライネスもからかわなければいいんだが

「　　「　　「　　「　　「　　はーーー」「　　「　　「　　「

クラス全員がはーいつて

小学生か?

そういう俺は無視してるが

そしてテニスが始まった

Side auto

Side 十代

「つたぐ、テニスがデュエルと何の関係があるんだよ」

翔なんてへっぴり腰で返してるぜ

「鮎川先生も

本当はバレーボールがやりたかったそうですねわ

ボールが打ち返してきた

いや、バレーボールも関係ないだろ

「どうちも同じだよ」

そういうて俺はジャンプして打ち返したって

「やべ、よける明日香」

当たりそうになつたところを謎の人影が出てきて打ち返した
って誰だいつ

しかもクロノス先生の方について

あつぶつかつた

「明日香さん！

お怪我はありませんでしたか」

れつきの男が明日香の方向いた

「大丈夫？

怪我しなかつたかい？」

なんかさわやかつて感じだ

といふか後ろの二人、目がハートになつてるけどいつたいどうした
んだ？

「いえ、大丈夫です
助けていただいてありがとうございました」

「（オベリスク・ブルーの天上院明日香君かあ）」

「あのまだ何か？」

「え、いやあははははは、失敬失敬
知らなかつたよ、我がオベリスク・ブルーに君みたいな美しい人が
いたなんて」

「あの」

「え、うわ、あはははは
ちょっとキザだつたかな、忘れてください
はは、ははははははは
いやあ青春青春」

なんか変なの

S i d e a u t o

S i d e 遊輝

なんだよあのジャンピングスマッシュ
十代つて本当に人間なのか？
俺が言えるこつちゃないけどさ
魔法使えるし、気使えるし、忍術使えるし
いや、でもおかしい

なんだあの十代の身体能力は

しかも本当に今日が熱血馬鹿と書いてナルシストと読む綾小路ミツルとの邂逅の日だったとは

ああむかつく

殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい
あの熱血馬鹿ナルシストを狩りたい

そんなこと考えてると俺の方にボールが飛んできた

「隙あり！」

相手が調子に乗っている

「隙無しだ！」

いくぞ、秘剣ツバメ返し

本来この技は

一瞬で三つの斬撃を飛ばし敵に攻撃する技だが

テニスで現在俺が使つてるのは

3つの衝撃波でテニスボールの軌道を無茶苦茶にしながら相手に打ち込むという技だ

その技が決まったと思つたその時

テニスコートの外にいたモブ女子Aに向かつていった

「キャアア」

するとあの熱血馬鹿ナルシストがやつてきて打ち返したのが

あ、またクロノスに

あいつ絶対狙つていいだろ

それからしばらくして授業が終わつた後

保健室にクロノスに謝りに行つたのだが

「「どうもすこませんでした
ごめんなさい」」

「「めんど済むならポリスはいらないーのね」

謝つたらこんなこと言つてきた
まあ、俺は棒読みだつたけど

「でや、シーラーラ鮎川、もっと優しくお願ひしますのーね」

「十代君も遊輝君もわざと出なかつたのですし
その辺で許してあげてはどうですか？」

クロノス先生」

ありがとう鮎川先生
あなたはいい人だ

「ノンノンノーン

それではまるーで出しつぱなしーのビールではありますーか

「「ううう..」

鮎川先生も意味がわからなによつだ
隣の十代の頭の上にも?が浮いている

「なまぬるーの

ダジャレかよ

鮎川先生もひいてるぞ

「ああ」

「ダジャレかよ（———）」

十代も言つてるよ

「ぐぱ

何か言いましたか、ドロップアウトボーイズ

「つづか、直接ボールあてたの俺じゃないし

確かに

「俺も直接当ててないし」

「だまるの一ね

この期に及んで他人のせいにするなんーて
よろしい、罰として我が名門テニス部の一 日体験入部するのーで
す

「なんだそれ、無茶苦茶だる」

「まったくだ、なんのつながりがあつて

「出ないと単位は上げませんーのよ」

職権乱用！！

S i d e 三人称

その頃明日香たち

「明日香さん」

「分かりましたわ、あの殿方の正体が」

「大声出さないでよ、恥ずかしい
まるでわたしが調べろって言つたみたいじゃない」

周りの生徒は明日香たち3人に目を向ける
といつても一人ほどしかいないのだが

「でもお」

「興味わきますわよ」

明日香の取り巻き

ジユンコとももえが言つには名前は綾小路ミツル
綾小路モーターズの御曹司だしい
ただのナルシストだが
デュエルの腕もあるカイザー（笑）に負けるとも劣らないらしい
「だから興味ないつてば」

明日香は一切興味を持たなかつたが

「へや、えい」

今十代に熱血馬鹿ナルシストが打ち込んでいる

「はあはあ、テニス部部長つてこいつの事だったのか
しつかじこりゃあきつこぜ」

女子からボールを渡されている熱血馬鹿ナルシスト

「つたくクロノスのヤツ覚えてろよ
うわあ」

十代の頭にボールが当たった

「大丈夫か、十代」

「立て！立つんだ遊城十代君！
これくらいでぐじけちゃいけない
今頑張らないでどうするんだ！
今日という日は今日しかないんだぞ！」

何を当たり前のことを

といつか十代の事も知りもしないで

「あたりまえじゃないか、なんなんだこの暑苦しい奴は」

「そし「先輩、十代は疲れてきてる、俺が交代する」む、わかつた
君がそこまでやりたいというのならやらせてやる」

あと50球やつてもうおつとおもつていいたが
さつきの続きだがね明日といつ字は明るい日と書くのだ
……」

……」

俺は無視しつつの間にか来ていた翔たちの話を聞く

「あの部長わわやか笑顔で『いつ』と『西』がかつて『いるよ』ね

「ていうか意味不明なんだけど

「いいんですね、顔がよければ」

おいももえ、お前はそれでいいのか

「48・49、もうめんどくせえ
くらえ秘剣ツバメ返し」

なんてやつてると

「え、あら、明日香様」

「ぐ、明日香君ー（キラーン）」

うえ

気持ちわる

何こいつ

「やあ、明日香君、うれしいなあ
僕に会いこ……」「

ざまあみろ

無視されてやんの

「ねえちょっと話があるんだけど」

「「え？」

俺と十代はそう答えた

「さつき大徳寺先生から聞いたんだけど
万丈目君を見つけたって人がいたらしいの」

「万丈目?どこにいたんだ」

「それは本当か?痴女」

「痴女じゃないわよ
それが……」

俺らが話しているところをにらんでくる熱血馬鹿
ナルシスト

「離れたまえ明日香君……」

「うん?」

「え?」

「は?」

上から十代、明日香、俺の反応だ

「あまつこひこひ」とは言いたくないが、……」

「オベリスク・ブルーの妖精つて
うえ、いやかも」

翔、お前が考へていることは多分違う

「それに君は明日香君のことを痴女だなんてバカにして……」

「どうか目が赤い
何処の戦闘民族だよ
すげえナルシスト発言してるし

「ちょっととまて、あんたなんか勘違えしてないか?
俺とこいつは別に「いまさら言い訳とは見苦しいぞ十代君……」

いや、あんたの方が見苦しいから

「いや、だから「明日香君をこいつ呼ばわりか
十代君僕とデュエルだ」

「人の話を聞け」

まったくだ

「君もデュエリストならここの潔くデュエルで決着をつけようじや
ないか」

「だから決着つてなんのだよ」

「ズバリ勝った方が明日香君のファインセになるのだ」

おいおい、勝手に決めて

「ちょっと待って何よそれ」

ももえはともかくジュンコと翔は呆れてるし

「そこ」の関係ないつて顔をしている君もだ

「え、俺？」

「君も明日香君を痴女だなんてバカにして
僕が制裁をしてやる！」

つて感じでまず十代と熱血馬鹿のデュエルだけじゃなく俺と熱血馬
鹿のデュエルもすることになった

「勝負だ、十代君！」

「おお、望むところだ！」

「「デュエル！…」」

始まった

「明日香様を巡って一人の殿方がデュエルだなんて、素敵すぎます

！…」

「馬鹿馬鹿しい、付き合いきれないわ」……

女子三人組がしゃべっているが

明日香は熱血馬鹿のデュエルの腕以外には本気で興味なさそうだ

「そんなことねえよ、ただのバーンだ」

「え、 そのなの？」

「そうだ痴女

ただバーンで勝つてるだけ

普通の強い奴とあまり変わらん

「痴女っていうな
でもそうなの、完全に興味なくなつたわ
でもどうしてそんなこと知つているの」

「禁則事項だ」

「あ、 そう」

「僕のターンドロー

先手必勝、マジックカードサービスエースだ」

「いきなりマジックカードかよ」

お前が言つか

「「」のカードはね

僕が選んだカードの種類が何かを君があるるギャンブルカードを
マジックか？トラップか？はたまたモンスターか？

見事ある」とができればOK
だがもし間違えたら十代君、君は1500ポイントのダメージを食
ひ込むことになる

いや、なぜそのカードが禁止カードにならん
効果が強力すぎるだろ

「面白こじゃんか（よおし）」

ガイヤがガヤガヤ言つてる

「おこおこ、まさかカードを透視しようつなんて言つたじゃないんだ
うつね」

「やうだけど」

「おいおい十代君そんなことできるわけないだろ」

「それもそうだな
じゃあ魔法だ」

「ファイナルアンサー？」

「いややつぱりやめる
モンスターだ、モンスターカード」

「本当にモンスターでいいのかい？」

「ああモンスターだ

「運がいいね、僕が選んだカードはモンスターカードの神聖なる球体だ
僕は神聖なる球体を墓地に送る
僕はモンスターをセット、カードを一枚セットしてターンエンドだ
よ」

「俺のターンドロー
シールドクラッシュユを発動するぜ
その伏せモンスターを破壊
更に苦渋の選択を発動
俺が選ぶのはこの5枚だ」「

E・HERO スパークマン2枚とE・HERO フュザーマン2枚
それにE・HERO バーストレディ1枚

「E・HERO バーストレディを手札に加えたまえ」

「2枚目の苦渋の選択を発動
今度はこの5枚だ」

E・HERO ワイルドマン2枚
E・HERO フォレストマン2枚
E・HERO クレイマン1枚

「E・HERO クレイマンを手札に加えたまえ」

「3枚目の苦渋の選択を発動

最後はこの5枚だ」

E・HERO バブルマン 3枚
E・HERO ネクロダークマン 2枚

「E・HERO ネクロダークマンを手札に加えたまえ」

「俺は融合を発動
手札のE・HERO バーストレーディとE・HERO クレイマン
そしてE・HERO ネクロダークマンを融合
来いV・HERO トリニティー」

あ、決まった

つてこれタイタンの時と同じじゃね

「このカードが融合召喚に成功したターン、
このカードの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になるぜ
代わりにダイレクトアタックはできないけどな
だけど、さらに命削りの宝札発動

5枚ドロー

ミラクルフュージョンを発動墓地のE・HERO バーストレーディ
とE・HERO フェザーマンを除外
來い、E・HERO フレイム・ウイングマン
更に2枚目のミラクルフュージョンを発動E・HERO フレイム・
ウイングマンとE・HERO スパークマンを融合
來い、E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン
3枚の一族の結束を発動

このカードの効果は自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が
1種類のみの場合、自分フィールド上に表側表示で存在する
その種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップするだ
よって俺の場のすべてのモンスターの攻撃力2400ポイントアップ

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマンは俺の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカード1枚につき攻撃力を300ポイントアップ

墓地には12枚のE・HERO

攻撃力3600ポイントアップだ

場を整理すると

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン

2500 + 2400 + 3600 = 8500

V・HERO トリニティー

2500 × 2 + 2400 = 7400

「V・HERO トリニティーはダイレクトアタックができないけど

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマンはできる

いけ E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン

シャイニング・シューート

4000 - 8500 = - 4500

「な、いつただろ」

「ええ」

「僕が負けるなんて」

目が涙目になつてゐるし

「いやでもまだだ

遊輝君、君への制裁が僕には残つてゐる
遊輝君『デュエルだ』

持ち直したよ

折れてくれればいいのに

まあいい

「ならば貴様の魂狩ライフらせてもらおうか」

「『デュエル』」

第1-8話 わざやか部長との邂逅 VS 紗小路ミシル 十代編（後書き）

『サービスエース』 効果

通常魔法

自分の手札からこのカード以外のカードを1枚選択し、相手にそのカードの種類を当てさせる。

当たつた場合はそのカードを破壊する。

ハズレの場合はそのカードをゲームから除外し、相手に1500ポイントのダメージを与える。

第19話 热血馬鹿（ナルシスト）狩り VS 綾小路ミシル 遊輝編

Side 遊輝

「いやでもまだだ
遊輝君、君への制裁が僕には残つていて
遊輝君『デュエルだ』

「ならば貴様の魂狩ライフらせてもらおうか」

「「デュエル」」

という感じで始まりました

社長の言葉を借りるなら

強勒！無敵！最強！ 粉碎！玉碎！大喝采！！
まさにそのようなデュエルにしようではないか
否！

この熱血馬鹿を合法的に殺れるのだ

社長の名言じやあ生温い

惨殺！抹殺！大虐殺！！

くらいいの気で行かせてもらおう

「俺のターンドロー

融合を発動

手札の2体の銀河眼の光子竜ギャラクシーアイズ・フォイン・ライコン【OCG版】を融合

来い ツイン・フォイン・リザード

ツイン・フォトン・リザードは2体のフォトンと呪のついたモンスターで融合召喚ができる

そしてこのカードをリリー···生贊にする」とでこのカードの融

合召喚に使用した

融合素材モンスターを一組墓地から特殊召喚できる

俺はツイン・フォトン・リザードギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴンを生贊に

来い 銀河眼の光子竜ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン「OCG版」

俺のファイールドに二つの十字架のようなものが現れる

それを俺が投げると

十字架のよくなきものの姿が変わり

銀河眼の光子竜ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴンになつていつた

「攻撃力3000が2体だと」

「さりに俺は手札を一枚伏せターンエンドだ
さあ、貴様のターンだ

肩は肩らしく踊つて見せろや」

「なんか遊輝君の様子おかしくないですか

「確かにおかしいわね」

「いや、あれは遊輝が切れてるからだぜ
あの状態になつたらあいつはもう自重しねえ」

「アニキ、詳しいっすね
なんでそんなに詳しいんすか」

「何度もあの状態見たからな

「ええ、僕ずっとアニキと一緒にいるけど今日初めてみたっすよ

あんな状態の遊輝君

「それはなんていうんだっけ？」

あ、そういうあいつみたいに言つと禁則事項つてやつだ」

「ハルヒ？」

翔たちがなんか言つてるが気にしねえ
こいつを殺して潰して晒して消して潰すべしの勢いでこいつの傲^{ブラ}
慢を潰してやる

「ほ、僕のターンドロー

僕はマジックカード サービスヒースを発動するよ」

そいつか

貴様は自滅の道を歩きな

「効果はさつき説明したけどもう一度言つよ
このカードはね

僕が選んだカードの種類が何かを君があてるギャンブルカードさ
マジックか？トラップか？はたまたモンスターか？

見事あることができればOK

だがもし間違えたら遊輝君、君は1500ポイントのダメージを食
らうことになる

それは一部の場合を除いてな

「では俺はトラップを選ぶ」

「ファイナルアンサー？」

「ファイナルアンサー」

「残念外れだよ

このカードはモンスターカードの神聖なる球体だ」

またかよ

「君に1500「地獄の扉越し銃を発動

そのダメージ貴様に受けてもらおう」なんだと、ぐわああああああ

4000 - 1500 = 2500

ぞまあみろ

「僕はモンスターをセットしてカードを1枚伏せターンエンドだ」

このターンで終わらせよう

「俺のターンドロー

天よりの宝札「アニメ版」を発動

お互い手札が6枚になるようにドロードだ

「ここで究極のドローカード……」

「（ニヤリ）融合を発動

俺は手札の銀河眼の光子竜とフォトン・レオを融合

来い ツイン・フォトン・リザード

更にツイン・フォトン・リザードの効果を発動

このカードを生贊に 戻つてこい 銀河眼の光子竜 フォトン・レオ

ギャラクシー・アイズ・フォトン・レオ

さつきと同じように十字架を投げる
そして、また姿を銀河眼の光子竜に変えていく

「フォトン・レオの効果を発動
ハウリング・ブロー」

吠える機械的な獅子
その効果は凶悪だぜ

「このカードの効果はこのカードの召喚に成功したとき
相手の手札をすべてデッキに戻しその枚数分俺がドローする
貴様の手札はさつきの天よりの宝札「アニメ版」の効果で6枚

デッキにカードを戻す熱血馬鹿ナルシスト

涙目でいい顔だ
だがまだ止まらない

「6枚ドロー

俺はシールドクラッシュを発動する
その伏せモンスターを破壊」

手札は8枚

「遊輝の手札おかしくないかしら

あんなにいろいろやつてるのに8枚とか

「そうですね
おかしいです」

「翔、あきらめろ

遊輝がいつにはあれが遊輝クオリティーだつても」

「なんかアニキが頭がよくなつてゐる氣がするつす

なんか漫才? やつてるけど無視だ
目の前の熱血馬鹿を潰すんだ

「さらに融合を発動する

フィールドのフォトン・レオと手札のフォトン・ケルベロスを融合
三度現れろツイン・フォトン・リザード」

手札は6枚

「俺はアンデットワールドを発動
効果によりフィールド上及び墓地に存在する全てのモンスターをア
ンデット族として扱う
ツイン・フォトン・リザードの効果を発動
戻つてこいフォトン・レオ フォトン・ケルベロス
フォトン・ケルベロスの効果
このカードが召喚されたターン
お互ひにトラップを発動できない」

「なんだと! ! !

手札は5枚

「3枚の一族の結束を発動

このカードの効果は自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が
1種類のみの場合、自分フィールド上に表側表示で存在する

その種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップするだ
俺の墓地のモンスターもフィールドのモンスターもアンデットワー
ルドの効果によりアンデット族
よつて俺の場のすべてのモンスターの攻撃力2400ポイントアップ
更に団結の力2枚を1体の銀河眼の光子竜に装備

手札0枚

銀河眼の光子竜団結の力装備

3000+2400+4000+4000=13400

銀河眼の光子竜×2

3000+2400=5400

フォトン・レオ

2100+2400=4500

フォトン・ケルベロス

1300+2400=3700

「あ、ああ」

怯てる
いいぎまだ

「全員でダイレクトアタック
フォトン・ケルベロス フォトン・ファング
フォトン・レオ シルバー・ファング
そして3体の銀河眼の光子竜よいけ
破滅のトリプルフォトン・ストリーム」

2500-3700=-1200
-1200-4500=-5700

$$-5700 - 13400 - 5400 - 5400 = -29900$$

「せぬ、すつせつした
せつしたみくなむくなひこて」

十代に翔、明日香にその取り巻きのジョンコとももくも引いてる
いたいざつした

۱۷۰

۱۰۷

L

俺以外の5人が熱血馬鹿の様子を見て驚いてる
ナルシスト

あ、走つて逃げた
じゃ、俺も帰るか

「みんな、じゃあな

アディオース！！」

俺は寮の自分の部屋に帰つて行つた

第20話 番外 冬休みの修行その1 神鳴流

Side遊輝

ふう、逃げ帰ったな
これ以上の面倒はもう御免だ
あの熱血馬鹿ナルシストと原作通りならもうかかわらないだろう
でもやっぱまずかつたか
まあいいか

教える側がいなくなつたしテニス部一日入部も終了だろ
まさか明日仕切り直しはないだろ

「それにしてもこれを見ていると冬休みを思い出すな」

そういうて見ているのはリアルに真剣の
黒刀・黒曜舞と**白刀・破邪銀龍**

長さはそれぞれネギのぎまの桜崎刹那の夕凪と同じくらいの長さ
素材は黒刀・黒曜舞が黒曜石を中心に玉鋼たまはがねやアダマンタイトを使つて作られた

白刀・破邪銀龍は破邪の銀を中心ミスリルに白銀プラチナなどを使つて作られた
作る際に魔力を素材に込めて渡したので強力で特殊な剣になつている
黒刀・黒曜舞は妖刀に
白刀・破邪銀龍は破邪の銀使つたせいか聖剣に

それにしても本当に思い出す
あの修行の日々

おおつとネギまの世界についたか
じゃあ神鳴流を習いますか

よし京都、京都つと

そう思つて俺は何もない空間に手を出して開くと
空間が割れ

そこに入つて行つた

「よしついた京都つて
アルエエエエエ、どうしてこんなに建物が古いんだ
いくら京都でもおかしくないか」

そつ周りにあつたのは明らかに平成には似合わない建物ばつかだつた

「あなた様はもしかして」

そう考へてると

後ろから何か声が聞こえて振り返つた

「やつぱり元帥……」

元帥つて

こいつ転生者か

神デモ隊なら顔は全部覚えたんだがこんな奴いたか

「誰だつけ？」

「僕ですよ

神デモ隊第26番隊第9部隊第7番 近衛孝樹ですよ

「あの孝樹か！変わったな
それにしても今は何年だ」

「1820年ですよ元帥」

「元帥はやめろ
遊輝でいいって孝樹」

実はこいつとは生前からの知り合いなのだ
だけど元帥つてずっと言つてくる変な奴

「そうか、道理で
それにしても偶然お前に会うとはなんだ」都合主義だな
そういうば、お前近衛つて名字だし近衛家に生まれたのか?
だったら神鳴流に俺を入れてもらいたいのだが

「いいですけど遊輝は遊戯王GXの世界に行つたのでは?
何故ここにいるんですか?」

「敬語もやめろ

それはだな、ちょうど冬休みに入つたからいろんな世界に行つて修
行しようと思つてな
だから修行チートの影分身はもう習つたぞ
第12番隊第2副隊長の金坂春真にな」

「そなのか遊輝

だが、遊戯王GXの世界ならデュエル以外で戦闘はないと思うが

「それはなりアリスト対策と
精靈の世界に行つた時の対策だ
デュエルゾンビとかデスリングとかに対処できるよ」
それに何よりも遊戯王GXの世界が終わつたら別の世界を旅する気
だし

ところでお前、ほんとに口調変わるな早いな

「口調の事は気にするな
じゃあ、とりあえず本山に行こつか
歩きだけど大丈夫?」

「問題ないし歩く必要もない」

「え?」

「どうこうと俺は何もない空間に手を伸ばした
すると空間が割れる

「じゃあ行くとするか
本山の風景を思い浮かべてくれ」

「え、わかった」

「じつはこの能力

時空間移動能力だが強く場所のイメージをすることとその場所につ
なげるのだ

「よし行くぞ」

俺らは空間の割れ目に飛び込んだ

「そりいえば、お前不老不死？」

「勿論

わらわのへりいは生きじると思ひます」

「どうしてそんなことに？」

「不老不死頼んだら

何故か赤ちゃんの時に大妖怪 九尾の狐を封印する人柱ひとまこじゆにされて
ナルトみたくなったんです
だけど、なぜか封印解けるまで死がないという変な呪いみたいのが
かかつたつていう設定に
あの馬鹿神がして」

「成程、なんて言つてゐつちひついたみたいだ」

よつと

俺たちは本山にある建物前に突然あらわれたのだが

「お前たち何者だ」

「名を應える」

「さもなくば殺す」

つてこれはないだろ
と思っていると

「俺の友達だよ、早く通してくれないかな（黒笑）」

怖い、なにいつの間にそんなスキルを

「あ、あなたは孝樹様
分かりました、どうぞお通りください」

そうして俺らは中に入つて長と面会することになつたんだ

「近衛丸、こいつに神鳴流を教えてやつてくれないか

頼む」

「孝樹様の頼みならもちろん教えますがこのく「大丈夫だ、裏を知つていい」なら問題ありませんね

それに孝樹様直々に教えるなどというからには早々鍛えたがえが・・

・ふふふ

なんか嫌な予感がしてきたが大丈夫か?

2年後

一気に飛びすぎだつて

いやだ、あの修行の日々を思い出させるな

最初のうちはよかつたんだ

ダイオラマ魔法球も影分身も知らなかつたから

夜にはダイオラマ魔法球に入つてゆっくり寝て修行を影分身で行つてて行うのを繰り返せたから

それがばれてからは余計きつくなつた

10体影分身出して

走るときはほかの人気がビリだつたら本山回り5周追加なのに

俺だけ俺と1位の間の人数×10周追加とか
長から一本取るまで永遠に打ち込みとか

しかも平氣で奥義とか使ってくるし
こんな感じで

「アキラセヨ」

と俺が横切りのよう^ノに打ち込む

甘い

と剣を俺が切りかかつた方で下に向けてガードをする

「神鳴流奥義」
斬空閃
「神鳴流奥義」
斬鉄閃
「神鳴流奥義」
斬岩剣」

と連続で打つてくれる

俺が一ドできず全部食らう

陰陽術で即回復

すぐに再開

とこの繰り返しだつたんだ

それで今田免許皆伝

—今田で免許皆伝だ

よく頑張つたな遊輝君

そこで刀を作つてあげよつと思つんだがビリする

「はい、お願ひします」

ちなみにここは神鳴流の道場ではなくダイオラマ魔法球の中だ
俺だけにここで特別メニューを組んでたし
ほかの神鳴流の人はもう俺が免許皆伝したと思つている
理由は簡単

道場で一番強い人を倒した

それだけ

「あと素材はこれでお願いできますか」

「いいが、なんだこの魔力は
ものすごい量だぞ」

「俺の能力の一つに限界点突破というのがあります
それのおかげで魔力や気も使えば使うほど増えるんです
それのおかげで増えた魔力を大量にこめたんですね」

「成程、孝樹様と同じというわけか
確かにその通りだな」

この会話で分かるように長は孝樹と俺の秘密を知っている
ちなみに孝樹は今いなく
前にあつたエヴァンジェリンと一緒に
なんか桃色オーラ出していたが

「お願いします」

「分かつた

それから数か月後
俺のところに刀が届いた

「黒い方が黒刀・黒曜舞で白い方が白刀・破邪銀龍だ」

「分かりました
これから頼むぞ黒曜舞 破邪銀龍」

「で、これからどこに行くんだ」

「旅を続けようと思ひます
またここには来ます」

「やうか、怪我の無いようにな」

「ありがとうございます、長

そういうつて俺は次の世界にいった

第21話 閻夜の巨人 十代VS大原&小原

Side遊輝

本当に懐かしいな
もうすぐ危険なイベントも増えてくるし常備しておぐか?
そうだ、ついでにあれらも常備しておくか
そうして取り出したのは

デクナツツの仮面・ゴロンの仮面・ゾーラの仮面・鬼神の仮面・金剛の剣

そしてムジユラの仮面

デクナツツの仮面・ゴロンの仮面・ゾーラの仮面・鬼神の仮面・金剛の剣はリンクさんの修行終了時に免許皆伝祝いにもらつた
ムジユラの仮面は修行の時現れた悪い転生者を倒し神様のところに連れて行つたら

お礼としてもらつた

詳しいことはまた別の話つてな

まあ、メタな発言はここまでにしておいて

旅の途中で手に入れたISの量子変換を利用して中に突っ込んでお

いて

じゃあ寝るか

Side auto

Side三人称

遊輝たちが綾小路ミツルと戦つてから数日後の夜
アカデミアのある場所でモブオベリスク・ブルー生徒がデュエル
をしていた

「うわああああああああああああ」

オベリスク・ブルーの生徒は『ユエルに負け後に吹き飛ばされる
その時にカードが周りに散らばつていく

「ひいいいい」

そのオベリスク・ブルーの生徒に近づいていく巨大な影
その巨大な影は散らばったカードの中からウルトラレアカード
パーフェクト機械王だけを取る

「レアカードはもらつておく」

「はあああああ

震えるオベリスク・ブルーの生徒
そして巨大な影は続けて言葉を放つ

「これに懲りたらでかい態度はあらためるんだな」

そういうて巨人は去つていく

それに安心するオベリスク・ブルーの生徒

その方向にはニヤリと笑う一人のラー・イエローの生徒がいた

Side auto

Side 遊輝

いま、俺らはアカデミアの廊下を歩いている

するとオベリスク・ブルーの生徒が話しているのを見かけた

「^{おは}昨夜」

「レアカードを」

「また」

それを見て十代がつぶやく

「なんだ」

そうするとオベリスク・ブルーの生徒が逃げるよ^うに離れていった

「なんか気に入らないな、^{レモ}ソシヤガつて」

「確かに」

俺も相づちを打つ

「オベリスク・ブルーの奴ら、また何か企んでるのかも」

「いや、多分あの噂のせいだろ?」

「噂?」

十代が訝しんでる

なんかこの状況、テレビで見たけどなんだっけ

「オベリスク・ブルーの奴らにテュエルを吹つ掛けるテュエリスト

がいるらしいんだな

それも禁止されているアンティールールの「テュエルを」

「ああ、その噂僕も聞いたことある」

「詳しく述べは分からぬけど、そのデュエリストは雲をつくような大男だしいんだな」

雲をつくようなつて

誇張しそぎだろ

「うん、うん」

つて何うなづいてんだ翔は

「そいつは夜しか現れないんだな

だから闇夜の巨人デュエリストって呼ばれているんだな」

ちよつと待て

それは夜に外に出るオベリスク・ブルーが悪いんじやないか
そもそもアンティールールを受けるのもおかしい

そんなことを考えていると

独り言を言いながらクロノスが来た
何度見ても気持ち悪いな

3次元だから余計に

あ、こっち来た

「セレのドロップアウトボーアイズ」

「なんですか白面先生」
クロノス

「わ、クロノス教諭」

「なんかシニヨール石崎の言い方に違和感を覚えたの一ね
まあそれはいいの一ね

あなたたち一に特別課題を与えるの一ね」

「「特別課題?」」

俺と十代の声がシンクロしたが
確かにこれは、うん間違いない
地球の本棚（弱）でもそつ出した

「これをうまく解決できたーら、デュエル理論のレポートを免除するの一ね」

「ほんとか」「マジで」

俺と十代はまたしても心がシンクロした

「ええ、ヤバいよアーティ」

「ほんとのーね、この目を見るのーね（一一コロンチヨ）」

「おっしゃるぜー」「俺もだー」

「「ええ」」

「十だあい」

「で、なんだその課題つて」

さすが十代、行動が速い

「今、この学園でアンティールールで『テュエルを挑む輩がいるのーね
そいつをつか「成程、そいつを追い出すなりなんりしてこれから
の被害をなくせばいいんですね
くう、そのとおりなのーね（ほんとは正体を暴かせようと思つてい
たのー）』」

「闇夜の巨人『テュエリストを?』」

なんか焦つてる

「とにかくしつかりやるのーね、カンゾーネ」

カンゾーネつて何?
去つていく白面クロノス

「よおし謎の『テュエリストを探すぞお』

「勿論だあー!」

「でもアーニキに遊輝君、こんな引き受けたまづかったんじや」

大丈夫、俺犯人知つてるし
まあ、今回は名探偵十代に任せると

「ええ?」

「クロノス教諭なんだぞ」

「何言つてゐんだ

レポート免除されて強い奴とデュエルできるんだぜ」

「デュエルはともかくレポ免は嬉しい」

「もおう、アーキと遊輝君つたらあ

「仕方ないよ十代と遊輝だから」

ため息つかれたがレポ免は嬉しい

「で、どうするのアーキ

「？」

「謎のデュエリスト探しだよ」

「それなら問題ない」

「え、遊輝君何か考へあるの？」

「ああ、俺が裏ルートで手に入れたオベリスク・ブルーの制服を着て夜にひきうろすればいい」

「もつてこる理由が気になるつす

「禁則事項だ」

「やつつか

Side auro

Side十代

今俺らは『ユヘルリンクに来たんだけど

「あ、ラー・イエローの方が勝ってる」

「いい勝負だな」

「確かに」

「どうした、お前のターンだぞ」

「ええっと、はあ

あのオベリスク・ブルーの生徒マナー悪いな
相手が考えるのにちょっとひどくないか

「うう？、十代手札みてみる」

遊輝が手札みてみろって言つてきた

何かあったのか？

「ああ、アースクエイクなんて洒落たカード持つてるじゃん
これであいつの勝ちは決まりだな」

「やつやとしるよー！

「うひが手加減してやつてゐるんだぜ……」

あいつ本当にマナー悪いな

「はあ

「ハーリー・イヒローが何やつても無駄だよ」

「うせ勝てる訳ないんだ、早くしりよ」

「ええとお

「攻撃するのかしないのか、わざとしきー。」

「へえ、はい！！」

猛進する剣角獣で攻撃します、あ

「はあ？」

「何やつてんだ？」

「え？」

遊輝のいつとおりあいつ何やつてんだ
そこはアースクエイクを使つといふだろ

「リバースカードオープン！！援軍

このカードの効果でモンスター1体の攻撃力が500ポイントアップ！

いけえ切り込み隊長

「うう、あ

「勝てたデュエルなのに」

「確かに」

「小原ももう少し気が強ければな」

「三沢君」 「空氣」

「なんか変な響きが
まあいい、実力はあるんだが『テュエル本番になると氣の弱さが出て
負けてしまう」

そうなのかな

元エエルは楽しくやるもんだと思つんだけどなあ

「お前みたいなやつは、いつまでたってもオベリスク・ブルーに上がるもんか」

「ああ、く

「さつさつはつはつ」

「やつをと辞めてしまえばいいんだ」

あ、あいつ今の殺気は

「十代！」

遊氣も気づいたみたいだな

Side auto

Side 遊輝

「十代！」

あんな分かりやすい殺氣、もしあの一人がダイオラマで修業中じゃ
なかつたら警戒態勢に入ってるぞ

「何つすか」

「いや、なんでもない」

「ところでお前たちは見学か？」

「ちょっと犯人を捜しに」

「犯人？」

「闇夜の巨人デュエリストを探してるんだ」

「ああ、噂は聞いているが」

あれが大原か

「おお、大きい奴だなあ」

お前が言つか

「ほんと、アーチキもしかしてあいつが」

「彼を疑つてるのか？違つ違つ」

「でも、あんな大きい奴そうはない」

「はは、大原君つていうんだ

彼はデュエリストでなくゲームデザイナーを目指している」

「そつかあ、でも」

あいつからは殺氣がないな

それから俺と十代が走つていく

「アーチキ」

「遊輝」

走つて行つてあの一人のところに行つた

「おおい、ちょっと待てよ」

「お前が謎のデュエリストだな」

それは直球すぎるな
で、話していると

大原と小原は言いがかりはやめろつて言つて去つて行つた
翔と隼人は原作通り、否定してるな

その日の夜

じゃあ着てつて

「うわああああ

「アニキ」

着る前にこれかよ
つて俺も追いかけてつと
そして森の中

「僕のレアカードが

「奴はどこへ行つた?」

そして指でさした方に向かう

「そつちか」

「確かに向こうから殺氣が

翔たちも叫びながら追いかけてくる

「まてえええええ

S i d e + d e a u t o

見つけた

「お前が闇夜の巨人デュエリストだな！」

「確かにでかいな」

「うわあ、本当にでかい」

翔と隼人ビビッてるし

「やつと会えたな、俺とデュエルしようぜ
お前とやるにはアンティールールだつたな」

『クリクリー』

「おー、マジか」

「やつか俺を信じて一緒に戦ってくれるんだな

あ、遊輝にも通じた

「俺が負けたらこれをやる」

「アニキ…それは」

「デュエルキング武藤遊戯にもうつたレアカードだ

翔と隼人が心配してる

「いいだらう後悔するなよ」

「へへ、行くぞ」

「『デュエル』」

「俺のターン、ドロー

俺はジャイアント・オーラを攻撃表示で召喚

「こきなり攻撃力2200のモンスターを召喚するなんて…」

「さすがにオベリスク・ブルーを倒してきただけのことはあるなあ」

「だが、一度攻撃したら守備表示になっちゃうモンスターだ
そして守備力は0、そんなに怖い相手じゃないぜ」

「俺のターンは終った」

「結構普通だな、俺と十代だったら（ボソ）」

「遊輝君、何か言つたすか」

「なんでもない」

俺には聞こえてぞ、遊輝

「俺のターン、ドロー」

『クリクリー』

「お前を渡さないためにも頼むぜ！
俺はハネクリボーを守備表示で召喚
カードを3枚伏せターンエンドだ」

なんだ、この違和感

「ああ！」

「俺のターン、ドロー

ジャイアント・オーラでハネクリボーを攻撃」

「ありがとうハネクリボー

トラップカード発動ヒーロー・シグナル

このカードの効果によりデッキからE・HERO バーストレディ

を特殊召喚」

「よし、これでジャイアント・オーラを倒せる

「甘いな

「確かに」

「う？遊輝まで？」

「俺はそりゃセコンド・ゴブリンを攻撃表示で召喚

「ええ？モンスターカードなのに魔法スロットへ？」

「このカードは1（ワン）ターンに一度だけ装備カードとしてジャイアント・オーラに装備し

攻撃表示に戻すことができる」

「ええ、そんなあ」

「よく考えられたコンボだ」

「ターンHンドだ」

「俺のターン、ドロー

俺は手札からマジックカード融合を発動

フィールドのE・HERO バーストレディと手札のE・HERO

クレイマンを融合

H・メンタルヒーロー

来い E・HERO ランパートガンナー 守備表示

ランパートガンナーの効果発動

このカードは守備表示のまま相手プレイヤーに攻撃力の半分のダメ

ージを【える】

4000 - 1000 = 3000

「あ、青いの吹き飛んだ」

翔たちは驚いてるけど遊輝はやっぱり氣づいてたな

「び、びつじょう」

「いい加減出てきたらどうだ？ちゃんと向かい合ってデュエルしよ
うぜ」

「「え？」」

「その通りだ、出でこないなら」

「ちよつと待て遊輝、お前は何しようとしてるんだ」

「なにして、岩を斬る」

「無茶苦茶だぞ、それにその刀何処から」

「禁則事項だ」

「もうかよ」

また翔たちは驚いてる

「どうしてわかった」

「いや、大原から殺氣でないし、人形みたいだつたぞ」

「遊輝、そこは俺のセリフだろ」

「そうだ、こいつは俺の指示通りにデュエルをしていただけだ」

「耳聞のデュエルの時もお前殺氣出してたし」

「無視かよ、そしてまたかよ

まあいいや、お前本当はかなり強いんだ」

「だつたらなんだつてこんなことを?普通にデュエルすれば?」

「それができれば苦労しない!..

俺だつて好きで緊張してるわけじゃないんだ

デュエル場に立つて、相手にプレッシャーをかけられ、なにがなん

だかわからなくなつて負けてしまつ

大原だつてそуд

からだがおつきいてだけで怖がられたり、邪魔者扱いされたり
オベリスク・ブルーの奴ら、馬鹿にしやがつて！」

「そんなことして意味があるのか」

「なにい」

「デュエルで負けて悔しいなら正々堂々デュエルで勝てるようになればいい

その方がきっとデュエルも楽しいぜ」

デュエルは楽しむものだし

「うるさい、うるさい

どんなことしたって俺たちが勝つ！

行くぞ大原」

「うう

「俺のターン、ドロー

俺はキング・ゴブリンを攻撃表示で召喚

「攻撃力0？」

「更に手札に手札にある戦士族モンスターを墓地に捨てる」とことでゴブ・ゴブリンを特殊召喚する

守備表示だ！

キング・ゴブリンの特殊能力発動！

このカードの攻撃力・守備力は他のフィールド上にいる魔族の数
×1000ポイントとなる！』

小原と大原、動きがシンクロしてるな
じゃなくてやばい、ってことは

「攻撃力3000！」

「そんなん

「十代！つぐ引きがよくないのか」

「いけ、キング・ゴブリン、ランパートガンナー を攻撃
ジャイアント・オークでダイレクトアタック」

「うわあああ

4000 - 2200 = 1800

「ジャイアント・オーカはセコンド・ゴブリンの装備カード効果で
攻撃表示に戻る

俺のターンは終了だ、どうだ！俺はホントは強いんだ！」

「いいや、お前は他人の手を借りて強くなつた氣でいるだけだ
それじゃ、本当の『ヒューリスト』にはなれない」

「うわ

「俺のターン、ドロー

手札からマジックカード強欲な壺を発動
デッキからカードを2枚ドロー

俺は融合を発動

手札のE・HERO スパークマンとE・HERO エッジマンを
融合

来い E・HERO^{H・レメンタルビー・ロー} プラズマヴァイスマン

更にフィールドに伏せていた天よりの宝札「アーメ版」を使用
手札が6枚になるようにドロー

E・HERO^{エレメンタルビー・ロー} プラズマヴァイスマンの効果で手札を4枚捨て
お前のフィールドのモンスターをすべて破壊

「なに！」

「E・HERO^{エレメンタルビー・ロー} プラズマヴァイスマンでダイレクトアタック
ヴァイススパーク」

3000 - 2600 = 400

「う、く

だがまだライフポイントは残る

「いや、このターンで終わりだ
マジックカード融合解除
これで最後だE・HERO スパークマンとE・HERO エッジ
マンでダイレクトアタック

400 - 1600 - 2600 = -3800

「す、すごいよ、アーキ」

「怒涛の攻撃だつたな」

「少しヒヤッとしたぞ」

「俺たちの負けだ、好きにしろ」

「小原君、たの「分かつた」

Side auto

Side 遊輝

「分かつた」

「おい遊輝」

「じゃあちょっと手伝ってくれないか」

「え?」

翌日

「というわけで闇夜の巨人デュエリストには逃げられましたが
勇気ある小原君と大原君がデュエルで勝ったおかげでレアカードを
取り戻せました
奴も当分懲りて出てこれないでしょう
これが取り返したレアカードです」

「そうなのーね?」

分かったのーね（これで一つめんどうさいのが片付いたのーね）

「では約束通りレポ免で」

そういうて俺は消えた

「でも、よかつたのかなこんなだますよつな真似して」

「いいんだよ、これできっとお前らも見下されないよ」

「ありがとう遊輝君」

「ありがとう・・・」

そつこの一人がデュエルで勝つて闇夜の巨人デュエリストを倒したことにして

これでこの二人に、いやラー・イエローに対する対応も変わるだろう
レポ免だしハッピーエンドだ

こうして闇夜の巨人デュエリスト事件は幕を閉じた

あれ、俺は誰に説明してるんだ

第21話 閻夜の巨人 十代VS大原&小原（後書き）

おまけ

「そういえば十代

お前、ダイオラマ魔法球の中と外とでしゃべり方違くないか？」

「ああ、なんでか変わっちゃうんだよなあ

どうしてだろ？」

「世界の修正力ってやつとかだつたりして」

「もしかしたらやうかもな」

第3回主人公プロフィール（前書き）

主人公のプロフィールの更新がおかしいくらい早い気がする作者です
自分のせいなんんですけど
それと今回のプロフィールから系統を少し変えます
あと、ネタバレ注意

第3回主人公プロフィール

石崎遊輝

身長 十代と同じくらい

体重 50キロぐらい

顔 ふつう

好きな人 デッキ ドラゴンデッキ 速攻展開デッキ 強奪デッキ サイバーデッキ

好きな人 性格がいいやつ デッキの実験に手伝ってくれるやつ
十代 仲間

嫌いな人 めんどくさいやつ ナルシスト 馬鹿神 綾小路ミツル

特技 フラグメイク【無意識】 読書

プロファイール まず金の荒稼ぎのためにこの世界に
卒業したらどの世界に行くか検討中

性格はいいんだがたまに本音がただ漏れになる。

前世で死ぬ直前ダイエットをしていたので小食が癖

になっている。

最近十代との友情に芽生え前よりもデュエルが好き
になってきた

いつも面倒をかける馬鹿神が嫌い

だが、そのたびに天使とともに折檻して新しい能力

をもらつてゐる

拷問だが

冬休みの修行で能力がとんでもないことに

能力値（新規）

フラグメイカーレベル 4 32

チートドローレベル 25 96 ただしキレると測定不能に

デッキ構築レベル 20 132

マジドサイエンティストレベル 5 76

魔力 5 372 現在リミッターで50レベ位に

気 5 457 現在リミッターで50レベ位に

戦闘術 1 726 参考 ネギまのナギが400
くらいかな？

チャクラ 1 560

レベル1と未使用は非表示

能力（新規）

不老不死

第1話参照

特殊な不老不死で肉体年齢を任意で変化できる
神様曰くやりすぎると地獄に即刻落とされる

時空間移動能力

時間と空間を超える能力

時間を超える能力は過去・未来に行ける

空間を超える能力はドラえもんのどこでもドア強化版
一つを合わせることで異世界に行ける

4次元ポケット改

ドラえもんの4次元ポケットみたくなんでも出せるポケット
神様がいろいろ入れてる

ただしその世界にあつたものしか取り出せない

第10話参照

絶対記憶能力

転生前の記憶を含むあらゆる記憶を絶対に忘れなくなる能力
ただし覚えすぎるとオーバーヒートする

瞬間記憶能力

一瞬でも見たものを完全に覚える能力
光の速さでも見れば覚える

圧倒的な脳の容量

この世のすべてを覚えても潰えない脳の容量
これのおかげで絶対記憶能力のオーバーヒートが起こらない

地球の本棚(弱)

地球の本棚の縮小版

自分がおぼえているものの中から必要な知識を引き出す能力
地球の本棚と違い問題などの答えなどを問題を考えるだけで
知識を呼び出せる

描写をしないが第11話の件で神を天使とともに折檻して手に入れ
た能力

魂容量10倍

自分の本来の魂の容量を10倍ほどに増やす

これによりより強い力を入手可能に

限界点突破

鍛え続けることで限界なく際限なく強くなる能力

魔力 + 気

ネギまの一般魔法先生並みの魔力と気を使えるようになった
普通はあまり上がらないが限界点突破により魔力を使えば使うほど
気を使えば使うほど最大値が上がる

ダイオラマ魔法球生成

自分の望むダイオラマ魔法球を作る能力

例としては

中では年を取らない1時間が1日になる別荘
トリノの食材が出てくる別荘

いろいろな武道を手ほどきしてくれる口ボがいる別荘など

冬休みの修行（ただし未使用も大量にあるのでほんの一部）

神鳴流

ネギま世界の剣術

式の太刀ももちろん打てる

ネギま魔法

かなりの魔法が使える

基本的に既存の魔法を自分が改造した日本語バージョンを使うが
ラテン語のものも使える

適正は光・闇・影

始動キーはデス・デストロイ・デス・クライシス

秘剣ツバメ返し

Fate世界のとある英靈を消滅寸前まで追い込み無理やり教えて
もらつた

ナルト忍術

その辺の忍者は軽く倒せる程度の腕

ただ今影分身修行中

縁勇流

ゼルダの伝説のリンクのあらゆる戦闘術

パチンコから弓矢、爆弾にトワイライトの主人公が金狼に教わった
剣技も教わつた

道具（新規） アイテム

黒刀・黒曜舞
こくとうのまい

黒曜石を中心に玉鋼^{たまはがね}やアダマンタイトを使って作られた

ネギま世界で神鳴流免許皆伝の時に作つてい

ただいた

魔力を込めて作つたので妖刀になつている

白刀・破邪銀龍

はじやのぎんりゆう

白刀・破邪銀龍

プラチナ

破邪の銀を中心^(ミスリル)に白銀などを使って作られた
ネギま世界で神鳴流免許皆伝の時に作つていただいた
破邪の銀を使つたせいが聖剣になつてゐる

金剛の剣

リンクの修行免許皆伝時にもらつた剣

刃こぼれせず高い攻撃力と長いリー^チを持つ

デクナツツの仮面

リンクの修行免許皆伝時にもらつた仮面

装備するとデクナツツの姿になる

デクナツツとしての力として魔力を消費してシャボン玉を発射する

ことができる

更にネギま魔法の適性が

水・風・闇・影に変化する

闇があるのは呪いの力を封じ始めた仮面だから

ゴロンの仮面

リンクの修行免許皆伝時にもらつた仮面

装備するとゴロンの姿になる

ゴロンの力により、ゴロンの巨体を生かしたパンチやプレスは強力

炎に強く、溶岩の上を歩いてもダメージを受けない

転がりダッシュはある程度のスピードがつくと、爆発的なスピードを出す

この際、魔力を消費して全身からトゲが生え攻撃力が発生する

更にネギま魔法の適性が

火・光・影になる

光がある理由はゴロン族の英雄、ダルマーニ3世の魂を「やす」と
で手に入れた仮面だから

ゾーラの仮面

リンクの修行免許皆伝時にもらつた仮面
装備するとゾーラの姿になる

ゾーラの力により水中を自在に泳いだり、水底を歩くことができる
水中、地上を問わず魔力を消費して電流のバリアを張れる
歩行時は両腕のヒレを飛ばすブームラン攻撃も可能

更にネギま魔法の適性が

水・風・氷・雷になる

雷がある理由はゾーラ族の人気バンド「ダル・ブルー」のギタリスト、ミカウの魂をいやすことで手に入れた仮面だから

鬼神の仮面

リンクの修行免許皆伝時にもらつた仮面

装備すると白い服を着たような姿で、「8」の字を描いたような奇妙な刀身の両手剣を常に構える姿になる

更に鬼神としての力として剣を振ると魔力を消費して光線を撃てる
そして強大な魔力と氣、魔の力を得る

魔力と魔の力は違うもので魔の力は魔物などという意味の魔である
更にネギまの魔法適性が

光・闇・影・雷そして特殊属性の重力に変化する

ムジユラの仮面

リンクとの修行中にれた悪い転生者を倒し神様のところに連れて行つたら

お礼として神様に（無理やり）もらつた

本来のムジユラの仮面は長い間呪いの儀式に使われてきたせいで邪気がたまり

意思を持つた魔物となつて月を落すことによつて

タルミナを滅ぼそうとしたところをリンクに倒され邪氣と意思

そしてかなりの魔力を失った

しかしこの仮面は月をも動かすだけの魔力をそのまま持つており
強力な魔の力が込められている

それによつてリンクが言うにはリンクの修行免許皆伝時では40%
くらいしか使いこなせていないらしい
これを装備するとネギま魔法の適性が
氷・闇・影そして特殊属性の重力に変化する

収納ブレスレット

ISの世界の量子変換をもとに作った収納器
形は腕輪

仮契約者 ライネス・サイコ

なぜか主人にしか慣れない

第22話 究極のドロー対決 十代VS大山

Side遊輝

「待つてよアーチキ」

「十代、落ち着けよ」

「今日じゃは、今日じゃは」

なんで十代がこんなにあせつていいかといつと
ドローパンのせいだ

翔の説明によると

ドローパン

コロッケ、焼きそば、ピザなどのパンが
外からは見えない袋に隠されている購買部の名物パン
何が出るかわからぬパンに我々がこれほど口マンを掻き立てられ
るのにはわけがある

デュエルアカデミアで飼われている黄金の鶏

こいつが1日に一度しか生まれない黄金の卵を具に使った卵パン
このレアなパンをゲットするためには

我々は日々このパンをドローするのだ

そして連続20回卵パンゲットの記録を持つアーチキじゃ
キング・オブ・卵パンの称号に相応しい
でも

9回連続はずれているらしい

ちなみに俺は30回連續で確かカードパンだけ
あれを当ててる

しかも中に入つてるのが

F・G・Dとか

真紅眼の黒竜とか

レッドアイズ・ブラックドラゴン

E・HERO プラズマヴァイスマンとかのレアカードだから

オークションで売つてもうけてます

ドローパン、ほんとにおいしいです

まあ、それはともかく

今から、十代がドローし始めたとしている

「ドローー。」

十代がドローパンを取つた
でも十代が外れるイベントってあれしかないから
いくらドローしても無駄なんだよな

「あん
ええ、甘栗パンだ」

「これで十回連續で外れちゃいましたね
どうしたんです? アニキ」

言わないが俺は理由を知つてゐ

まあ確かにカードパン? で儲けてる俺には関係ないが

「十代まではすこしづつやつとわね」

「明日香さん」「痴女」

「明日香、お前も卵パン好きだったのか?」

「ば、馬鹿言わないでよ

私はドローの練習を、それに私は痴女じゃない

「ふーん、どうだか」

「ほ、ほんとよ」

赤くなつて言つても信憑性に欠けるぞ痴女

「『めんなさいねえみんな
じつはね、卵パン』の中にはないのよ」

「「ええ!?」」

知つてたけど十代たちに話す言つてません
何か?

今更だけど

「1週間前から、どうも卵パンだけが盗まれているのよ

「盗まれた」

「とんだ、隠れチートがいたもんだ（棒読み）」

「すい

卵パンだけを盗んでいくなんて、なんといつ引きの強さ

十代、翔をそんなに睨んでやるな
怯えてるし、それは八つ当たりだ

「みんな楽しみにしてくれてるのにねえ、本当に申し訳ない」

「トメさんが誤ることないぜ、悪いのはその泥棒野郎だ」

それはそうだな

「じゃあ、俺らが張り込むつてこいつのはどうだ」「

「いいな、遊輝それでこいつ

翔！今日から張り込みだ」

「うん！って、え

そして夜

張り込みのメンバーは

十代・隼人・翔・明日香・トメさん・俺だ
で、今十代と翔がばば抜きをしている

「それ、やつたあ

お、十代が勝った
ま、そりや公式チートドローだしな

「やっぱアーニキの引きはすげえや

「あつたつまえよ

調子乗りすぎだ

で、いろいろしゃべつてると

「みんな」苦労様、夜食だよ

「つまやつ」

「中の具はなんのかなあ」

「梅、おかか、鮭の3種類だよ
性をつけて頑張って、今夜は私も泊まるから」

「ありがとうトメやん」

「鮭はどれかなあ」

おい隼人

顔が大変なことになつてるぞ

「そこ」の「待つた、引きおにぎりだ
俺も鮭が好きだぜ、順番で引ひつ」

「乗つた、俺も鮭が好きだしな」

「ええ、みんなえ分ければいいんだな」

正論ですね

でも、面白くないじやないか

「でも、面白そつ」

「ぐだらなそつ」

「俺のターン、ドローー」

おいしく食べる十代
はたして、中身は

「鮭召喚！」

なんと好物の鮭だ

「じゃ、俺もドローー。」

俺の中身は

「同じく鮭召喚」

「ほんと兄貴たちのドローはす”いな

「当然、俺の目的は卵パンじゃなくてカードパンだから外れてない
し」

「俺も腕は鈍つちゃいないぜ

卵パンが盗まれていなけりや記録更新だつたのによ」

しばらくして

それぞれいろんな場所に隠れる俺たち

十代・翔・隼人は机の下

明日香はロッカーの中

トメさんはカウンターの下

俺はみんなにも内緒ですが実はそのまま真ん中です
認識阻害です

突然ガチャガチャという音はなり始め
みんな揃つてカウンターの後ろの窓ガラスに顔をつけて外を見た

「何しようつてんだ」

十代が不思議がつてゐる
と思つたらシャッターが上がつた

「なんて怪力」

翔の言うとおりだ
なんちゅう怪力だよ
謎の男がドローパンをとる

「今だ」

十代の言葉で中に入る俺たち
トメさんが電気をつけた

「ああ、あ、あ」

なんか戸惑つてるし
といふかリアルみるとすげえ体だな
まさしくターザン？

「いひあ、泥棒！」

「もう逃げられないぞー！」

トメさんがなんか驚いてるな
あ、そうか知り合いか

「ア、アアアアアアアアアアアア」

ほんとにターザンかよ

そう思つてドローパンの代車をもつてシャッターに突っ込んだ

「逃げやがつて、追うぞー！」

「うん」「ああ」

「「「待てええええ」」

つて思つとジャングつて

おいおい、あいつ一般人だよな一応

なんでこんな高いところから飛び降りてターザンの真似事ができんだよ

「あ、ああああああああああ

「なんだあいつ、ターザンか？」

ほんとだよ

リアルターザンかよ

なんかいろいろ超越してるし

「先回りするぞ」

「うんー！」

「俺はこいつの方が速い」

「つてお前は忍者か?」

「木の葉の里で習つたのさあ」

俺はその高台からよく木の葉の忍びがやつてるよう枝に飛び移つて追つていく

「木の葉つてナルトかよ
まあいい、行くぞみんな」

俺は追いかける

「あ、ああああああああああああ」

あと少し

「あ、ああああああああああああああ」

「ヤ」だ、じんまつじゅうめい神鳴流奥義めいりゆうおくぎ斬空閃せんくうへん

俺はとつてに白刀・破邪銀龍はじやぎんりゆうを収納しゆのうブレスレットから取出しリアルターzanがつかんだツタの上の部分に向けて斬空閃せんくうへんを放つ

「ああああああああああああああああああ」

なんか悲鳴を上げながら落ちていくリアルターzan

その先に十代たちつて

早

「ハハ

しかも着地したが

「わうはいくか、バインド」

俺はリリカルなのは世界で覚えた魔法バインドを一瞬だけ放つ
するとターザンの一瞬だけ白い光が包み

ターザンがこけた

その隙に俺はターザンの後ろに回り

ターザンの両手の親指をつかみ頭の上に持っていく
昔、こうすると腕が動かなくなるって聞いたからやってみた
結果はホントに動かなかつたよ
す

「つぐ

「大山くぅん

「トメさん」「トメさん、足はやい」

「いや、あれに追いつくお前の方方が速い
なんだ、ギャグ補正か、ギャグ補正なのか?」

「いや、忍者のお前の方がすごいから
どうして、漫画の技が平氣で使えるんだ」

「頑張ったから」

「もういいよ」

「放してあげて、大山君なんでしょ」

「わかつたトメさん」

そういうって俺は放す

「やつぱり大山君」

「やつぱりターザン？」

「隼人、ターザンじゃなくて大山だ」

俺はすかさず突っ込みを入れる

「トメさん、お久しぶりです」

「ちゃんと喋ってる」

「大山で思い出した

トメさん、確かオベリスク・ブルーのおかっぱにそんな名前の先輩
がいた気が

俺はわざとらしく言ってみる

「よく知ってるね、その通りだよ

大山平君、オベリスク・ブルーの生徒だった子よ」

「「ええ」」

まあ、そりや驚くわな

あのターザンが生徒だつたて言われれば

「とつても優秀な子だつたんだけど一年前に突然行方不明になつてまさかこんなとこいたなんて」

「痴女、お前の兄とは関係ないぞ

俺が調べた結果、いやタイタンからの報告によるとお前の兄たちは例の現在廃寮の特待生の寮にいたとされていて同時期にその寮の人間と姿を消したらしくこれはタイタンからの謝罪だつてや」

俺は痴女に近寄り痴女にしか聞こえないよう言つ

「それ本当？明日にも詳しく教えてあと痴女じゃない」

「分かつた、明日の放課後、レッド寮の近くにあるぼつたて小屋に来てくれ」

「分かつた」

そんな話をしているうちに話が進んでたなんでも、昔はすげえここの引き運が悪かったそうだ山にこもつて引きの修行をして生まれ変わったとかアニメ通りだな

「そして修行の完成を確かめるため

俺は試した因縁の卵パン

因縁つて、あのさあ

「そして一週間連続的中
うひうひ、頑張ったな俺」

さこですか

「やうだつたの」

トメさんもあるのなあ

「待てよ、俺もお前が盗んでいくまではずした」となかつたぜ

「それはお前がチートドローだからだろ」

「遊輝が言つか

「何?」

「どうだい?俺にも引きこはちょっとばかし自身があるんだ
このおれと戦つことで卒業試験としたらどうだい?」

「ふつ、おもしろこな

この弓きの強ヤトコエルで試してみたかった

「ね、やうひむ

翔と隼人は悩んで

明日香なんかは頭を抱えてるよ

「だつたら十代

「」こいつらを貸すからお前のウルトラチートドローを見せてくれ

そうじつて渡す2枚のカード

「」こいつらは

「（マスター？）」

「いいのいいの（ライネス、お前の真理の力みてみたいんだよ）」

「（そういうことですか
確かにあれは普通のハネクリボーとでは召喚できない）」

「分かつたぜ」

「話は終わつたか

「ああ」

「行くぞ」

「「デュエル」」

S i d e a u t o

S i d e +代

「俺の先行で行くぜ、ドロー！」

俺はE・HEROエレメンタルヒーロー

カードを2枚伏せターンを終了するぜ、粋のいい引きを見せてくれよ」

「1年間の修行の成果を見せてやるぜ

俺のターン！ドロー！（ふつ、修行の成果があつたぜ）

まずは俺はカードを1枚伏せる

そして俺はこのドローカード、ドローラーを召喚

ア、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

でつかい石みたいなモンスターだな

ドローリーについてるしなんかドローに関係あんのか？

「ドローラー？」

「ドロー？」

「ドローラーねえ」

遊輝は知ってるみたいだな

「ドローラーの攻撃力と守備力は手札からデッキに戻したカードの枚数×500の数値になる

俺は手札を4枚デッキに戻す」

「カードを全部う？」

「ええ、手札なくなっちゃうよ」

「攻撃力2000

すげえな、こいつの覚悟

「ドローラーでフュザーマンを攻撃 ローラープレス！」

フュザーマンがってなんでテッキの下にいったんだ

$$4000 \cdot (2000 \cdot 1000) = 3000$$

「何！？」

「ドローラーに破壊された攻撃表示モンスターは
墓地へは行かずテッキの一番下へ行く、墓地から引き上げる」とは
できないぞ
これでターンエンド」

なんてめんどくさい効果なんだ

「やるな

俺のターン、ドロー！

（俺も引いたぜ）手札から融合を発動
手札のE・HERO クレイマンとE・HERO バーストレディ
を融合
来い E・HERO ランパートガンナー
守備表示で召喚

「守備表示か

「いや、E・HERO ランパートガンナーは

エルメンタルヒーロー

守備表示のまま攻撃力を半分にして直接攻撃ができる

「なー」

「ハンドペーパードシートおー..」

「おわああああああ

4000 - 1000 = 3000

「ターンを終了するぜ」

「すいにわねえ十代ひやん、で、ビッちが勝つてゐるの?..」

「「「「え?」「」」

「同点」

「いや、手札がある分十代だろ」

「せうつすかね

いや、翔たちの言つとおりかっこいいと俺は思つぜ
デコエルは最後までわからないもんだしな

「(わざと引かの強さを豪語するだけのことはある
だが、俺の引きの上を行く) 「

何を引く?

「（まだひがな）」

場から永続トラップ

奇跡（きせき）のドローーを発動

ドローフェイズの前にドローカードを宣言する
当たった場合、相手プレイヤーに1000ポイントのダメージを
間違つた場合は俺が1000ポイントのダメージを受ける

「ドローカードを引く~」

「かなり無茶苦茶だな」

「面白こじやねえか」

「当たらないと思つてこらだらつ」

「わからねえ？」

遊輝なら並んでしつだけど

「俺でもわすがにそれは無理だ、読心術なめんじゃねえぞー。」

すげえな

「分かるんだよ

引きの真髄を解得したこのおれには

なんか急に黙り込んだ

まさか、本当にあてるのか？

「ドローカードはカードローンー、ドローー」

「当たった」

「そんな」

「またドローのつべカード」

「マジか

まさに真髓つて感じだな」

すげえ、マジかよ

「1000ポイントのダメージを受けてもいいぜ」

「ハハハハ」

3000 - 1000 = 2000

「そして、このカードローンを発動する
相手は1000ポイントライフが回復
俺は1000ポイントのダメージを受ける
そしてデッキから一枚カードを引く
引いたカードはこのターンのハンドフェイズにデッキに戻す」

2000 + 1000 = 3000 十代

3000 - 1000 = 2000 大山

「そこまでして弓巻にこだわる」

「きたあー。」の引きを見よ

手札からマジックカード、ドロー・ボウを発動
カードを一枚引け

そのカードを俺がある
もし当たった場合

お前の手札とフィールド上すべてのカードを「トッキ」に戻してシャッフルする

「当たつたら十代の場合はがら空き」

「あいつは超能力者か」

遊輝の「いつとおつまつたくだぜ
多分当てるんだわ」

「ズバリ、融合解除！」

「あいつはつまつま、すげえな」

「ドローとかの問題じゃないだろ」

マジすげえ

「ドローラーでプレイヤーへダイレクトアタック ローラープレス」

ソリッドビジョンだけど怖ええ

「ターンarendだ」

「俺のターン、ドロー！」

俺はフレンドドッグを守備表示で叫喚

「ターンを終了するぜ」

「十代ちょっとマズいんだな
次の大山のターンにあの奇跡（きせき）のドローでカードを当
てられたら」

「どっちが勝ったの？」

「まだ」

「（こよこよだ
次のドローカードを当てることができれば俺は勝てる
勝てるんだ、フレンドドッグは守備表示
そうだ！ シールド・クラッシュユを引き当てる」とができれば
あの魔法効果は守備モンスターを破壊する
そうすればダイレクトアタックで十代を倒せる
シールド・クラッシュユ、シールド・クラッシュユ
ドローカードはシールド・クラッシュユだ！」

「名前じドローがついたカードじゃない」

「早まつたな、大山」

「あ

「外した？？」

「当り前だ、あんな邪念でデッキが答えるか」

「ぐわああああ」

2000 - 1000 = 1000

「ドローンを攻撃表示で召喚
俺の方が圧倒的に有利なんだ、どんなことがあっても俺が勝つ
ドローンでフレンドシグを攻撃 ローラープレス」

「十代の勝ちだな」

「え、明らかに相手の方が有利ですよ」

「見てれば分かる」

確かに俺もそう思はず

「フレンドシグの効果発動

フレンドシグが墓地に送られたことにより
墓地から融合とE・HERO バーストレーディを手札に加える

「まだ攻撃は続いている!!

ドローンでプレイヤーにダイレクトアタック オドローン

「うわ、っく、うわ、っく」

1000 - 900 = 100

「アニキ」

「で、どっちが勝ったの」

「まだですよトメさん

次の十代次第だが」

「ターンヒンド

お前のライフもあと100、勝負あつたな
これでおれの修行も完成する」

「分かってねえな、お前の修行はとっくに完成してたんだよ」

「何?...?」

「お前引きの」とを
自然の力がどうだの言つてゐるけど
それよりなにより、お前わしきまでわくわくしてたろ
カードを引く」と「

「あ、ああ」

「ドローすることが楽しいから
そのためのテックを作ったんだろ
だつたら最後までわくわくしなきゃ
価値なんて意識するなよ、だからお前は外したんだ」

「ふざけるな!」

引きの極意がそんな下らん」とあるはずがない」

「それがそなんだよ

卵パンを思い出せ、わくわくする」と引きの神様は答えてくれる

んだ

このドローをくわくわくするぜ

「あ

「俺のターン、ドロー

強欲な壺を発動

2枚ドローするぜ

デッキが答えてくれて俺の相棒と遊輝の相棒が来てくれたぜ」

「そんなモンスターたち引いたといひでいつたいなんになる

「面白いことになるんだよ

俺は手札から融合を発動

手札の俺の相棒ハネクリボーと遊輝の相棒光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）を融合

「光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）とハネクリボーを融合？」

「マート召喚」

そこに現れたのは神々しいモンスターだった

Sire auto

Side 遊輝

「マート召喚」

ついに真理を見れた

輝く千年アイテムが神々しいね
こいつを見たかったんだが

微弱だがマアトのカードから精靈の気配が
もしかして今回の召喚で覚醒しかけたか？

「マアトの効果発動

カード名を宣言しドローする！

正解したとき、そのカードを使用し再び効果を発動できる！」

「十代までそんなカードを」

「で、どっちが勝ったんだい」

「まだです」

「宣言するカードは？」

一瞬止まつた

あ、あれか

「ライトニング・ボルテックス

ライトニング・ボルテックスを発動し手札のE・H E R O バース
トレディを墓地に送り

ドローラーとドローンを破壊

宣言したカードを引いたことで再びマアトの効果を発動

俺はマアトの効果でドロー

マアトの攻撃力と守備力はマアトの効果でドロー数×1000ポイ
ントになる

マアトの効果で2度ドローした

これによりマートの攻撃力は2000
マートでダイレクトアタック 真理の天罰バイシティーション・オブ・マート

「うわあ ああ」

1000 - 2000 = - 1000

「お前にはもうわかつてたんだよ
明日一緒にドローパン引こうぜ」

「う、うう」

そのあと、大山とのちょっとしたイベントがあり
泣き出した

どんなイベントだったて
ほんとはドローパン一引きたくて山を下りたんだってさ

その翌日の朝

「痴女、これが調査結果だ」

「娘よお

あの時はすまなかつたなあ
これは謝罪だと思つてくれえ」

「いいわよ、もう、それに私は痴女じゃない
それよりこれ本当?」

こんなに行方不明者がいたなんて

「ああ、間違いない」

「ほんとだ
この学園には裏があるところ」とだあ

「分かつたわ、ありがとう」

そのあと聞いた話だが
痴女が卵パンを引いて子供のようにほしゃいでいたそりだ
また更にそのあと

「魔力と氣を込めて」

俺はマートのカードに魔力と氣を送っていた
十代は気が付いていなかつたが少しだけ精霊の氣配がする
そして送り始めて数分後

「マスター？」

「やつと田覚めたか」

「私を呼び覚ましてくれてありがとう」

えつと、なんで嵩月 奏

どう見てもアスラクラインの嵩月 奏なんだけど

黒髪、容姿端麗・スタイル抜群しかも片目が緑色

「えつヒマート?」

「そうですが、なんでしょう

言つておきますがこの姿はマスターの記憶の中から私が気にいった

姿ですのであしかりゅ

そういうことか

「じゃあこれからよろしくなマアト
いや、その姿だし奏かなでつてこれから呼ぶよ」

「はい、ありがとうございますマスター」

「マスターじゃなくて遊輝でいい

あと、明日からマアトも修行な

その後、仮契約したんだが

接吻で、契約陣書じゆこうとしたら勝手にキスの方の契約陣引いてキス
してきやがった

なんで、俺、フラグ立てたか

それともめんどくさかつただけか？

いや、予想外のあのマアトの性格からそれはないと思う
ちなみに人間体の姿はあの姿が気に入つたらしい
まあ、俺的に嵩月たかつき 奏かなでは好きなキャラだから嬉しいけど

いやな予感が

ついでに言うと

マアトの仮契約カード
チートだった

第22話 究極のドロー対決 十代VS大山（後書き）

《ドローラー》効果

効果モンスター

レベル3／地属性／機械族／攻撃力？／守備力？
このカードの攻撃力・守備力は召喚時に手札からデッキの一一番下に戻したカードの枚数×500ポイントの数値になる。
このカードが戦闘で攻撃表示モンスターを破壊した場合、そのモンスターは墓地には行かずデッキの一一番下に戻る。

《奇跡（きせき）のドロー》効果

永続罠

自分のターンのドローフェイズ時にカード名を一つ宣言する。
ドローしたカードが宣言したカード名と一致した場合、相手に1000ポイントのダメージを与える。

違った場合は自分は1000ポイントのダメージを受ける。

《カードローン》効果

通常魔法

自分のデッキからカードを一枚ドローする。

相手は1000ポイントのライフを回復し、自分は1000ポイントのダメージを受ける。

この効果でドローしたカードはエンドフェイズにデッキに戻しシャツフルする。

《ドローボウ》効果

通常魔法

カード名を一つ宣言して発動する。

相手はデッキからカードを一枚ドローする。

宣言したカード名と同じカードをドローした場合、相手は手札と自分フィールド上のカードを全てデッキに戻しシャツフルする。

ドローン

攻撃力900

マート効果

融合モンスター【ハネクリボ+光と闇の竜（ライト&ダ

ークネスドラゴン）】

レベル10／光属性／天使族／攻撃力？／守備力？

召喚時、カード名を宣言しドローする

正解した時そのカードを使用でき再び効果を発動することができる
攻撃力・守備力はこの効果でドローした枚数×1000ポイントに
なる

マートの仮契約カードは

次のパートナー紹介の時紹介します

第23話 盗まれた決闘王のトッキ VS 神楽坂（前書き）

『』は精霊

()は念話です

今日は贊否両論別れるかもしれません

第23話 盗まれた決闘王のトッキ VS 神楽坂

Side遊輝

大山の事件から数日後
大山はトメさんの頼みもあつて校長がオベリスク・ブルーに復学した
といつても条件が2年生からが条件だったが
そもそもつて

武藤遊戯のデッキが展示されるらしい
俺は学校が始まる前に入手したぜ
そんで今日もドローパンを買おうとむりで十代といっしょに購買部
に来たんだが

「お、何の騒ぎだ、喧嘩か？」

「十代、それはないだろ」

『そりですよ、マスターの^{かねで}いつとおりですよ』

つてなぜ秦がいる

『えつとマスターと一緒にいたかつたから
気合で影分身覚えました』

さいですか

「誰だあれ？」

「神楽坂、ラー・イエローの生徒だよ」

「確かに記憶力がよすぎてほかの人の『デッキに似たりまつてやつだろ』

「詳しいな、そのじょうほ「禁則事項だ」最後まで言わせろ」「

「そういうじゃなくて、だから何をやつてんだよ、翔?」「

「アニキ!」

「どうしたんだ、翔?」「

「どうせいつもないつす、あれあれ」

そういうつて王様のポスターを指さす翔

「デュエルアカデミアにて

初代デュエルキング

武藤遊戯の『テッキ

特別展示

つてことは遊戸さんの使つてた『テッキが』の学園に来るのか?」

「つておいおい

俺が朝話しただろ」

「そうだっけ

「これはもう見るしかないでしょ
アニキ? アニキイイイイイ?」

「十代、こつたいどうした

『放心してるんですよ、マスター』

さいですか

最近これ多い気がする

「遊戯さんのデッキがこの学園に！」

「武藤遊戯といえば

デュエルリストキングダムではデュエルモンスターズの生みの親

ペガサスを倒し

バトルシティーでは

海馬瀬戸やマリクを倒し

神のカードを駆使して

デュエルリストとの頂点に君臨した伝説のデュエルリストです

「それに幾多の闇のデュエルも経験しているデュエルリストだ

俺が補足

「神のカードは入ってないだしいけど

ブラック・マジシャンやブラック・マジシャン・ガール

他にもお宝カード満載の激レアデッキ
絶対見なきゃ損ですよ」

「それはわかつたけど

この事態と何の関係があるんだ？

「購買部で朝一番にみられる整理券を配つてたんだけど

最後の一枚になつてデュエルで決着つけようつてことになつたんだ

「よ

「無茶すんなつて翔」

「何言つてるんすか
あの整理券は兄貴の分つすよ
僕の分は、ほら」

「俺も持つてるぞ」

「頑張れよ翔」

「分かつてるつす」

（現金な奴だな）

『そうですね、マスター』

（この前も言つたけど遊輝でいいから）

『遊輝、わかりました』

『デュエル再開』

翔が宣言した

現在、翔の場はジェットロイド
神楽坂の場は伏せカード2枚

「俺のターン」

ドローって言わないんだ
珍しいな

「マジックカード大嵐
場のすべてのマジック・トラップカードを破壊するのーね」

「つげ、なんかデシャブーが

「確かに白面を思い出す」
クロノス

「神楽坂はクロノス先生の「コピー・デッキだ」

「三沢、いつの間に前へ」

三沢の空氣化エアライズはこの時始まったのか

「なんか嫌なことを考えられた気がする」

鋭いな

そんなこと言つてるうちにあれば邪神トークンか？

「2体のトークンを生贊に古代の機械巨人アンティーカ・ギアゴーレムを召喚する」

「おお」

「だめだ
神楽坂が白面クロノスに見えてきた

「いけ、古代の機械巨人アンティーカ・ギアゴーレム！」

「ジヒットロイドの特殊効果発動

このカードが攻撃対象になつたとき手札からトライップを発動できる
魔法の筒

うまいな

「僕が受けたダメージはそのままお返しだ

「なに?」

「うわああああ

1000 - 3000 = - 2000

「やつた、僕の勝ち

「すじいぜ、翔

俺が苦労したコンボをあつさり破りやがつて

「確かに今のは参考になつた

今後のデッキづくりに生かさせてもらいつ

「いやあ、アーチとクロノス先生のデュエルを覚えていて
カウンターをデッキに入れといたら
ばっかり決まっちゃつた、はつはつはつはつは

おつとここれは僕がもうつよ、悪く思わないでね

ほかのみんなは帰つて行つたが

あんな陰口は酷いだろ

だれだつて負けるとわざ負けるのにな

『あれはひじこと思こます、遊輝もそつ思こませよな』

(ああ)

「三沢もあんなの一へんきに
あ、神楽坂おこひに行つちやたよ

「三沢、お前は少しは空氣読め」

「せ、何のこどだ?..」

黙田だ!」つや

その日の夜

「遊輝、一緒にデッキ見に行かないか?..」

あのイベントか

「行くぜ」

その後アカデミア廊下にて

「あ、十代に遊輝

「三沢じゃないか、びついたんだ?..」

「まつまつまつま

「ちよつとフライングしてキングのデッキを押みにね」

「なんだ、みんな考へること同じか」

「マンマリー ヤア」

はあこここの警備はいつたい何をしてるんだ
精靈たちも全員呆れてるよ

「なんだ、今の」

「あの、声は

「盗まれたのか?」

中に向かう俺

「ニヤ、ギャビーン

「クロノス教諭?」

「展示ケースが」

「遊戯のデッキがないんだな

「まさか、クロノス先生が?」

「それはない

もしそうだつたらケースを割る必要がない
クロノス教諭

俺たちが犯人を見つけるので
そうですねレポ免1ヶ月でどうですか

「分かったのーね
他の人に言わないでほしいの一ね
だから、お願ひしますの一ね」

「探すぞ」

その後

「確か、海岸の近くだつたはず」

「うわあああああああ

「あつちか

俺は体を氣で強化して走る

「見つけたぞ、泥棒」

「お前は石崎遊輝」

「俺と『テュエルして勝つたら』チキを返してもりあつ

「いいだろう」

「遊輝、勝てるわ」「問題ない、あの雑魚は俺が潰す」雑魚つて

「雑魚はお前だ」

「やるや」

『あんな輩に負けるんじゃないぞ』

『確かに彼は氣に入らないな』

『私も氣に入りません
人のデッキを使っておいて強くなつた氣でいるなんて
叩き潰してやつてください』

(もぢろん)

「行くぞ、貴様の魂狩くまついたいさんじゆさせてもらおうか」

「「デュエル！」」

「翔一、どうしたんだ？」

「僕がデュエルして負けて
そのあと遊輝君が来て、勝つたらデッキを返すってデュエルを始め
たんだ」

「遊輝、相手はむ「だからなんだ
戦っているのは武藤遊戯じゃない
だつたらそれは見た目だけの強さだ
本物の強さじゃない」だけど「黙つてみてろ」分かった

「おしゃべりは終わつたか」

「ああ、俺のターンから行くぞ、ドロー！」

俺は融合発動

手札のブラック・マジシャンとバスター・ブレイダーを融合
来い 超魔導剣士・ブラック・パラディン」

「「ブラック・パラディン！」

十代と翔は驚いていないようだが

三沢と神楽坂が驚いてる

「俺が持つてたらおかしいか？」

融合解除

來い ブラック・マジシャン バスター・ブレイダー
さらに師弟（してい）の 絆（きずな）を発動
デッキからブラック・マジシャン・ガールを表側守備表示で特殊召
喚する

「な、ブラック・マジシャン・ガールだと

このデッキにしか「前に十代たちに言つたが存在してるのがその1枚だけだと？」

馬鹿か！それじゃ神とrea度が一緒だぞ

使われてないだけで持つてるのは武藤遊戯だけじゃない」だからなんだ

このデッキは最強だ

「やつぱりブラックマジガール可愛いいいいいいい
僕に1枚ちょうどいい、遊輝いいでしょ」

「一枚、1000万なり」

「諦める

でもやつぱりほしいなあ

「命削りの宝札を発動

手札が5枚になるようにドロー
リバースカード5枚セット

ターンエンド

こいつは消す

その根性叩き直させてもう一
ひつ

「俺のターン

幻獣王ガゼルとバフォメットを手札融合

出でよ、有翼幻獣キマ「消え失せろ

奈落の落とし穴発動

有翼幻獣キマイラを除外

除外なので有翼幻獣キマイラの効果は発動しない」「

なんだと

カードを2枚伏せ

速攻魔法サイクロン トランプカード 砂塵の大巻を発動

2枚とも消える」

な、そんな馬鹿な

俺は最強のデッキを手に「黙れ

さつさとすすめろ」「つく光の護封剣を発動

ターンエンド」

「なんか遊輝怖くないか

「ありやキしてるな」

「そうなのか」「

「あの状態になつた遊輝は止まらねえ

翔も一度見ただろ」

「そりそり、あの時の遊輝は怖かつたつす」

「俺のターンドロー」

大嵐發動

ノイー川の魔湯、日本を治し云々

ブラック・マジシャン 黒・魔・

バスター・ブレイダー

黒・魔・導
はく・マ・ドウ
かいけんいつせん

フレッケ・マシッケ

ブラック・マジシャン・ガール 黒・魔・導・爆・裂・破

「このおれが負けた

俺はこんな強いデッキを使ってもかてな「あたりまえだろ
それは武藤遊戯が使うから強いんだ

お前が使つてなんになる

お前自身の手、土を作れ

だつたら、多重laplaceでもこめこめやつかたがあるだね

それと隠れている奴らでこい

盗み見とは行儀がよくないんじやないか

そこにいるカイザーと痴女

他にもそこらにいる生徒たち

それと神楽坂は責められるべきではない

神楽坂に陰口履いてたやつら

お前らのぐずのような行動のせいで神楽坂はこんなことしたんだ

俺が言いたいのはそれだけだ

帰らせてもらひ

俺はそれだけ言つて帰つて行つた

俺の言動は何か考えさせるものがあつたようだ

神楽坂はどうやらアニメとは違い考え方直し多重コピペーデッキを使う
ようになつたらしい

罰は制裁デュエルだつたが戦つたのは俺らと違つてモブで勝つていた
他の生徒たちも負けたからつてすぐ文句は言わないようになった
今回はマジでむかついた

前世で小学・中学といじめられてきた俺だが
あれはいくらなんでもひどすぎる

俺と神楽坂はその後親交を深めたんだけどな

第23話 盗まれた決闘王のトッキ VS 神楽坂（後書き）

主人公がマジ切れしました

最初は神楽坂に切れましたが

その原因の生徒たちにも切れました

作者が思うにいくら負けたからってあんな陰口を言われてなかつたら
神楽坂、デッキを盗まなかつたと思う

それに三沢のあの態度も作者はどうかと思つていました
なので、こんな結末にしました

第24話 失恋する乙女

S·i·d·e 遊輝

ただ今夕方の食事中

「眞さんに紹介したい人がいますのニヤ
にやあ 編入テストを受けてこのたびオシリス・レッドに入つてき
た早乙女レイ君だニヤ」

つてなんだと

早乙女レイ・・・だと

予想外に早い

「女の子みたいにきれいな子なんだな」

正解です

女の子だよ彼女は

顔は帽子でよく見えない気がするんだが

「編入先がオシリス・レッドなんで落ち込んでるのかなあ
その気持ち分かるなあ」

「十代、立とうとするな

編入生はオシリスレッドからだし落ち込んではいな
読心術なめんな」

「やうかあ」

「やつなんすか？」

「遊輝君の言つ通りにや

そうにや、遊輝君は一人部屋に一人だつたにも
レイ君、しばらへ遊輝君の部屋を使わせてもらひになさー

原作と違つて俺がいるからだらうし

「いいですよ先生」

その後食事が終わり

部屋にて

「さあて

そろそろ教えてくれないかな
どうしてこの学校に来たのか（知つてゐけど）
その帽子の中の素顔も（ちょっと気になるだけロリコンではない）
小学5年生の早乙女レイちゃん」

さあて質問タイムだ

原作知識で知つてゐるが食い違いがあつたら困るからな

俺はアカシックレコードには接続できないから細かな食い違いは確
認しないと

「ぼ、僕は男だ

でたら「はいこれどうぞ

これは校長先生が転校生の話をしているのを盗聴してから集めたデータ

話を聞いて怪しいと思つたから（ほんとは原作知識で早乙女レイが
女だつて知つてたからだけど）

調べたけど思つたより早かつたからな
だけど、これでもしらを切るきかい？

これはあくまでも他人で自分はこの人に似た合法ロリの女とでも
分かつたよ、その通りだよ私は女だよ
ああ、結構ばれないと思つてたのに

そういうて帽子を取る早乙女レイ
な、これは

「か、可愛い」

「え？」

なんかこいつに顔を向けてくるが危ない
YESロリータNOタツチだ
俺はアルビレオ・イマジやない
おっと、この世界だつたら三沢大地だつた
誰が何と言おうとロリコンじやない
ただ、単純にかわいいと思つただけだ

「ありがと」

「どういたしまして、でだ
もう一度聞く、どうしてこの学校に来た？」

「それは亮様に会いに来るために」

「成程、あわせてやつてもいい」

「本当…？お願い！わ、ただし条件がある

今から親に電話して、謝れ

お前がいなくなつて親が心配してゐるはずだ
友達も心配してゐるはずだ

それなのに自分の願いだけかなうなんて都合のいいことがあると思
うなよ」分かつたよ

今から電話するから電話貸してくれない

電話を貸します

電話します

怒られてるような声が聞こえます
どうやら来週の便のフェリーで帰るらしい

「じゃあ、協力するか

「うん！」これで私の思いを亮様に伝えるぞお

「じゃ、俺の正体を教えないとな

「正体？」

「俺は魔道士だ」

「は、今なんて言ったの？」

「だから俺は魔道士だ」

「嘘だあ

魔道士だなんている訳な「証拠、デス・デストロイ・デス・クライ
シス 火よ灯れ」

わ、手の上に火が本当に魔法使いなの？」

「あと、ついでにお前らも来い

エウオケム・ウォース
召喚 ミニーストライ・コウギ

遊輝の従者 カナデ

ライネス サイコ 奏

俺は仮契約カードを空に投げ従者を呼び出す

「遊輝、なんのようだ」

「マスター私に何のようかな」

「遊輝、私はすでにここにいるよ」

つて奏、お前はまた

「あわわわわ、デュエルモンスターのモンスターがしゃ、しゃ、喋つてるうううう」

「ここからは俺の従者兼デュエルモンスターの精靈だ」

もつ声が出ないだしい

じやあさつそく

「じゃあレイちゃん

君の望みをかなえに行くか

「え？」

S i d e a u t o

S i d e r e i

部屋に入つたら唐突に私は言われた

「 それで

そろそろ教えてくれないかな
どうしてこの学校に来たのか
その帽子の中の素顔も

小学5年生の早乙女レイちゃん」

え、なんでそれを
なんで私が女の子だつて
とにかくまかさなきゃ

「 ほ、僕は男だ

でたら「 はいこれどうぞ

これは校長先生が転校生の話をしているのを盗聴してから集めたデータ

話を聞いて怪しいと思つたから調べたけど思つたより早かつたからな
だけど、これでもしらを切るきかい？

これはあくまでも他人で自分はこの人に似た合法口の女とでも
分かつたよ、その通りだよ私は女だよ
ああ、結構ばれないと思つてたのに

この人ストーカーって一瞬思つてしまつた私は絶対に悪くない
悪くないはず

でも、ばれちやつたならこれをかぶつてもしょうがないか

「 か、可愛い」

「 え？」

この人私のこと可愛いつて

なんか嬉しいな

でも、私が好きなのは亮様

この想いを伝えるまでは

とりあえずお礼くらい

「ありがと」

「どういたしまして、でだ

もう一度聞く、どうしてこの学校に来た?」

「それは亮様に会いに来るために」

「成程、あわせてやつてもいい」

本当に

亮様に会えるの?

「本当に? お願い! わ、「ただし条件がある
今から親に電話して、謝れ

お前がいなくなつて親が心配してるはずだ
友達も心配してるはずだ

それなのに自分の願いだけかなうなんて都合のいいことがあると思
うなよ」 分かったよ

今から電話するから電話貸してくれない」

また言い切る前に

でも、この人の言つとおりだよね

みんな心配してるよね

私はこの人に電話を借りて電話して怒られた

当然と言えば当然だよね
黙つてきちゃつたから

「じゃあ、協力するか」

「うん！」これで私の思いを亮様に伝えるぞお」

「じゃ、俺の正体を教えないとな」

「正体？」

「俺は魔道士だ」

え、今なんて

私、耳が悪くなつたのかな？

「は、今なんて言つたの？」

「だから俺は魔道士だ」

そんなのいるわけないよ

この人私の事おちょくつてるのかな？

「嘘だあ

魔道士だなんている訳な「証拠、デス・デストロイ・デス・クライ
シス 火よ灯れ」
わ、手の上に火が本当に魔法使いなの？」

わ、本物の火

本当なんだ？

「あと、ついでにお前らも来い
エウオケム・ウォース
召喚 遊輝の従者 ミニストラヒ・ユツギ

ライネス サイコ カナデ 奏

わ、あれは光と闇の竜（ライト&ダークネスドラゴン）？
それにこっちはサイコ・ショック
このモンスターは知らないけど
え、なんでモンスターが実体化してるの？

え？

「遊輝、なんのようだ」

「マスター私に何のようかな」

「遊輝、私はすでにここにいるよ」

そして「マスターって何？」

「あわわわわ、デュエルモンスターズのモンスターがしゃしゃ、しゃしゃ喋ってるうひうひ」

「ここにちは俺の従者兼デュエルモンスターズの精靈だ」

「デュエルモンスターズの精靈？」

「じゃあレイちゃん

君の望みをかなえに行くか

「え？」

そういうつて私たちを寮を出たんだ

ブルー寮に行く途中精靈についての話を聞かせてもらつたんだ
でも、なんだろう
この気持ち

胸がもやもやする

Side auto

Side 遊輝

精靈について話しながらブルー寮に向かって言った俺とレイ
ブルー寮があと少しというところで止まった

「ちょっと待て」

「え？」

「認識阻害結界展開
認識妨害結界展開
防音・遮音結界展開
よし、OKだ」

複数の結界を展開

これで細工は流々後はやるだけ

「何したの？」

「結界張つただけ

これでおれらの存在はばれない
さあ、ブルー寮に侵入だ」

「え、ええええええええ！」
それって犯罪じゃないの？」

「大丈夫だ

「犯罪はばれなきゃ 成立しない」

「それって外道じゃ 「カイザー」に会うんだ
あいつは忙しいからこれくらいしなきゃ
そうなのかなあ」

「そういうもんだ、行くぞ！」

俺とレイはブルー寮に忍び込む

「こちらスネーク

ブルー寮に侵入した

「よくやつたぞスネーク

丸藤亮通称カイザーの部屋はこの先だ

「了解した、この先だな」

「何やつてるの？」

ふざけてたら怪訝な顔をして突っ込まれた

「どうせばれないからメタルギア」）」を

「私の恋がかかつてるんだからふざけないでください」

「はあい」

そんなことをやつながら寮の部屋についた

「Let's侵入ダゼ」

「だからふざけないでください」

「何者だ?」

「え?」

「俺がだれでもいいじゃん
恋する乙女の願いをかなえてあげるだけ
ほら、レイちゃん 告白告白」

今更だけど俺は変装してる
格好は死神みたいな黒いマントを羽織ってるだけだけど

「は、はい
亮様のことが昔から好きでした
亮様、乙女の一途な思いを受け止めて」

なんだこのオーラは
後ろに恋する乙女が
これが恋する乙女のオーラなのか、アニメなんかとは比べ物にならないオーラだ

「レイ、お前の気持ちは嬉しいが「亮様!」

とうあえず最後まで聞こうつなレイちゃん

「今の俺にはデュエルがすべてなんだ
俺のことはあきらめて新しい恋を探してくれー！」

まあ、まだ小学生とは知らないし
少しくらいセリフが変わつて当たり前か
つてレイ泣いちゃつてるよ飛び出しちゃつた
やば、結界再構成

「貴様の言い分は分かつた

説教をしたいところだが時間がないのでな明日俺が貴様に制裁を下
すだろう

俺の名はオシリス・レッドの石崎遊輝だ

明日の放課後、レッド寮近くの崖下で待つ

そらばだ

そして俺はレイを追いかけて行つた

第24話 失恋する乙女（後書き）

レイの口調が私なのはアニメみたいにばれた後までそれする必要があるのかと思つただけなので気にしないでください
だって再登場した後一人称私だったはずだよね?
違つたら教えてください

第25話 帝王への制裁 VS 丸藤亮＝カイザー（笑）

Side 遊輝

カイザー（笑）の身勝手な応答に対する制裁は明日にして今はレイちゃんを追いかけないと

「貴様の言い分は分かった

説教をしたいところだが時間がないのでな明日俺が貴様に制裁を下すだろう

俺の名はオシリス・レッドの石崎遊輝だ

明日の放課後、レッド寮近くの崖下で待つ

そりばだ

「待て！」

「待たない」

そうして追いかけていく俺

今は魔力を大幅に抑えてるからあんまり広い結界は張れないちゅうのに

まったく面倒だ

まあ気で足を強化してるから疲れないけど
で、ブルー寮を出たあたりでよつやく止まつた

「私振られちやつた

う、う

「泣きたいときは泣いた方がいいと思うよ

すつきりするし」

なんだこれは
俺じゃない

なんで俺はこんな優しいことを言つてゐる

「う、うええええええええええええええええええええええええええええええええええん

えつと防音・遮音結界強化

それからレイちゃんはしばらく泣き続けていた

「へ、ひ」

「そろそろ大丈夫か

明日はすることがいっぱいあるからな
帰つて寝ようか」

「うそ」

ほんとが転移魔法もしくは俺の能力を使えばあつとこいつ間だけど
その日は歩いて帰つた

そして部屋で

「私、これからどうしようつかな
次のフュリーの便は来週だし
確かにどうするか

「まあ、それはおじおじ
とつあえず明日は校長と話した後

ちょっとお願ひ（脅迫）してサボタージュでもするか

「なんか気になる単語が聞こえた気がするけど
それより私大丈夫かな
年齢とか偽つてたし」

「問題ない
あの狸を齧す材料の10や20
いくつでもあるさ」

「それってだいじょうぶなのかな

何を言つてるんだ
人は齧して利用して切り捨てるもんぢろ
自分の大事な奴以外は

「勿論だ」

Side auto

Sideレイ

大声で泣いちゃつた
恥ずかしい

でもこれから・・・

「私、これからどうしようかな
次のフェリーの便は来週だし」

ほんとどうしようかな

私、デュエルモンスターZ関係の勉強しかしなかつたから
普通の勉強は分からんのだよな
だから授業受けてもよくわからなかつたし

「まあ、それはおいおい

とりあえず明日は校長と話した後

ちよつとお願い（脅迫）してサボタージュでもするか

なんか脅迫って聞こえた気がするんだけど

でもそれより

「なんか気になる単語が聞こえた気がするけど

それより私大丈夫かな

年齢とか偽つてたし」

嘘ついてたしやつぱりまざい気がするんだよな

「問題ない

あの狸を脅す材料の10や20
いくつもあるぞ」

え、狸つて誰

もしかして校長先生の事？

それに脅すつて

「それってだいじょうぶなのかな」

「勿論だ」

いやな予感しかしないけどこれが気にしたら負けってやつなのかな

話し合いが終わり次の日帽子をかぶつてもらい
校長室に向かっている

「失礼します」

「遊輝君じゃないですか、はいっていいですよ
今日はどうしたんですか」

「この転入生のことなんですけど
実は・・・」

そういうて帽子を取る

「なんと」

「女の子だったんですよ
おまけに小5だし」

「小学5年生だあの試験に浮かつたんですか
君は頭がいいんですね
それで遊輝君、君は私に何をしてほしいんですか
君はそれだけで訪れるような人じゃないと思うのですが」

さすが校長

今まで幾度となく会いに來てる俺のことをわかつてゐる

(描写はしませんが遊輝は万丈田の時以外も結構ここにきていま
す) b よ 作者

「実は彼女のことば内緒にしておいてほしいんですよ
後しばらくサボらせてもらうで公欠にしておいてください
えつとこれ教師の不正の証拠

これでいいですよね」

「分かりました

いつも情報提供には君に感謝してるので彼女が帰るまで公欠扱いに
しておきましょう」

「ありがとうございます
それでは校長」

「えっと私

来た意味あるのかな」

レイちやん何か言つてるが気にしない

ネギまのエヴァみたく屋上でのサボタージュかな
やつぱりやめとこ

それじゃあ

「レッド寮に戻りますか」

S i d e a u t o

S i d e レイ

今、私は遊輝さんと一緒に校長室の前にいる

「失礼します」

「遊輝君じゃないですか、はいっていいですよ
今日はどうしたんですか」

あれ、脅すって言つてた割には仲がいいような
あくまで最終手段つてことなんのかな

「IJの転入生のことなんですが
実は・・・」

あ、帽子子とられた
校長先生驚いた顔してゐる

「なんと」

「女の子だつたんですよ
おまけに小5だし」

「小学5年生だあの試験に浮かつたんですか
君は頭がいいんですね

それで遊輝君、君は私に何をしてほしいんですか
君はそれだけで訪れるような人じやないと思うのですが

確かにあの試験は難しかつたな
かなり勉強したし

そして遊輝さんはどんなふうにみられてゐるの?

「実は彼女のことば内緒にしておいてほしいんですよ
後しばらくサボらせてもらうので公欠にしておいてください
えつとこれ教師の不正の証拠
これでいいですよね」

校長先生にサボる発言つて
しかも公欠希望するつてこの人つていつたい
それに教師の不正の証拠つて
一体遊輝さんつて

「分かりました
いつも情報提供には君に感謝してるので彼女が帰るまで公欠扱いにしておきましょう」

「ありがとうございます
それでは校長」

そして許可するつてどうこうことなの
いつも情報提供つて
あれなのかな
この人つてネギま風に言つとバグキャラつてやつなのかな
よく考へるとつかつてた魔法
ネギまのものだつた気がするのは気のせいかな
後で聞いてみよ

「えつと私
来た意味あるのかな」

ほんとに來た意味がない気が

「レッド寮に戻りますか」

無視された

それに おしてかれる
追いかけなきや

Siedau

Sino-e遊戲

レット寮に帰つた俺たち

「ねえ、さつき思つたんだけど使つてた魔法ネギまの漫画のだよね
どうして使えるの」

と聞かれてゐる

「俺が転生者で世界渡る能力があるから」

一
え、
転生
?」

そう一回死んだ人間でこと

世界渡る能力でネギまの世界にしてやつた転生者に習つた
このことは内緒だよ」

実は孝樹から魔法も習つてたんだよな

「え、ええええええええええええええええええええ！」

「驚くな、ほんとのことだし」

「いや、ふつう驚くよ

あとその魔法私でも使えるの？使えるなら教えてほしいな」

「俺と仮契約すれば使えるようになると想つよ

何気に魔力はある程度あるし

俺と仮契約しないといけないのは本来この世界にはない異端な力だからなんだけど」

そう、本来魔法なんて存在しないこの世界では普通の人はいくら魔力があつてもこの世界じゃ魔法は使えない
俺みたいな異物の関与イレギュラーが必要だ

「そうなんだ」

そんな話をしながら時間は立つていつた
そして放課後の時間帯
レッド寮近くの崖下

「よく逃げずに来たなカイザー
早速デュエルだ、逃がしあせん」

「ちょっと待つてくれ

俺が何をしたというんだ」

「あんな人の気持ちを考えないような最低なふりかたをして何を言つ
今の俺にはデュエルがすべてなんだって
それはデュエルがすべてだからお前なんか眼中にないと言つてるの

と同じようなもんだぞ」「違うー。おれはそんなつも「何が違うんだ
ふるにしてもむづちよつと言葉を選べ
では制裁の時間だ」

「じょうがない

「「デュエル」」

「では俺のターンから、ドロー

デス・メテオ発動1000ダメージ

火炎地獄3枚は発動俺1500ダメージ

貴様3000ダメージ

俺の勝ちだ

だが、まだまだだ

再びデュエル

おっと逃げられると思うなよ

俺が100回潰すまで貴様は逃げられないんだからな

それ

俺はゼアルでカイトが遊馬に使った赤い鞭のよつなもので捕獲
そして潰しまくる

「・・・いけ光と闇の竜（ライト& a m p ; ダークネスドラゴン）
えいえんのひょうが（ハイオーネエ・クリコスタレ）」

「うわあああああああああああああ

ライフは〇に

「次だ・・・」

「いけサイコ
サイバー・エナジー・シヨット」

「うわああああああああ

またライフは〇に

「いけマート
ヴィシテーション・オブ・マート
真理の天罰」

更にライフは〇に

「いけ銀河眼の光子竜
キャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン
破滅のフォトン・ストリーム」

その後も俺はカイザーを潰し続けた

「今日はここまでにしておいてやる
レイがまつてるし帰るか」

呆然としているカイザーを放つて俺は寮に帰った

第25話 帝王への制裁 √S丸藤亮=カイザー（笑）（後書き）

デュエルの内容は浅いですが
今回はカイザーを潰すだけが目的なので

第26話 恋する乙女 ヴィレイン（前書き）

お久しぶりの投稿です

遅れて本当にすいませんでした

アイデアはある程度考えてあるんでそれなりのペースで出していけ
たらいいなと思います

そしてついに主人公の見た目を決めたので後書きに書きます
アンケートの方も期間を延長し1／15までにします

これからもよろしくお願ひします

第26話 恋する乙女 ヴィレイ

S.i.d.e 遊輝

カイザー（笑）を叩き潰した後帰路についたんだが

「しまった！記憶操作忘れてた！

俺じゃないで謎のデュエリストAもしくは俺だと話せない呪いをかけるつもりだったのに」

俺は急いでかけていつたんだが

呆然としているカイザー（笑）のそばに痴女がいた

「え、それ本当なの！

転人生が女子で、しかもあの石崎遊輝にぼほほにされたって」

「ああ」

「めんべくわいし記憶を改竄させてもらおつ」

「「誰（誰だ）？」」

「デス・デストロイ・デス・クライシス 大気よ 水よ 白霧となれ
彼の者らに一時の安息を 眠りの霧」

「急に眠気が・・・」

「お前はゆ・・・」

じゃあさつさと記憶操作開始

まずは人払いの結界展開

カイザー（笑）の方は謎のデュエリストに襲われ潰されまくったと
そうだな、前の夜の時に俺が名乗ったのも名乗らなかつたことにして
よし

黒い死神みたいな服を着たやつに襲われたことにしてつと

OK カイザー（笑）の記憶操作終了

次は痴女だ

呆然としていたカイザー（笑）に話しかけて俺のこと聞いたのか
だったら謎の男に襲われたのを聞いたことにしてつと
よしこつちも終わりだ

「これでいいか

じゃあさつさと帰りますか」

俺は結界の入り口あたりまで来て結界を解く
そして部屋に帰っていく

「おい、レイちゃん開けていいか」

俺はノックして聞いてみる

こんなところでよくあるミスをするものか

「大丈夫だよ

どこのアニメみたいに着替えてる途中なんてことはないから」

大丈夫か

俺はドアを開ける

まあ当然だけぢぢ」その一次小説の痴女みたいなことをしてレイちゃんが待つてゐるなんてことはなかつたよ
でもなんか^{かなで}奏と話し込んでゐるのは気になつたけど

「ただいま」

「おかげり

突然だけど私とテュエルしてくれない」

「いいけど

じゃあ、レッド寮の裏にある森にでも行きますか」「一体どうしたんだ

まあ、あの面白映像を生で見れるなら見てみたいし

「あ、そうだ

これ飲むと精靈が見えるようになるよ

俺のささやかな能力の一つで作ったんだけどね」

やつ言つて俺は栄養ドリンクのようなものを差し出す

「え、精靈が見えるようになるの？」

私も精靈が見てみたいから飲んでみるよ」

そう言つてレイちゃんは俺が差し出した栄養ドリンクのようなもの

を受け取つて飲む

「カルピス味?

なにこれ、苦こと思つていたけど

よくある誤解ですね

そもそも俺が能力で作ったのにわざわざ苦くする必要ないじやん

「いや、俺が作ったのにわざわざ苦くする必要ないじやん」

「それもそうだね」

「じゃあ行くか

「うそ」

そう言つて俺とレイちゃんは森の中に入つていつたんだ

Side auto

Sideレイ

遊輝さんが出て行つてから少し経つたんだけど

「やう言えれば遊輝さんのことあまり知らないなあ

「知りたいの?」

「うわあ…

何時からいたの、どうか遊輝さんと一緒に行つたんじゃないの?」

奏さん何時からいたんですか？

いきなり出てきたからびっくりしちゃったよ

「いつも遊輝と一緒にいるわけじゃないよ
それで知りたいの？」

「うん、まあ」

「じゃあ教えてあげる

遊輝は転生者って本人が言つてたよね」

「うん、驚いたけど
一度死んだことがあるなんて」

本当にあればびっくりした
一度死んだことがあるなんて

（一度じゃないけど）
もっと詳しいことを言うと

遊輝は前世でこの世界に似た物語を見たことがあるらしいの

「え、物語？」

物語ってどうこうことだらう

「そう、物語

私も初めて聞いたときは信じられなかつたけど
遊輝の能力で世界を渡つて別の世界に行つたとき
この世界にそつくりで、しかも登場人物に十代君とか翔君とか隼人

君とかがいる

物語を見た時は本当に驚いたよ」

「へ、へええええ

そ、それは驚くなあ

自分のいる世界に似た物語があつたら

「少し話がそれちゃつたけど

それで遊輝は偽善者を名乗つてるんだ」

「偽善者? なんで」

「物語を知つてゐるからだと思つよ

それに正義や善よりも偽善のほうが好きだしいし」

「そつなんだ」

偽善者かあ

「それで実は遊輝はもう歳がね、500を超えてゐるの
転生したときに不老不死になつたらしくて」

不老不死かあ
つて不老不死?

「不老不死つてどうじうことですか?」

「そのまんまの意味だよ

遊輝と仮契約した私たちも不老不死だけどそれは関係ないか

だつて遊輝、死者さえ蘇させれるし」

「 もハいーでア」

「ア」あわて何も言えない

「 ネウ？で、物は相談なんだけど
あなた遊輝のことがすきだしょ

私は精靈だから「 ストップ！わ、私は遊輝さんのことそんな好きつ
てい」

ラブ臭もするし好きなのはわかっているから少し聞いて
まあ、そんなに否定したいんだつたらデュエルすればわかると思うよ
本当に遊輝のことが好きだと気付いたらわつかも言つたけど頼みが
あるの

私も遊輝のことは好きだけビ
私、精靈でしょ

だからフラグメイカーの遊輝のことを見張れないの
好意にはすぐ気付くけどフラグは無意識に立てりやつから
来年いや今年、飛び級でここに入つて
見張つてほしーの

大丈夫、方法はきちんとあるから

もちろん、その方法を成立させるために私も力を貸すわ」

方法のことは気になるけど

やつぱり言われて気になつたけど

私つてやつぱり遊輝さんのことが好きなのかな
かなで

それによつて私と奏さんで遊輝さんを見張るつてことなのかな

「 本妻は私たち一人つてことで

まあ、私たちが見張つてもおそらく10人や20人くつへじこと

なるかも知れないから

まあくつついても私は遊輝に〇 H A N A S H Iなんかするつもりはないし

ライネスから聞いた話なんだけど
異世界を旅してた時に相当数のフラグを立てたらしいし

そ、それはなんというか

「おい、レイちゃん開けていいか」

「あ、帰ってきた
話はいったん終了ね」

あ、精霊化しちゃった

そうだちょっと変な返事してみよ
どんな反応するかな

「大丈夫だよ

どこかのアニメみたいに着替えてる途中なんてことはないから」

あれ開けるの遅いな
ようやく入ってきた
なんか安心したようなこと残念って感じの顔が混ざってるなあ
何を考えてるんだろ

「ただいま」

「おかえり

突然だけど私とデュエルしてくれない」

「デコヒルすると分かるか
まあやってみよう

「いいけど

じゃあ、レッド寮の裏にある森にでも行きまますか」

行こうとしたところなり振り返った
なんだらう?

「あ、そうだ

これ飲むと精霊が見えるようになるよ
俺のささやかな能力の一つで作ったんだけどね」

そう言って私は栄養ドリンクのようなものを差し出された
精霊が見えるようになるのかあ
見てみたいし

「え、精霊が見えるようになるの?

私も精霊が見てみたいから飲んでみるよ」

そう言って私は栄養ドリンクのようなものを飲んでみたんだけど

「カルピス味?

なにこれ、苦いと思つていたけど

本当になんでカルピス味?

「いや、俺が作ったのにわざわざ持くする必要ないじゃん」

「それもそうだね」

でもお、やつぱりなんでカルピス味?
好きなのかなあ?

「じゃあ行くか」

「うん」

やつぱりて私たちはレッド寮の裏の森に入つていつたんだ

Side auto

Side 遊輝

レッド寮も裏の森に歩いて行つたけどこの辺でいいかな

「じゃあねそろやめうか

「うん」

「「デュエル!...!」」

「私のターン!...ドロー!
恋する乙女を召喚!...」

出た!

このデュエルの主役?女狐モンスター

「ターンヒンデー!」

「俺のターン、ドロー

俺はE・HEROフューザーマンを攻撃表示で召喚

バトルだ

フューザーマンで恋する乙女に攻撃
フューザーブレイク！

「わやああああああああ

悲鳴を上げるレイちゃん
ではなく恋する乙女

$4000 - (1000 - 400) = 3400$

「恋する乙女のモンスター効果発動！
攻撃表示である限り戦闘によって破壊されない
つて、え？ なにこれ？」

お、始まつたよ

あの大爆笑ものの謎のピンク空間

「お、お嬢さん大丈夫ですか？」

「あはああ、あ」

「ああ」

っふ

笑いをこらえるのがきつすぎる
レイちゃんは「え？」って顔だし

「まあいいや、うん、今のは何かの気のせいだよね
恋する乙女のもう一つのモンスター効果
恋する乙女を攻撃したモンスターは乙女カウンターを一つ乗せる」

「カードを一枚伏せターンエンド」

「私のターン、ドロー！」

手札から装備魔法キューピッド・キスを発動する」

天使が恋する乙女にキスをする映像が流れる
間違いなくあの天使は
天使は天使でも堕天使に決まつてゐ
きつとそうだ

「バトルよ、一途な思い」

また広がるピンク空間
レイちゃんが「また?」って顔をしている

「フェザーマンさああああん
私の一途な思いを受け止めてえ——————」

「あ」

避けるフェザーマン

ここまでは普通だ、ここまでは

「あああああん」

避けられてこける恋する乙女…なんだけど作為的なものを感じる

3400 - (1000 - 400) = 2800

「ひ、ひどい！ひどいわあ！」

「すまない！そんなつもりじゃ

目が怖い

あれは男を使うだけ使って捨てる女の田だ
今度は投げキッスしたよ

そして何がやああんだ

実際に見ると笑えるけど突っ込みビンガ多すぎると

「私の言つこと聞いてくれるわよね？」

「もううるんー」

「じゃあ、遊輝を攻撃して」

「わからんー君のためならできるー。」

そう言つてフェザーブレイクを放つてくるフェザーマン
だけどダメージを受ける氣はさらへんねえ

「トランプ発動、攻撃の無力化
これで攻撃は無効だ」

止められる攻撃つて

こわ、あの乙女いま「つち」って舌打ちしたよ
こえええええええ

「あれ、また何か幻覚が
私疲れてるのかな？まあいや、それよりも
乙女カウンターの乗つているモンスターを攻撃し逆にダメージを負
つたら

装備魔法キュー・ピッド・キスの効果が発動
そのモンスターをコントロールできる
カード一枚伏せてターンエンドだ」

レイちゃん幻覚じゃないぜ
それは目の前で起こつてることだ
それにしてもカードは精霊は宿っていないんだが
一体どうしてこうなつてるんだ
あのカード特別なカードなのか？

「俺のターン、ドロー
E・HEROザ・ヒートを攻撃表示で召喚
こいつは攻撃力が自分フィールド上に表側表示で存在する
E・HEROと名のついたモンスターの数×200ポイントアップ
する
ザ・ヒートでフェザーマンに攻撃
ヒートナックル」「
トラップカード
ディフェンス・メイデン発動！」

フェザーマンをかばうように出でてくる恋する乙女
そして燃えるごぶしに吹き飛ばされる
一体お前は何がしたいよ乙女

「あああ――――――――――

悲鳴を上げるレイちゃん
ではなくやつぱつ恋する乙女

2800 - (1800 - 400) = 1400

「ティファン・メイテンの効果により
ザ・ヒートの攻撃は恋する乙女に移った!」

またしてもムガムク空間

「また?」

声に任じぬよレイちゃん

「ザ・ヒート!

お前はヒーローのくせにか弱い女性を攻撃するなんてなんてやつだ

!」

「俺は、なんじきをしてしまったんだあ――

お嬢さん、大丈夫ですか?――」

「自分を責めないで

戦つこと、それは宿命なのだから、ね?」

「は、惚れたあああ――」

おこーザ・ヒート

お前は何頭を抱え、敵の攻撃を避けたことを後悔している

そしてお前には恋人いるだろ
だめだ、面白いが突っ込みどころが多くなる

「またあ？ダメだ

私、病院にでも行ったほうがいいのかな

それはともかくザ・ヒートにも乙女カウンターが乗ったよ

「カード一枚伏せターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！』

装備魔法ハッピー・マリッジを発動！』

結婚式に鳴らす鐘が鳴る映像が流れた……って何時の間に

何時の間にに変わった？

何時、恋する乙女の恰好がウエディングドレスに変わった

「その効果によりフェザーマンの分だけ攻撃力がアップする！」

また始まつたぜ

「ザ・ヒート様あああああ

「あ

「ああああん

こけたよ、またこのパターンか

「ザ・ヒート様、ひどい…」

「や、そんなつもじじゃ」

「じゃ、私のために戦ってくださいますか?」

「もちろん…」

「名にこの娘

こんな女狐だったの?私の好きな恋する乙女って」

レイちゃん、なんかいろいろご愁傷様です

「お願い、ザ・ヒート様!」

「させるか!

2枚目の攻撃の無力化発動

戦闘は終わりだ!」

また「っち」とてやつたよあの乙女

「ええと、まあどうあえず私はターンを終了するよ」

「俺のターン、ドロー!」

俺は天よりの宝札「アニメ版」を発動

効果によりお互いの手札が6枚になるよ!ドロー!..

女の子には女の子ってな

E・HEROバーストトレーディを召喚

さらに二重召喚を発動

E・HEROレディ・オブ・ファイアを召喚

広がるピンク空間だが

そこには燃えるオーラをまとった一人の修羅がいる

「嘆かわしい」と、そのような小娘如きに惑わされるとは

「ザ・ヒートー私のことは遊びだったのー。」

「あ、あああ」

「え？え？」

「すごい迫力

これが大人の女性ってやつなのかなあ」

おい！

レディ・オブ・ファイア、お前精霊じゃないだろ

なんだよ、私とのことは遊びだったのって

そしてレイちゃん

それは絶対違う！

「バースト・リターンを発動

このカードは自分のフィールドにバーストレディがいるとき発動可能
効果でフェザーマン、ザ・ヒートを手札に

そして始まるカオス劇場

「ああ、俺たちは何をしていたんだ！」

「レディがいるのにほかの女に現を抜かすなんて！」

「『ヒーロー』にあるまじき行為だ！』」

「あんたたちさうさと戻つてきなさい」

「さあ——」

ええ――――――！」

さすがバー・スト先輩

そこ痺れる、憧れるうつ

自分でやつたことだが

なんだこれは

更に融合を2枚発動

レディ・オブ・ファイアと手札のザ・ヒートを融合

ム・スルト

ダブル・フレイムショート

そして諸悪の根源
恋する乙女は消える

「きやあ

「大丈夫か?」

「うん、大丈夫
ありがとう遊輝さん

あなたと『テュエル』して自分の気持ちに確信が持てた
私あなたのことが好きです、私の気持ちを受け取ってください!」

え、俺?

「俺なんかでいいのか?俺つて不老不死だし「知っています!」
かなで
奏さんから聞いてます

私のために動いてくれる遊輝さんを見て気づいたんですね
私遊輝さんのが好き
付き合ってください、そして仮契約してください」「
わかった!

俺もレイちゃんのことは好きだ
ただ、仮契約は待ってくれ
せめて結婚してからだ
まだ若いのに成長しなくなつたら不気味だろ

「うん」

落ち込み気味でいうレイちゃん

「そうだ『現実化』^{ジョアライズ}これをあげるよ

おそろいの腕時計だ

これはIUTつて物語に出てくる代物を改造したものでね

中に結構なものを収納できるんだ
使い方は二つ

その腕時計の画面を押して電子映像を空中に浮かべて選ぶか
入れたいもの出したいものを念じると
中に物を入れたり外に出したりできるよ」

「うわああ、ありがと」

「それともう一つ『現実化』^{リアライズ}

この指輪をプレゼント」

そう言って俺はダイヤのついた指輪のある能力で作りレイちゃんに渡す

「これ高いんじゃ？」

「大丈夫

俺の能力で作ったもんだ
腕時計の中に入れておいてくれ
あと俺のことは遊輝でいいよ

「わかつたよ遊輝

これで正妻は私たち二人かな」

「二人つてやつぱり

あいつか、いつ俺はフラグを立てた
もう一人つて奏のことだろ^{かなで}

精霊として覚醒させた直後からあんな感じだからやつぱりと思つてたけど

一体いつフラグ立てた

「まあいいじゃん

それよりも、奏さんかなでが私が来年、正式な方法でこの学園がくえんに入学する手段があるって言ってたけどそれって？」

「GX大会だ

この庄界かなでが本当にうなら GX大会で優勝すればいい
どうせ奏のことだ
手伝つて言つたんだ
まあこいや
とつあえず帰つて寝よ」

「ナホだね」

それから帰つて寝て
GX大会のことや俺のことを話して時間はずかれていた
そしてレイちゃんは帰つていったんだ
この時、十代たちはこのことを知つたときめけめりへり驚いてた
俺はレイちゃんと付き合つことになつたんだが
俺は口利くり口くちじやない
幼女おとめだつたら何でもいい変態へんたいじゃない
レイちゃんだからいいんだ
まあ、どつこにしても変態へんたいか
レイちゃんだけに対する口利くり口くちじ

第26話 恋する乙女 √Sレイ(後書き)

主人公の見た目

黒髪黒眼のよくいる日本人

髪型はめだかボックスの球磨川 複

顔はめだかボックスの人吉 善吉

体格はよくいるモブAに見えるけど脱ぐとある程度は引き締まつてるくらい

『ハッピー・マリッジ』効果

装備魔法

自分フィールド上に相手からコントロールを得たモンスターが表側表示で

存在する場合に発動する事ができる。

装備モンスターの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の数値分アップする。

『恋(こい)する乙女(おとめ)』効果

効果モンスター

レベル2／光属性／魔法使い族／攻撃力400／守備力300

このカードは表側攻撃表示でフィールド上に存在する限り、戦闘で破壊されない。

このカードを攻撃した相手モンスターに乙女カウンターを1つ乗せる。

『キューピット・キス』効果

装備魔法

装備モンスターのコントローラーが戦闘ダメージを受けた時、ダメージステップ終了時に攻撃を行つた乙女カウンターを置いているモンスターのコントロールを得る。

《ディフェンス・メイデン》効果

永続罠

自分フィールド上に「恋する乙女」が表側表示で存在する限り、相手モンスター1体が自分フィールド上のモンスターに攻撃宣言をした場合、その攻撃対象を自分フィールド上の「恋する乙女」1体に移し替えることができる。

第27話 融合封印 十代VS三沢=空氣

Side三人称

「これはデュエルアカデミアの港
今物資の搬入が行われている

「ああ、それはあつちに持つて行つて」

そう購買部のおばさんであるトメさんが作業員を動かしている
その付近の海面には泡が出ている

「あ？」「へ？」

トメさんは何かが気になり後ろを振り向いたが
その時その場所からはすでに泡は消えていた

そのすぐあと

レッド寮近くの断崖に明らかに怪しい恰好をした一人の男の姿があ
つた

「俺にかかるばこんなもんぞ、デュエルアカデミア
その秘密、この国崎耕介が暴いてやるぜ」

どうやらこのスパイの真似をしている勘違い男の名前は国崎耕介と
いう名前らしい
明らかに自意識過剰だらつ

Side丸藤 亮＝カイザー

ああ憂鬱だ

あの謎の「デュエリスト」に襲われ「デュエル」で負け続けてからどうも調子が出ない

ま、今はそれはいいだろう

今、俺は学園対抗「デュエル」に出る生徒を決める話し合いに参加をしている

「何故ですか？」

「デュエルアカデミアノース校との友好デュエル」には

昨年と同じようにシニヨール亮丸藤が代表に決まっていたはずな

うね

「それが、向こうの代表が一年生だと言つんだなあ」

「一年生で強い「デュエリスト」ならあの一人だろう

「一年生！」

「そういうわけなので

こちらの代表も一年生がいいだろうといふことになつてねえ
どうだらう丸藤君？」

「俺も構いません」

最近、「デュエル」に集中できないからな
だつたらそつちのほうがいいだろしね

「では問題は

「誰を新しい代表にするかだ」

やはりあの一人のどちらかだろ?つ

「遊城十代もしくは石崎遊輝」

「うん?」

「これは大変なことになりそうだにやあ
ねえファラオ」

「ニヤア」

「遊城十代?それに石崎遊輝?」

「本氣か?」

「彼らのどちらかなら

面白い? ハルを見せてくれると思います」

「彼らなら実力も申し分ない」

「(嫌なの)~ね

ドロップアウトボーイ~が代表になるなん~て

誰か対抗できるよ~な

ウニヤウニヤウニヤウニヤウニヤ、ああ)

では私は三沢大地と天上院明日香を推薦するの~ね

「ラー・イエローの三沢大地君とオベリスク・ブルーの天上院明日
香君を?」

「4人をトーナメント形式で戦わせて優勝したものを代表にするのはどうでしょうか？」

「どう思つね？丸藤君」

成程

それはいい考えかもしれない

Side auto

Side 遊輝

「え、俺？」

思わず十代とかぶつてしまつたな
まさか、俺が代表候補になるとは

「そうなのニヤア」

三沢君と天上院君とトーナメント形式でデュエルして
優勝した生徒がノース校とのデュエルに出場できるのニヤア」

俺がこの物語

いや、この世界に加わったために起きたイレギュラーか
こいつは代表になつてやろうじやないか
俺と十代、そして三沢は向き合つて笑つた

「いいデュエルを期待してるニヤア」

授業が終わった後

「す」によ二キ、遊輝
学園の代表なんて」

「今までオシリスレッドから代表が選ばれたことはないんだなあ」

「えつへつへつへ」

「くええええ」

隼人つて物知りだな
そこまでふつうは調べないだろ

「案外早く戦う機会が来たな？」

「ああ、あれから俺は日夜研究を続けている
お前のE・HERO^{エルヒーロー}テツキに対抗できる
7番目の『テツキを』

「できたのか?」

「いや、だが『テコモル』まあでには間に合わせるぞ」

「楽しみにしてるぜ」

「ああ、そして石崎遊輝

君に言つてなかつたが君と戦うための8番目の『テツキも完成させて
みせる

君が使つあたりゆる『テツキ』に対抗できる『テツキをね』

俺のデッキに対抗できるデッキか

「俺も楽しみしてゐるぜ」

「7番田、8番田のデッキ一体どんなのだらう?」

「これはまずいトコになる気がするぞお」

確かに

「よしわざと帰つてデッキの調整だー」

「俺らはライバルだけど
お互に頑張りづばー」

「ああ、勿論だぜ!」

そつと聞いて俺と十代たちは別れたんだ

Side auto

Side 10代

対抗デュエルか
絶対出て見せるぜ
そのためにはデッキ調整だ
そう思つて遊輝と別れて帰つてゐる途中

「なあちよつと」

「うるさいな、忙しいんだ」

「お、おー」

同じオシリス・レッドの制服を着た人がラー・イエローの生徒に邪魔者扱いされてるあんな人いたつけな

「なんだかすゞく年を取った生徒だなあ」

確かにそうだな
あ、そうか分かつたぞ

「なあ、あんた」

「うう？ 分かつた
おっさん、万年落第生だろ？」

「お、おっさん？」

「いいって、いいって分かつてるよ
頑張ればそのうち進級できるわ
諦めるなよ
さあ、寮に帰るうぜ」

一緒に帰つてこの人と話をうつ

「アニキ待つてよつ
「いや、俺は」

「（あんな人いたかなあ？）」

それから寮に帰つたんだけ

「あむあむあむ、うめええ

「十代、そのおつをござつしたんだ？」

「遊輝か、この人万年落第生だしくてさ
一緒に飯でも食おうかと思つてさ
それよりもおっさん
早く食べないと、飯のおかわりなくなるぜ」

「あ、ああ

「うーーの、飯をそんにおこしそつに食べるのはアーキだけだよ

「全くだよ

「い、いだきます

食べた後、俺はおっさんを連れて部屋に行つたんだ

こいつかなあ
やつぱりこいつを入れようかな

「三沢君はどんなアーティストで来るんだろう？」

「彼のことだ

「アニキ」を研究してみたいんだが」

「アニキ？」

よし

「うーん、やっぱ『れがにこ』
よし」

「ア、アニキ？」

「三沢がどんな『テッキ』で来ようと俺さんの『トッキ』を信じる」

「アニキらしくですね」

「うそ」

俺らしいのが一番だろ
あ、おっさんがなんかカード見てる
何してんだろ

「おひさん、ビーフした?」

「おひさん、ビーフなー」

俺は国崎耕介（本名：国崎耕介）

「そつか国崎さんね
スカイスクレーパーか?
国崎さんも好きなのか?」

「俺はデュエルなんか好きじゃない」

「デュエルが好きじゃない？」

「じゃあなんでデュエルアカデミアに来てるんだ？」
それに「デュエルは楽しいと思つけどな

「え？ じゃあどうしてデュエルアカデミアに？」

「あ、いやその

落第ばかりで楽しくないなあとが」

やつこひとか

「あ、その気持ち俺には分かるんだなあ
俺も自分はダメなんだって諦めてたから」

「隼人」

「でも！ 十代のデュエルを見ているうちに俺もまちやり対つて思つ
よつになつたんだあ」

なんか照れるなあ

「えつへへへへ」

「隼人君

「そうだよ、国崎さんもアニメのデュエルを見たりきつとわくわくす
るよ

「ちょうど学園代表決定トーナメントもあるし」

「あ、ああ（ふん、俺はお遊びに付き合ってる暇はないんだよ
そうだ！！）」いつもなら何か知ってるかも知れないなあ
なあところどうわさで聞いたんだけど、学園の生徒が行方不明にな
つてるってホントかなあ？」

「こいつは本当のことは言えないぜ
あそこは本当にやばかったしな
翔と隼人に目配せして

「聞いたことないぜ」

「僕も聞いたことないっす」

「俺もなんだなあ」

「やうか、ただのうわさかあ（つち、使えねえな）」

Side auto

Side=Hアーマン=ロリコン

いよいよあいつと戦うことができる

「こんなに熱くなっているのは久しぶりだ

フレイム・ウイングマン

倒した相手モンスターの攻撃力分のダメージを『える
十代のキーカード』

手ごわいモンスターだ
だが

「こいつをつぶすには
バーストレディかフェザーマンを封じておけばOKと」

次はサンダー・ジャイアントだ

「こいつは厄介だ
攻撃力2400以下のモンスターを召喚時に破壊してしまったからな
スペークマンとクレイマンの融合には要注意だ」

次はテンペスター

いや、これじゃだめだ

個々のモンスターに対処していたんでは俺のデッキが回らなくなる

「何かもつと決定的な方法があるはずだ
やつのデッキのキーカードをつぶす方法が、あ！」

あつたはずだ

確かあのカードなら

「遊城十代、お前の融合ヒーローは俺の前に現れることはない
ふ、ふふふ、ふつはつはつはつは」

これで勝つたも当然だ

俺はこの時忘れていたんだ

これだけでは十代の融合

いや、十代のデッキは止まらないということを

「 いつ ただつきまーす！

朝飯、朝飯米がうめえええ
おかげはめだかの黒焼きか

これもなかなか、むにゅむにゅむにゅ

「 アニキ、それはめやしー」

「 そりだぞ十代

ふつうめだかは食べねえぞ」

「 遊輝、じやねえか

今日はお互い頑張ろうぜ」

「 アニキに遊輝も

二人とも緊張感ないっすねえ」

「 「 なんだよ翔」 」

「 なんか気が立つてるんだなあ」

ほんとにどうしたんだ翔

「 何言つてるんすか

今日は代表決定トーナメントつすよ
本当なら緊張して食欲ないようとか
はあ、昨夜は全然眠れなかつたよ
つてのが相場でしょ」

「翔、十代に相場を求めるな
ま、俺もこの程度邪緊張しないけれどな」

相場を求めるなつて
ひでえなあ
でも

「ま、遊輝の言つとおりだぜ翔
とにかく、デュエルの前はいっぱい食べて力をつけなきゃな
「アニキらしいや
そういうえば、国崎さん
ビニコレーツちやつたんだろ」

「国崎さんつて
あのおっさんのことか」

「やうなんだなあ
国崎耕介さんつていづらしいんだなあ」

それから代表決定トーナメントまで特に何も無く進み

「シニヨールシニヨーラお待たせしたの～ね
ただいまから、学園代表決定トーナメントを始めるの～ね」

「「「「「「「わあああああああああああああ」」」」」」

すげえ盛り上がりでんなんあ

絶対優勝して俺が代表になつてやるぜ

「第一戦

ラー・イエローからは三沢大地！

そして、オシリス・レッドからは遊城十代いーと

「その顔だとできたのか？」

俺を倒すための第7のデッキってやつが

「ああ、楽しみにしている

お前を倒す7番田のデッキを」

「俺だつて負けないぜ」

「アニキ負けないでー！」

翔の応援が聞こえるぜ

「十代、俺と戦つまで負けんじゃねえぞーー！」

遊輝からの応援も聞こえたぜ

「では、始めるのーね

「行くぞ、三沢！」

「「デュエル！」「

「俺のターン、ドロー！

カーボネドンを守備表示で召喚

あらわれたのは機械っぽいドライゴン
なんかかっこいいぜ

「お前のフ番田の『テッキ見せてもらひづぜ

俺のターン、ドロー！」

俺はE・HEROバーストレーディを攻撃表示で召喚

「（バーストレーディ

フェザーマンと融合する事で

十代の切り札、フレイム・ウイングマンへと姿を変える）
いきなり引き当てたか？」

「行くぜ、三沢！

バーストレーディでカーボネドンを攻撃
リバースカード一枚伏せターンエンドだ」

「まだこれからだ、俺のターン

（来た、十代お前を倒すキーカードがな）

俺はオキシゲドンを攻撃表示で召喚

オキシゲドンでバーストレーディを攻撃

「トラップカードオープン

ヒーローバリア

このカードはフィールドにE・HEROエレメンタルヒーローがいるとき
一度だけ相手モンスターの攻撃を無効にする…」

青いバリアがバーストレーディを守る

甘いぜ、三沢

「さう簡単に、おれのE・HEROは倒せないぜ」

「やうだりうな、それでこそ一番君だ」

「いや、俺は一番じゃないぜ

俺と遊輝じゃ遊輝のほうが勝つてるからな

「そりか（だが、このカードで一番も返上だぞ十代）
俺はリバースカードを一枚伏せターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー

俺はE・HEROスパークマンを攻撃表示で召喚！
更に手札から装備魔法スパーク・ガンを発動！

スパークマンに装備する

このカードの効果により相手モンスター一体の表示形式を変えることができる

スパークマンがスパーク・ガンを打つ姿はやっぱりかっこいいぜ

「オキシゲドンを守備表示に変更

バーストレディ、オキシゲドンに攻撃だ
バーストファイヤー！」

「十代！

酸素に炎がぶつかるとどうなるか知ってるか？」

「え？」

「今、身をもつて知るとい

特殊効果発動、オキシゲドンが炎族モンスターに戦闘で破壊された時

お互いのプレイヤーは800ポイントのダメージを受ける。」

4000 - 800 = 3200

4000 - 800 = 3200

「やるな

だけどお前のフィールドはがら空きだぜ
いけえスパークマン、三沢にダイレクトアタックだ」

3200 - 1600 = 1600

「へへえ、どうだ
俺のE・HERO^{エルメシタルヒーロー}は強いだろ？
俺はカードを一枚伏せターンエンドだぜ」

「確かにお前のE・HERO^{エルメシタルヒーロー}は強い！
だが、お前が勝つ確率は1%もない」

「何？」

「どうしたことだ？」

「（十代にキーカードを使わせる為には
俺も全力を出さなければ）
見せてやるよ、俺の7番目のテッキの力を！
俺のターン、ドロー
俺はハイドロゲドンを攻撃表示で召喚！
ハイドロゲドンでバーストレディを攻撃！」

つぐバーストレディが

だけどダメージだけは防がせてもらひつぜ

「トラップカードオープン
ガード・ブロック

こいつの効果によつて俺への戦闘ダメージは〇になり
俺はデッキからカードを一枚ドローするぜ」

「だが、バーストレディは破壊した
よつてハイドロゲドンの特殊効果発動
相手モンスターを戦闘で破壊した時
デッキからもう一体ハイドロゲドンを特殊召喚する事ができる」

「うう

「これはちよつとまずいか?

「さらに手札から装備魔法発動
リビング・フォッシュル!

このカードは自分の墓地からモンスターを一体特殊召喚し
そのモンスターに装備される
生きた化石となり、甦れオキシゲドン」

この三体はまさか

「ただし攻撃力は1000ポイント下がり効果も封じられる
これでそろつた」

やつぱりか

「マジックカード

エイチツーポ

ポンティング・H₂Oを発動

このカードは自分フィールド上のハイドロゲロン2体とオキシゲドン1体

つまり、水素ーと酸素ーを化合する事で水を生成する」

化学は分からないんだけどなあ

「ウォーター・ドライゴンを特殊召喚」

「ウォーター・ドライゴン」

やつぱりウォーター・ドライゴンだったか

「俺のターン終了だ
(どうだ十代、これでお前はキーカードを出せられるおえないはず
そうなれば!)」

「さすがだなあ、すごいコンボだ
(遊輝とは違ったタイプですごいコンボだな)

だが、まだこれからだ

俺のターン、ドロー

強欲な壺を発動

2枚ドローするぜ

(よし)

お前が三体のモンスターを生け贋にエースモンスター
ウォーター・ドライゴンを呼んだのなら
俺もお前の全力にこたえてやるぜ!
場のスパークマン

そして手札からフュザーマン、バブルマンを融合させ

俺の最強のヒーローの一休、テンペスターを召喚するぜ！

マジックカード 融合発動！』

「！」の時を待つていたぞ！

「はあ」

「トライプカードオープン！！封魔の呪印ふうまじゆいん！」

このカードは手札からマジックカード一枚捨てることで発動
相手のマジックカードの発動を無効にし破壊する！

また、この効果で破壊されたカードはこのデュエルではもう使つこ
とはできない！』

「何！？融合が使えないだつて！」

三沢はこれを狙っていたのか

だが、ちょっと驚いたがこれだけじゃ俺の融合は止まらないぜ

「お前の切り札はE・HERO同士を融合して召喚するモンスターだ
ならばそれをできなくすればいい」

確かには

遊輝と会つ前俺だつたら負けてたかもしれない
だけど、今の俺の融合の手段は融合というカードだけじゃないぜ

「これがお前のために考え抜いたタクティクスだ
俺の計算に間違はない」

「確かに

今までの俺だつたらびびつてたかもしけないが

今俺はもう簡単に止められないぜ

「なんだと！」

「俺は天使の施しを発動するぜ
3枚ドローし手札を2枚捨てる
もう一枚だ

俺は再び天使の施しを発動

3枚ドローし手札を2枚捨てる
(遊輝の前世じゃ世界じゃ禁止カードだつたらしいけどこの世界じ
やそんなことはないからな)

俺はさらにホープ・オブ・フィフスを発動
墓地のE・HEROバーストレディ、スパークマン、フェザーマン、
バブルマン、クレイマンをデッキに戻しシャッフルする

デッキよ答えてくれ

「そして2枚ドロー！」

(来てくれた)

俺は超融合を発動

手札を一枚捨て俺のスパークマンと三沢
お前のウォーター・ドラゴンを超融合…」

「なんだと…！」

「来いE・HERO アブソルートZero
アブソルートZero ドビメだ
瞬間氷結 (Freezing at moment) …」

「うわああああああああああああああああ

1600 - 2500 = - 900

危なかつたぜ

今回は引きが良かつたから勝てたが
一步間違えたら負けてたぜ
だけどめちゃくちゃ楽しかつたな

「勝者オシリス・レッド遊城十代!...
おめでとう、次は決勝だ」

「やったアニキ!」

「おめでとう」

「やつたな十代、次は俺の番だな
決勝に俺も行つて見せるぜ」

「ああ、勿論だ

お前も絶対決勝に来いよ

「ああ」

遊輝

お前もデュエルがんばれよ

「負けたぜ

また位置から計算しなおしだ

いつかお前を超える9番目のテッキを作れるよつこな

「おひ、楽しみにしてるぜ
ガツチヤ」

「楽しいデュエルだつたぜ」

それで俺と三沢は握手をしたんだ

「遊輝

お前とのデュエルはまたの機会にな

「ああ

お前の8番田のデッキ楽しみにしてるぜ」

「わかつてるや

お前も次のデュエルがんばれよ」

そしてじぱりく時間は流れて

「それでは学園代表決定トーナメント第2試合を始めるの~ね
オベリスク・ブルーからは天上院明日香
オシリス・レッドからは石崎遊輝いっと」

「久しぶりのデュエルだな痴女」

「私は痴女じやないって何度も言つたらわかるの
いいわ、その減らず口を叩けないようにしてあげるわ」

「行くぞ!~」

「「デュエル!~」

ついして遊輝と明日香の「テュエルが始まったんだ

Side auto

第27話 融合封印 十代VS三沢=空氣（後書き）

次回は遊輝VS明日香です
楽しみにしてくれると嬉しいです

『カーボネドン』効果

効果モンスター

レベル1／光属性／ドラゴン族／攻撃力100／守備力600
自分の墓地にカードが10枚以上存在する場合、墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
デッキまたは手札から「ダイヤモンド・ドラゴン」1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

『リビング・フォッシュル』効果

装備魔法

自分の墓地に存在するモンスターを1体選択して発動する。
選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。
装備モンスターの攻撃力は1000ポイントダウンし、効果モンスターの効果は無効化される。
このカードが破壊された場合、装備モンスターを破壊する。

第28話 痴女との再戦 VS 明日香

時はさかのぼり

代表決定トーナメントについて聞いた日

Side十代

「「え、俺ら?」」

リアクションが遊輝とかぶつちまつたぜ

「やうなのニヤア」

三沢君と天上院君とトーナメント形式でデュエルして優勝した生徒がノース校とのデュエルに出場できるのニヤア

こいつはわくわくするぜ

代表になつてノース校とのデュエルに出たいぜ

「いいデュエルを期待してるニヤ」

授業が終わつた後

「すごいよアニキ、遊輝
学園の代表なんて」

「今までオシリスレッドから代表が選ばれたことはないんだなあ」

「えつへつへつへ」

「へええええ」

なんか照れるな
遊輝はなんかに感心してるな

「案外早く戦う機会が来たな?」

「ああ、あれから俺は田夜研究を続けてる
お前のE・HERO^{ハーメンタルヒーロー}デッキに対抗できる
7番目のデッキを」

もしかして

「やめたのか?」

「いや、だが『』HORLまあでには聞こゆわせるや」

「楽しみにしてるぜ」

「マジで楽しみにしてるぜ」

どんなデッキなのか考えるだけれどわくわくするぜ

「ああ、やして石崎遊輝

君に言つてなかつたが君と戦うための8番目のデッキも完成させ
みせる

君が使つあたりゆるデッキに対抗できるデッキをね」

遊輝にも下剋上?

いや、挑戦状?

あ、そんなんて言つんだっけな

忘れちまつたけどとにかく勝負だつてこいつがなことを叫つてゐる

「俺も楽しみしてゐるぜ」

遊輝も楽しみみたいだな

「7番田、8番田のデッキ一体どんなのだろ?」

「これねすじごテコヘルになる気がするぞ」

そうだな

すくなく樂しいテコヘルになる気がするぜ

「よしやつやへ帰つてデッキの調整だー」

「俺らはライバルだけど
お互いに頑張りうぜー」

「ああ、勿論だぜー」

お互に全力を出して頑張りうぜ、遊輝
俺は遊輝とそう言つて合つて別れたんだ

Side auto

Side 遊輝

十代たちと別れてからじまくへじたけど向こうつかな
デッキの調整つて言つても使つてデッキももう決めてる
あ、そうだ

「つあえずドローパンでも買いに行くかな
そつ思つてやつてきました購買部

「トメさん、これください」

「はいはい、これね

200DPだよ」

「これで支払つたつと」

「こつも買つてくれてありがとね

「それほどでもないですよ

わよひなら

「わよひなら」

そじどりでこれ食べよつかな
そつだ屋上に行こう
で、屋上に来たけどやつぱり

「いい景色だなあ
かなで奏、実体化して一緒に食わないか?」

『「つと、やうする』

そつ言つて実体化した『ユエルアカニアの制服をなぜか着た奏

かなで

「お前はどうでその制服を用意したんだ?」

「うーん、禁則事項です」

「やつかよ

あ、そういうえばレイちゃんと話してくるとそれをお前にフラグを立てたって改めて認識したけどお前は俺のどこが好きなんだ

俺、とくにフラグ立てるようなこと話してなかつたと思つナビ

ほんとに俺は何時
かなで奏にフラグを立てたんだ

「あひやー

レイちゃん言ひちやつたんだ

まあいいや、実はね

遊輝に力を注いでもらつて完全に精霊として完全に覚醒する前から多少は自我があつたんだ

それでいつも遊輝の姿見てたらかっこになあとか思つてね
見ているうちにそいつた憧れとかが

なんていふんだろ愛とかそういう感情に変わってきたつて感じかな

それは

どうやらそのフラグは回避しろといつんだ
絶対に回避不能なフラグだつたとは

「やつだつたのか

「遊輝は私のこと好き?..」

「え、いきなり何言つてるんだ?

好きに決まつてんだろ

外見もかわいいし

勿論、likeじゃなくてloveのほうで

「ありがと、私つい
だけど遊輝つてやっぱり女たらしだと思つんだ
こんなかわいい女子一人も捕まえてるんだもん」

おいおい

「自分で自分のこと可愛いくていつのまどうなんだ
ま、事実だけよ」

「ありがと
じゅ、わざ買つたパンでも食べる?」

「やうだな
ほい、クリーミーパン」

「ありがと

あむあむあむ、おいしいな、これ」

「やうか、よかつた

「じゃ、俺はこのホットドッグをパクッと食つますか」

「そつぱつて俺も買つてきたパンを食べ
食後

「じゃ、かなで奏

帰るから精靈化してくれないか?」

「うん分かった」

そつ言つて精靈化する奏かなで
じや、帰りますか

で、寮に帰つて夕飯の時間になつたから来たんだけど

「あのおつせん誰だ?」

そうなのだ、十代たちと一緒に変なおじせんがいるんだ
あれ、あんな生徒は確かにいなかつたはず
えつと誰だつたかな?

あ、そうだ

こんな時こそ地球ほしの本棚（弱）の出番じやないか
だけど、やつぱいいや
あいつらに直に聞こう

「十代、そのおつせんどうしたんだ?」

「遊輝か、この人万年落第生だしくてさ
一緒に飯でも食おうかと思つてさ
それよりもおつせん
早く食べないと」飯のおかわりなくなるぜ」

万年落第生つて

なんでこのおつせんが万年落第生に見えるんだ
どう考へても、そこまで落第続けてたら退学になるだり

「あ、ああ」

「おつせんもひょつと困惑つたよつて返事してゐる」

「『』の『』飯をそんなにしあわせに食べるのアーチだけだよ」

確かに『』の『』飯をそんなにおこしやつに食べるのアーチだけだな
俺なんか食べた後に

ダイオラマ魔法球生成で作った

トリコの食材が出る別荘とか

モンハンのモンスターが出てくる別荘とかに行つて

ジユエルミートやらチョコレートマートとか

アプロースの肉とかカジキマグロと黄金魚の刺身とか

よく食つてゐちゅうのに

「全くだよ」

「い、 いただきます」

おつせんも『』惑つてゐる
俺もそいつたと食つか

「よじ』』飯もつてつと
さすがにライバルだし少し離れた席で
いただきまーす」

まあ確かに『』まいんだけど

食べた後、 十代たちはおつせんを連れて部屋に帰つたんだけど

「さて十代が相手つてことは
クロノスがさせないと思つから
最初の試合はこいつかな」

そつと聞いて俺は一つのデッキを取る

「ま、弱点があるとすれば事故ったら負けるデッキとこうじただけでこのデッキでやりたいし」

これで行くか

じゃあ、十代用のデッキも考えないと

「十代を魔改造したら俺も勝てないことが結構あるようになってしまたからな

確実に勝てるシンクロ、エクシーズを使わないデッキにしないと」

「そうだなこいつがいいか

こいつなら十代にも勝てるだろ

「じゃあ、ちょっと出かけてくるかな

そつと聞いて俺は部屋を出る

校則でこの時間は外出禁止だがまあれなきゃいい

俺は廻寮に向かった

「ここへやん」

「よ、痴女

お前のアニキについて情報が入ったんだ

「痴女じゃないわ

それより兄さんの情報が手に入ったって本当なの

嘘つく必要ないだろ

「ああ

どうやら学園の上層部は海外への留学扱いにしてるらしい
ほかにも留学扱いの生徒が何人もいたが
そいつらも行方不明者だった
もしかしたら学園の上層部
しかも、鮫島校長よりも上の人間だつたら知ってるかも知れない
くらいしかわからなかつたけど」

これは本当の話だ
あの後思い出したんだが
名前は忘れたがあのおっさん
確かジャーナリストでこのコンピューターにハッキングしてた時
そんな感じのデータを手に入れてたはずと思つて探したら出るわ
るわ
明らかにおかしい留学生の数だったよ
まつたく

「それは
とりあえずありがとう」

「どういたしまして

それよりも明日は学園代表決定トーナメントだな
お前にもまた勝たせてもらうぜ痴女

「だから痴女じゃないわ
つていない、あいつ絶対にとつちめてやるんだから」

痴女がなんか言つてたが俺は無視して帰つていつたんだ

翌日の朝、食堂で

「 いつただつきまーす！

朝飯、朝飯米がうめえええ
おかげはめだかの黒焼きか

これもなかなか、むにやむにやむにや

おいおいめだかつて

「 アニキ、それはめぞしー！」

「 そりだぞ十代

ふつうめだかは食べねえぞ」

何を言つてゐるんだ十代
ふつうめだかは食わん

「 遊輝じやねえか

今日はお互ひ頑張ろうぜ

「 アニキに遊輝も

二人とも緊張感ないつすねえ

どういう意味だよ

「 「 なんだよ翔」 」

「 なんか気が立つてゐるんだなあ

全くだ

「何言つてるんすか

今日は代表決定トーナメントトつすよ
本当なら緊張して食欲ないようとか
はあ、昨夜は全然眠れなかつたよう
つてのが相場でしょ」

おいおい

俺はこの程度じや緊張しないし

十代に相場は求めちゃだめだと思ひ

翔、十代に相場を求めるな

ま、俺もこの程度邪緊張しないけれどな

「ま、遊輝の言つとおりだぜ翔
とにかく、テュエルの前は『つぱ』食べて力をつけなきやな

「アニキらしげや

そういえば、国崎さん

どうしてこいつちやつたんだろ」

あのおっさんのことか？

「国崎さんつて

あのおっさんのことか

「そりなんだなあ

国崎耕介さんつていうひらしいんだなあ

あのおっさん、国崎耕介つていうんだ

それから代表決定トーナメントまで特に何も無く進み

「シニヨールシニヨーラお待たせしたの～ね
ただいまから、学園代表決定トーナメントを始めるの～ね」

「わあわああああああああああ」

なんでクロノスの掛け声でこんなにぎやかになるんだ？

第一戰

テー・イエローからは三沢大地！

卷之三

「アーキーがんばってー！」

翔も応援してる

俺も決勝ではあいつと戦いたいし

「十代、俺と戦うまで負けんじゃねえぞー。」

「では、始めるのうね」

始まるようだ

「「デユエル！」」

そしてテュエルは進んでいき

「俺は超融合を発動

手札を一枚捨て俺のスパークマンと三沢
お前のウォーター・ドラゴンを超融合!」

物語後半で本来手に入れるカードだな
ま、そんなのどうでもいいけど

「なんだと!..」

「来い E・HERO アブソルートZero
アブソルートZero どどめだ

瞬間氷結 (Freezing at moment) ...」

「うわああああああああああああああ

1600 - 2500 = - 900

十代が勝ったか

次は俺の番だな

俺たちは十代のもとにに向かつた

「勝者オシリス・レッド遊城十代!..

おめでとう、次は決勝だ」

「やったアニキ!..」

「おめでとう!..」

「やったな十代、次は俺の番だな

決勝に俺も行つて見せるぜ」

「ああ、勿論だ

お前も絶対決勝に来いよ」

「ああ」

勿論決勝に行つて見せるぜ

「負けたぜ

また位置から計算しなおしだ

いつかお前を超える9番田のデッキを作れるようにな

「おう、楽しみにしてるぜ

ガツチャ」

「楽しいデュエルだつたぜ」

それで十代と三沢は握手をしたんだ

「遊輝

お前とのデュエルはまたの機会にな

「ああ

お前の8番田のデッキ楽しみにしてるぜ」

「わかつてゐや

お前も次のデュエルがんばれよ」

そしてじぱりく時間は流れて

「それでは学園代表決定トーナメント第2試合を始めるの~ね

オベリスク・ブルーからは天上院明日香
オシリス・レッドからは石崎遊輝いつと」

やつぱりおれもやる気のない紹介されたな

一久しぶりのテエエルだな痴女』

「私は痴女じやないって何度も言つたらわかるの
いいわ、その減らず口を叩けないようにしてあげるわ」

出来るならしてみな

行
く
そ
う
！」

テユエル！！

和のタンクトート

セカンドリバースカードを3枚セッティングします。

「次は俺のターンだドロー

俺は占い魔女ヒカリちゃんを攻撃表示で召喚する

かわいい

わこわく

「さらに速攻魔法、受け入れがたい結果を発動！」

このカードは占い魔女と名の付くモンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時

手札から一体の占い魔女と名の付くモンスターを特殊召喚する！
俺は手札から、占い魔女アンちゃんを攻撃表示で特殊召喚！

「攻撃力0を攻撃表示？」

「私をなめてるの？」

何を言つてるんだ

ここからは意外に恐ろしいやつらなんだぜ

「そして俺は永続魔法、開運ミラクルストーンを2枚発動
このカードが存在している限り、占い魔女と名の付くモンスターは
フィールドに存在する占い魔女と名の付くモンスターの数×100
0ポイント攻撃力がアップする
フィールドには2体の占い魔女、2枚の開運ミラクルストーン
よつて2体の占い魔女の攻撃力は4000」

「なんですって！」

「攻撃力4000が2体！」

「……………かわいい……………」

「」

「……………それこつよ……………」

「……………」

「俺は占い魔女ヒカリちゃんとで攻撃
ギガデイン

「ドラクエ！？」

「そうはさせないわ

トラップカードを2枚発動するわ

ドゥーブルパッセ スピリットバリア

ドゥーブルパッセは相手の攻撃をプレイヤーへのダイレクトアタックに切り替える

そして攻撃対象になつたモンスターは相手にダイレクトアタックができる

だけどスピリットバリアの効果により

私は私のフィールド上にモンスターが存在する限り戦闘ダメージをうけないわ

「なに！」

「エトワール・サイバーの特殊効果

ダイレクトアタックの時、攻撃力が600ポイントアップ

赤い痴女が迫ってきて蹴りやがった

つく

4000 - 1800 = 2200

「だけどまだ攻撃は残つてゐる

エトワール・サイバーを占い魔女アンちゃんで攻撃

ドルマドン！」

破壊される赤い痴女

攻撃反応型でなくてよかつた

「俺はリバースカード一枚伏せターンエンドだ」

「私のターンドロー

私はトラップカード リビングテッヂの呼び声を発動するわ
戻つてきなさいエトワール・サイバー！

更に融合を発動

エトワール・サイバーと手札のブレード・スケーターを融合
サイバー・ブレイダーを召喚するわ」

でたか痴女の親玉

「さらに私は強欲な壺を発動
2枚ドローするわ

そして死者への手向けを発動

手札を一枚捨て占い魔女ヒカリちゃんを破壊する
これであなたの占い魔女アンちゃんの攻撃力は2000
サイバー・ブレイダーで占い魔女アンちゃんを攻撃」

$2200 - (2100 - 2000) = 2100$

「私はターンエンドよ」

「ここが正念場かな

俺のデッキよ答えてくれ

「俺のターン、ドロー

俺は命削りの宝札を発動

手札が5枚になるようにドローする。」

「いいで強力なドローカードですって！」

なんて引きの良さ

「ひりに俺は占い魔女エンちゃんを召喚

次に一重召喚を発動し占い魔女スイーちゃんを召喚

そして魔法カード、幸運の前借りを発動！

自分の場の占い魔女と名の付くモンスター1体のLVより一レベルの低い占い魔女を

デッキもしくは手札から特殊召喚できる

俺はレベル4の占い魔女スイーちゃんより一つレベルが低い
レベル3の占い魔女フウちゃんをデッキから特殊召喚

そして強欲な壺を発動

最後だリビングデッキの呼び声を発動し墓地の占い魔女ヒカリちゃんを復活させる

その特殊召喚に対し2枚目の受け入れがたい結果を発動

手札の占い魔女チーちゃんを特殊召喚」

場の確認だ

占い魔女エンちゃん 5000 + 5000 = 10000

占い魔女スイーちゃん 5000 + 5000 = 10000

占い魔女フウちゃん 5000 + 5000 = 10000

占い魔女ヒカリちゃん 5000 + 5000 = 10000

占い魔女チーちゃん 5000 + 5000 = 10000

なんかうつ場だ
ほかの生徒も唖然としてる

「行くぞ痴女

占い魔女ヒカリちゃんとサイバー・ブレイダーに攻撃

ギガデイン

更に占い魔女エンちゃん、スイーちゃん、フウちゃん、チーちゃん

でダイレクトアタック

メラガイアー マヒヤデドス バギクロス イオナズン」

4000 - 10000 - 10000 - 10000 - 10000 =
36000

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「勝者オシリス・レッド石崎遊輝!!

おめでとう、次は決勝だ」

「やつたつすね遊輝」

「やつたな遊輝

だけど決勝では負けないぜ」

「それはこいつのセリフだ」

そして時間は経ち

「それでは学園代表決定トーナメント決勝戦を始めるの~ね
左からはオシリス・レッドの遊城十代いっと
右からはオシリス・レッドの石崎遊輝いっと

「行くぜ十代!」

「ああ、勿論だ!」

「「デュエル!..」」

そして俺たちのデュエルが始まる

第28話 痴女との再戦 VS 明日香（後書き）

占（うらな）い 魔女（まじょ） ヒカリちゃん
通常モンスター

レベル1／光属性／魔法使い族／攻撃力0／守備力0
このカードをドローした今日のあなたの運勢はスーパー・ハッピー！

ラッキーナンバーは1。

ラッキーカラーは黄色。

ラッキーアイテムは光るチャーム。

願いは何でも叶っちゃう！！

『占（うらな）い 魔女（まじょ） ヒンちゃん』
通常モンスター

レベル2／炎属性／魔法使い族／攻撃力0／守備力0

このカードをドローした今日のあなたの運勢はベリー・ハッピー！

ラッキーナンバーは2。

ラッキーカラーは赤。

ラッキーアイテムは金魚。

楽しいことがおきるかも

『占（うらな）い 魔女（まじょ） フウちゃん』
通常モンスター

レベル3／風属性／魔法使い族／攻撃力0／守備力0

このカードをドローした今日の運勢は、まあまあね。

ラッキーナンバーは、3。

ラッキーカラーは、緑。

ラッキーアイテムは、植物。

無くした物が見つかるかもよ。

『 占 (うらな) い 魔女 (まじょ) スイーちゃん』

通常モンスター

レベル4／水属性／魔法使い族／攻撃力0／守備力0
このカードをドローした今日の運勢は、ちょっと悪いかも。
ラツキーナンバーは、4。

ラツキーカラーは、青。
ラツキーアイテムは、傘。

東に向かうと運が向いてくるかもね。

『 占 (うらな) い 魔女 (まじょ) アンちゃん』

通常モンスター

レベル5／闇属性／魔法使い族／攻撃力0／守備力0
このカードをドローした今日のあなたの運勢は、アンハッピー。
ラツキーナンバーは、5。

ラツキーカラーは、紫。

ラツキーアイテムは、サングラス。
落し物に注意して！

『 占 (うらな) い 魔女 (まじょ) チーちゃん』

通常モンスター

レベル6／地属性／魔法使い族／攻撃力0／守備力0
このカードをドローした今日の運勢は、スーパーピンチ！

ラツキーナンバーは、6。

ラツキーカラーは、黒。

ラツキーアイテムは、革靴。

ライバルに差をつけられちゃうかも！がんばれ！！

『ドゥーブルパッセ』効果

通常罠

相手モンスターが自分フィールド上の表側攻撃表示モンスターの

攻撃対象になつた場合に発動する事ができる。

そのモンスターの攻撃は自分への直接攻撃になる。

その後、相手プレイヤーは攻撃対象となつたモンスターの攻撃力の数値分のダメージを与える。

第29話 激突する龍と英雄 ▶S十代（前書き）

やつぱりオリジナル成分が濃いと内容が短くなってしまう
そこが課題だけどオリジナルでは長い方かな

第29話 激突する龍と英雄 VS十代

Side 遊輝

「それでは学園代表決定トーナメント決勝戦を始めるの～ね
左からはオシリス・レッドの遊城十代いっと
右からはオシリス・レッドの石崎遊輝いっと」

「行くぜ十代！」

「ああ、勿論だ！」

「「デュエル！！」」

俺たちのデュエルが始まった

「俺のターンから行くぜ、ドロー
ヒューメンタルヒーロー
俺はE・HEROクレイマンを守備表示で召喚
リバースカードを2枚伏せターンエンドだ」

懐かしいな

初期の感じがするデュエルだな
俺も行かせてもらつぜ

「俺のターン、ドロー

俺は手札からフィールド魔法 カオス・ゾーン
さらに永続魔法、未来融合・フューチャー・フュージョンを発動
ファイブゴッド・エクラン
F・G・Dを指定し

デッキから融合素材のドラゴン族モンスターを5枚墓地に送る

いきなりフューチャー・フュージョンか

ラツキーだな

まあ、いつももこれくらいいくけど

「さらに今デッキから墓地に送られたエクリプス・ワイバーンの効果発動

このカードが墓地に送られた時

デッキから光もしくは闇属性のレベル7以上のドラゴン族モンスターを除外する

俺はデッキからレベル7の光属性ドラゴン族モンスター

フォトン・ワイバーンを除外する

この時、混沌空間カオス・ゾーンの効果が発動する!」

「なに!」

「こいつは最近、神からもらつたカードだからな

別の世界で新しく最近生み出されたカード

そいつらをデッキに入れて戦つている

「混沌空間カオス・ゾーンの効果

モンスターがゲームから除外されるたびにこのカードにカオスカウンターを一つ乗せる

さらに手札のライトパルサー・ドラゴンの効果話発動

墓地の光属性モンスターと闇属性モンスターを除外することでの

このカードは手札から特殊召喚する事ができる

俺は墓地の光属性エクリプス・ワイバーンと

闇属性レッドアイズ・ブラック・クド・ラゴン真紅眼の黒龍を除外しこのモンスターを特殊召喚する

来い、ライトパルサー・ドラゴン!..」

「いきなりライトパルサーが
なかなか本気だな、遊輝！」

「ああ、勿論だ

俺が手を抜いたことなんかあつたか？」

「無かつたな

お前はいつも全力全壊だつたな」

おいそれじゃあ

「おい十代

俺はどこの管理局の魔王だ

まあいい、混沌空間カオス・ゾーンの効果でカオスカウンターが一つのる
そして、除外されたエクリプス・ワイバーンの効果を発動
このカードが除外された時このカードの効果で除外されたモンスターを手札に加えることができる

俺は除外されていたフォトン・ワイバーンを手札に加える
行くぞ、十代

俺はライトパルサー・ドラゴンでクレイマンに攻撃
パルスマストリーーム！

通らないだろうが

除去カードが少ないこのデッキだ

トラップは早めに発動させとかさせてもらひついで

「そうはさせないぜ

リバースカードオープン ヒーローバリア
ライトパルサー・ドラゴンの攻撃を無効にする

たぶんもう一枚はもつと強力な除去トラップだろ
ミラフォとかかな

「俺はリバースカードを一枚伏せターンエンドだ!!」

「なかなかやるな遊輝

俺のターン、ドロー!

俺は融合を発動

手札のE・HERO スパークマンとE・HERO ハッジマンを
融合

来い E・HERO^{H・メンタルヒーロー} プラズマヴァイスマンー!!

プラズマヴァイスマンか

あいつの効果でライトパルサー・ドラゴンを消してダイレクトアタ
ックか?

「俺はプラズマヴァイスマンの効果を発動するぜ
俺は手札を一枚捨てライトパルサー・ドラゴンを破壊する」

予想通りだな

「そりはさせない

俺はトランプカード 竜の転生を発動

このカードの効果によりフィールドのライトパルサー・ドラゴンを
除外し

手札からドラゴン族のフオトン・ワイバーンを特殊召喚する

これによつてプラズマヴァイスマンの効果の対象はいなくなり
その効果は不発だ!」

「なんだつて!!」

「さらにフォトン・ワイバーンの効果発動
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時相手フィールド上のセットされたカードを全て破壊する
フォトンサイクロン！」

十代の伏せカードが破壊されるつて
やつぱりミラフオか

ミラフオは失敗フラグなんだが

「そして混沌空間にカオスカウンターが一つのる

「だけど、フォトン・ワイバーンよりプラズマヴァイスマンのほうが攻撃力は上だぜ
プラズマヴァイスマンでフォトン・ワイバーンに攻撃
ヴァイススパーク！」

$$4000 - (2600 - 2500) = 3900$$

「つか」

「俺はターンエンドだぜ」

「俺のターンエンドロー

俺は手札から天使の施しを発動

3枚ドローし2枚捨てる

俺は手札から竜の鏡を発動

墓地の5枚のドラゴン族を除外し

ファイブゴジア ドラゴン

現れよ F・G・D

さらに5体のモンスターが除外されたことにより

混沌空間にカオスカウンターが五つある
そして混沌空間、第一の効果を発動

自分フィールド上のカオスカウンターを四つ以上取り除くことで
取り除いた数と同じレベルを持つゲームから除外されているモンスター一体を特殊召喚する

俺はハつのカオスカウンターを取り除き
除外されている銀河眼の光子龍を特殊召喚！

このターンで終わらせてももう十代

「さらりに融合を発動フィールドの銀河眼の光子龍と手札の銀河眼の
光子龍を融合

来い ツイン・フォトン・リザードを特殊召喚

ツイン・フォトン・リザードの効果発動

このカードを生け贋に捧げ

このカードの融合素材にしたモンスター一組を自分の墓地から特殊
召喚する

現れよ2体の銀河眼の光子龍！！」

F・G・Dを挟むように現れる2体の銀河眼の光子龍

これで決まりだ

「F・G・Dでプラズマヴァイスマンに攻撃
殲滅のゴッド・ストリーム！！」

4000 - (5000 - 2600) = 1600

「さりに一体めの銀河眼の光子龍で
クレイマンに攻撃

破滅のフォトン・ストリーム

碎けるクレイマン

「そしてどじめだ

2体目の銀河眼の光子龍で攻撃

破滅のフォトン・ストリーム！！」

1600 - 3000 = - 1400

「うわああああああああああああああああああ
つく負けたぜ

だけど…」

「ガツチャ

楽しいデュエルだつたぜ」

「俺のセリフとるなあああ

「勝者 石崎遊輝

おめでとう、君が我がデュエルアカデミアの代表だ

「遊輝

俺の分まで代表戦頑張ってくれよ」

「勿論だ！」

その後俺は寮に帰つて行つた

今日は十代たちとパーティーだ！

「くうう、俺がなれなかつたのは悔しいけど

遊輝、絶対代表戦勝でよ」

「やうすよ遊輝

アーキに勝つたんだからきっと代表戦も勝てるっすよ」

「ああ、当然だろ

お前に勝つたんだ、絶対にお前の分も戦つて勝つてくれるよ」

「約束だぜ

じゃあ今日はパーティーだ

遊輝も食えよ」

「ああ、ってこれ俺が用意したんだろうが
勿論食いつにきまってるだろ」

「やうだつたけ、まあいや
とにかく食おうぜ」

みんなで騒いだり食つたり飲んだりして楽しいな
ちなみに並んでるのは

ココットライスと竜の卵

それにモズボークとオニオニオンで作ったチャーハンと

サシミウオやカジキマグロ

フグクジラやマーメイマグロの刺身とかだ

特にフグクジラの調理には本当に気を使つたぜ
ほかにもスープやらサラダとかも作つた

まあ一人でだけど

さすがにあの食材は見せられん

「とにかくどこでこんな食材を手に入ってきたツすか?」

「禁則事項だ」

「いいじゃないつすか
それくらい教えてくれても」

「禁則事項だ」

「言えるか

言つても信じねえだろ

「ケチ」

「ケチで結構

覚める前に食おうぜ

「そうなんだなあ翔

覚める前のほうがあまいに決まってるんだなあ

そんな感じで時間は過ぎていき
パーティーもお開きになつた後

「国崎さんでしたよね」

「あ、お前はあの時の
ちよつといい、実は俺…」

「いいですよ、知つてますから
ジャーナリストの国崎さん」

そう、俺はあの「おつかれ」と国崎耕介に会いに来ていた

「俺のこと知つてたのか

だったらなんで俺のことを黙つてたんだ?」

「あなたが悪い人に見えなかつたからじゃダメですか」

「お前も変わつたやつだな

だけどだましていたことに変わりはねえ

すまなかつた

お前たちのデュエルを見て俺も思い出した

昔はこれでもデュエリストを目指して世界を渡り歩いたこともあつたんだ

だけど、世界の強豪たちの前に敗れ
夢を捨てて

今じゃジャーナリストとは名ばかり
金になれば汚いことも平氣でやつて
だけど、もう一度言うがお前らのデュエルを見て
お前らがあれだけ熱くなれるデュエルを
夢を諦めて逃げ出した俺に取り上げる権利はないって気付いた
そして、俺ももう一度やつてみたくなつた
今度こそ本当の正義の追求つてやつをさ

「国崎さん

あなたはやっぱりいい人だ

「こいつを記事にするのはやめだ

お前らと初めて会つた夜

お前のことをつけた廢寮に行つたんだよ

そのあと調べたんだ

だが、俺なりに眞実を調べてみる

何かあつたら知らせるよ

「ちょっと待ってくれ

俺も個人的に同じことを調べるのを頼んでるやつがいるんだ

俺とそいつの連絡番号を渡しておくから

たまに連絡をくれないか

「わかったよ

俺の連絡番号も渡しておくれ

いつでも連絡してくれ

「じゃあこれが俺とそいつの連絡番号だ
お前の」とかそこには俺から言つておへ
「へおへり言つておへ

「分かった、あばよ

「じやあな、国崎さん

そう言つて俺と国崎さんは別れ俺は寮に帰り眠つたんだ

ま、翌日の夜もライネスたち精靈組とパーティーをしたのは割愛する

第30話 もけもけの力 VS 茂木もけ夫（前書き）

少し第22話に書いたモンスター・テキストを修正しました

第30話 もけもけの力 VS 茂木もけ夫

代表決定トーナメントの翌日

Sideクロノス

「ブブ～ンチヨ、チヨコブリ～ン、チヨコアラモ～ド
つたく、あの石崎遊輝が我が校の代表だなん～て
ほんとに決まったの？
決まつてしまつた～の
ノン、ノン、ノン、ノン
まだ奥の手があるの～ね」

そうなの～ね

私には最終手段があるので～ね

「デュフフ～
一、二、三、四（ス～）
つてそれ中国語

よいしょ失礼しますグラッヂェ」

あれはこの養鶏場の下にあるの～ね

「ゴケー！」

「ゴケー！...」「

「ゴケー！...」「

「な、ななななな！！」

「『ニケー！』」

「あー！あー！

頭立せめての!! 頭立せめての!!」

確かこの砂場だつたはずなの、ね
早く入らないと危ない、の

「それいじあなたが、閉められたるのよこしま」

コケ！

また来たの

「やめて～の～！～ほんと、頭だけは～！～勘弁してくださいよ～！～」

ドーン！！！

落ちた～の！お尻痛い～の！！

「 「 「 ハー ハケケケ ! ! ! ハー ハケケケ ! ! ! ハー ハケケケ ! ! ! 」

「私が卵泥棒なわけないじゃ無いの～よ～～」

「の～ほれ！～！」

扉閉めてつと

これでやつと落ち着ける～の

「ひどい日にあつたの～ね

私は鶏なんかに構つてる暇ないの～に
グラッヂエ、グラッヂエ、これこれ」

これを着て～の
準備完了なの～ね

「石崎遊輝イ～い

私はあなたのおかげ～で、またこのパンドラの箱お～を開けねばならないの～ね
遊城十代、あなたも一緒に潰してあげる～の
よつ～いらしょか

カードを通して～の
電子ロックを開けて～の

「しかし、どんなに恐ろしい結果になら～と
最後に残つてるのは希望
パンドラの箱に～は必ず最後には希望が入つてゐるの～ね
ぬつはつはつはつはつはつは
さあ、出でおいで～の～～～」

これであの一人も終わりなの～ね

Side auto

Side 遊輝

「よし、これでこのデッキの完成だ」

「いやいや、ここはウォーター・ドラゴンを入れよう
炎属性には圧倒的に有利だ」

「いや、もうデッキ出来たって」

「エトワール・サイバーも入れるべきよ
直接攻撃の破壊力が違うわ」

「だからもうデッキ出来たって」

「デス・コアもいいんだなあー」

「いや、だから」

「あのお、僕のパワー・ボンドも」

だからあ

「ああもう

だからデッキは出来たって

「そうだぜみんな

遊輝はもう「テッキ」出来たって

「十代の言つとおりだ

俺はもう「テッキ」出来たんだから邪魔すんなよ

「何も邪魔をしているわけじゃない

今度の「デュエル」は学園の名誉をかけた戦いだから俺たちも一緒に戦うつもりで

それってただ自分のカードを使ってほしいだけじゃ

「そうよ、学園のためなんだから」

「冗談じゃない

俺は学園のために「デュエル」してんじゃねえ

「そうだ、これは遊輝の「デュエル」なんだ
遊輝は楽しむためにやつてんだよ」

十代

「十代の言つとおりだ

俺は俺のためにやつてるんだ

「分かるぜ、その気持ち

「デュエル」は人のためじゃない

自分のためにやつてるんだもんな

「うんー。」

やつと分かつてくれたか

「だが遊輝、俺のウォーター・ドラゴンを入れてくれないか？」

「パワー・ボンドも！…！」

「ブレード・スケーターも」

「デス・コアラもいいんだなあー」

「だから俺はもうゲッキ出来たって
十代、俺の味方はお前だけだ
一緒に逃げるぞ！」

俺は十代の手を掴みひつぱつて逃げる
ただ、何か忘れている気が

「ああ、逃げた！」

「ああ、待て

俺のウォーター・ドラゴンを！…」

「ヒトワール・サイバーは？」

「あっちだ！…！」

「僕のパワー・ボンドオーー！」

お前ら

「十代ビツビツこけぼすことと思ひへ。」

「屋上に行けばいいと思つぜ
俺のとつておきの場所なんだ」

「屋上か

俺もそこは好きだな、まあいい早く行こ

「おーい遊輝ーー！」

「エトワール・サイバーよーー！」

ほんとにあいつらは

「ほんとこなんだつちゅうんだ

「まつたくだぜ

お前はもひりッキ出来たって言つてゐるのになあ

とか言いながら屋上まで駆け上がる俺と十代
まつたく、それにしてもやつぱりこの展開
アニメで見たことあるような

「やつと着いた」

こんなに時間が長く感じたのは初めてかもしない

「やあ

青いぼろぼろのノースリーブのシャツを着たオベリスク・ブルーの

生徒が目の前に
あ、思い出した

つてことは問題ないか実体化、いや問題あるな

「なんで俺らしか知らないとつておきの場所にお前が??」

いや、ほかにも知ってるやつへりこーると思つが

「お天氣がいいからねえ」

「「お天氣?」」

いや、どうしたらその理由が応えられるんだ
なぜこの場所にお前がいるとこつ趣の質問でお天氣がいいからね
つて

「うーだとお日様がぽかぽか、雲がふかふか
何にもしたくなくなるよね」

「ああ、そうかあ?」

「俺としてはそつは思わないけど
まあ、昼寝するのには確かにいい場所だけど」

『クリクリ』

「あ? ハネクリボー?」

『ひんにちせ』

「^{かなで}奏も出てきたのか

「あ、それ？それってもしかして君たちの精霊かい？」

「あ？お前ハネクリボーが見えるのか？」

ま、記憶どりだな

「かわいいねえ、そっちの女の子の精霊もね
あ、そうか

君が遊城十代君、で君は石崎遊輝君だね

「なんで俺たちの名前を？」

十代、その質問は愚問だと思つぞ

「僕は茂木もけ夫

突然だけど遊輝君、デュエルしようよ」

ああ、俺が代表になつたから俺が先なのか

「いいぜ、そのデュエル受けて立つ
だけじ、どうして急に

さつきは何もしたくないつて言つてたのに？」

「それとは話が別

だってデュエルの精霊を知る人と一度はデュエルしてみたいじゃな
いか、ね」

そうゆうもんなのか

「じゅ、やひひ

じゅあせん…

「あ、アーチと遊輝…」

「やまつりにいた

「え、なんで」が分かったんだ？」

いや、いつも行ってるならわかると困つた

「だつてアーチ、授業サボると必ず」
遊輝だつていつも「に飯食に来てるじゃなつすか」

「どうしたんだ？」

「あいつとユーハルあることなつただけだけ」

「何？」 「ユーハルを？」

「あっこ、とかくへるや」

「うそ

「「ユーハル…」

「僕の先行でドロー

僕はもけもけを守備表示で召喚するよ」

『もけもけ』

「あ――――かわい――――」

翔と痴女一体何言つてんだか

「なあんか、のんびりしたモンスターだな

のんびりしたモンスターってなんだ

「そうね

なんかこっちまでのほほんとしちゃうわね

「胸がぽかぽかする

「あ、ああ

あれ?なんか眠くなつてきたんだなあ

「おい、みんなどうしたんだ?」

十代は何ともないな

それにして隼人だけこの反応つて

もしかして精霊が見える人には効かないけど
中途半端に精霊がわかる人には威力が高いのか

「僕はカードを2枚伏せてターンエンドだよ

「俺のターン、ドロー

まあいいや、今は目の前のことだけを考えよう

俺は翻弄するエルフの剣士を攻撃表示で召喚
そして手札からマジックカード 融合を発動
手札のバスター・ブレイダーと沼地の魔神王をブラック・マジシャンの代わりに融合
来い 超魔道剣士・ブラック・パラディン」

「あはははは
すごい遊輝君、さすがだな」

なんじゃそりゃ
なんか、調子狂うな

「なんか見ていろ」こちまで調子が狂うな

『クリクリ』

「確かにな

だがデュエルはデュエルだ

翻弄するエルフの剣士でもけもけに攻撃
神明流奥義 斬鉄閃

「僕はトラップカードをオープンするよ！！人海戦術！！
このカードは各ターンのエンドフェイズにそのターン破壊されたレベル2以下の通常モンスターの数だけ
デッキから同じレベルのモンスターを特殊召喚するんだよ」

「だけどバトルは続行だ！！
行け 翻弄するエルフの剣士」

翻弄するエルフの剣士がもけもけの上半身と下半身にサヨナラをさ

せると

もけもけは消えていく

「次だ

超魔道剣士・ブラック・パラディンでプレイヤーにダイレクトアタック
超魔導無影斬ちようまどうむえいせん」

4000 - 2900 = 1100

ブラック・パラディンがもけ夫の前に急に現れ攻撃をする
ありや瞬動か？

「うわあ

「カードを2枚伏せターンエンドだ」

「う、だけど

人海戦術の効果でハッピー・ラヴァーを攻撃表示で特殊召喚したよ
そして、僕のターンだからドロー
僕はもけもけを攻撃表示で召喚するよ」

『もけ』

「　　かわいい～～～～～」

もう隼人は寝そだから言つてないな

「もけもけいいな」

「私も『テッキ』に入れてみようかしら」

無理だ、やめとけ

お前の『テッキ』とは天と地がひっくり返つてもあわない

「いふと嬉しいかも」

「はあああ」

「お前、ほんとにどうしたんだよ」

全く十代の言うとおりだ
どうして、もけもけでこうなる
ってかどんな能力だ

「さりに、僕は手札から
怒れるもけもけを発動する
そしてハッピー・ラヴァーで翻弄するエルフの剣士を攻撃だよ」

「馬鹿な、翻弄するエルフの剣士のほうが攻撃力は上なんだぜ」

つち

「かまわない

ハッピー・バーニング!!」

おおい！

テキストに書かれたハートビームはどうした
そして、翻弄するエルフの剣士

ビームを切つたら相手にビームが向かっていくってなんだよ

1100 - (1400 - 800) = 500

『あーあーあー！ふふふふふふふ』

「　　きやあ-----」

おじつた顔もまた可愛い-----」

「欲しいなあ、もけもけ」

「いいよねえ」

「おまえらなあ」

十代、やつぱり俺の味方はお前だけだ

「しかし、このとき

悪いけど、マジックカード 怒れるもけもけの効果が発動するよ
もけもけがフィールド上に存在しているときに、僕の天使族モンス
ターが破壊された場合

このターン、もけもけの攻撃力は3000に上がるんだよ」

「3000があ～～～」

「もけもけちやんつてすゞお～～い」

「かつじこ～～～～」

ですか？

『 もけえ――――――――――』

「 「 「 「 「すいせー―――い!かわ」」ここ――――――――――』

「 攻撃力3000のもけもけかあ

「 「 「 「 まつまつまつま」」

「 おまえらなあ、じいじの応援してみただよ

「 おまえらなあ、じいじの応援してみただよ

十代、よく言つてくれた

「 セリヤあ・・・

どつちでもなこよお

ズコオオオン

俺と十代はひりくつ返る

なんでやねん、どう考へてもお前もけの心援してみじやん

「 あのいいかな?

あの僕はもけもけでブラック・パラティンを攻撃したいんだけど

「 よくないかな

俺はトラップカード発動 ガード・ブロック

今回の攻撃でのダメージはなくなり、俺はカードを一枚ドローする

「 だけど、ブラック・パラティンは破壊をせてもひりくつ

いけえもけもけ

『もけもけーーもけもけーー』

「もけもけ」

お問い合わせ

「おおべりなあーー。」

「世にとてお歸り」

「まだよ

僕は手札から速攻魔法 神秘の中華鍋を発動するよ
これはフィールド上のモンスターを一体生け贅に捧げることで
そのモンスターの攻撃力か守備力を選択し
その数値分のライフを回復させるカードだよ

攻撃力3000分のライフを回復するよ

人海戦術の効果を発動

僕は「わを守備表示で特殊召喚するよ」

$$500 + 3000 = 3500$$

「「はにわ?」」

はにわつて
おいかー
ーめおー

「うん

はにわだよ」

「「はにわだ」」

「おおーーー遊輝」

「なんだ」

「頑張る」となごやお

「お前、それ本気で言つてんのか

「わうよ、戦には良くないわよ
ペースで行こうねえ」

「もけもけのやつ」

「ねえいなあ

「「「もけもけ」」」

「十代、もつ何を言つても無駄だ
無視するから気とするな」

「だけど

「されば」

「あ、あはははは」

「だから無駄だよ

こいつらに今何を言つても無駄だ」

「ほんと、なんなんだよお」

「もけもけー」

「　　もけもけ――――――」

「もけもけー」

「　　もけもけ――――――」

「もけけのけ――――なの――ね
ひよい、いひひのひ――

驚きました？

ドロップアウトボーアイズ、石崎遊輝、遊城十代
これが茂木もけ夫の脱力デュエルなの――ね

変な服を着たクロノスが現れた

「脱力デュエル？」

命名單純すぎんだろ

「そりゃ、シニヨール茂木は三年前

学園の誇るナンバーワンデュエリストだったの――ね――！」

相手の戦術、伏せカードの読み

全てにおいて彼は天才的デュエリストだったの～ね」

「ナンバーワンデュエリスト?」いつが

十代、戦つてみたって顔になつてるぞ

「しかあーーし!!

ある日を境にシニヨール茂木のデュエルが変わってしまったの～ね」

「デュエルが変わった?」

「そつ、彼と対戦したデュエリスト全てがやる気をなくし
学園を辞め、島を去つてしまつたの～ね」

「やる気をなくした?」

東方風に言つと

相手のやる気をなくす程度の能力か

「「「もけもけ~」」」

「よく分からんんだけど、もけもけと出合つてから
みんなこうなつちやうんだよね」

「とにかく

シニヨール茂木の力に気付いた我々は
学園のため、そしてデュエリストのため!!
彼を離れたところ

つまり、シニヨール茂木専用の寮に入れたの～ね」

「ひでえ」としゃがる

「全くだ

人間のことなんだと思つてゐんだ！！」

ほんとに

この学園の人間は

「ノン、ノン、ノンカンビ～ナ
何を言つの～ね

そこは天国！！茂木もけ夫だけの超豪華施設なの～ね」

「だつたらなんで出てきやがつた？」

「十代の言つとおりだ
デュエルなんてしたくないだろ」

「うん、でもクロノス教諭から君たちのことを聞いて
ある予感がしたんだ
ひょつとして君たちは僕と同じように
デュエルの精靈を扱えるんじゃないかってね」

精靈を扱う？

「精靈？」

「僕はねえ

君たちの可愛い精靈たちをデュエルから解放したいんだよ」

『クリクリ！』

あいつは

何を

クリクリ

ふれ玉たまごの形でんじきねえ」

私は遊輝と一緒にして楽しんだから』

ケリケリ

一 残念たけど

俺と一緒にデュエルできることを「俺の木村も楽しかった」と言っていた

「そ、うかなあ？」

—俺のターン……ロード!!

はにわを攻撃

秘劍 ツバメ返し」

振られた剣から三つの斬撃がはにわに向かって飛び
はにわを切り裂く

「そして、ほんぶつ翻弄するエルフの剣士でプレイヤーにダイレクトアタック
神明流奥義しんめいりゅうおうぎ 斬鉄閃せんてつせん！」

3500 - 1400 = 2100

「そしてターンエンドだ」

「じゃあ僕も

人海戦術の効果でハッピー・ラヴァーを攻撃表示で特殊召喚するよ

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっとまっちょーれ……！」

ドロップアウトボーアイズつたらまだ

やる気満々じゃないの～よ

なぜ？どうして？おせーーー

なんであいつらみたいにもけもけになっちゃわないの～ね
何故な～ぜ？どうしてなの～ね？」

当たり前だろうが

そんなもんで俺の、いや俺たちのやる気が削げるわけねえだろ？が

「僕のターン、ドロー

僕は強欲な壺を発動

それによりカードを2枚ドローするよ

さらに僕は手札から闇の量産工場を発動し

墓地から通常モンスターを一体選んで手札に加えるよ

『もけ』

『もけ

『もけ

「そして手札のもけもけを合わせて三体融合して」

「ええ

「うわあ——」

『キングもけもけ～～』

「――でかあ！――」

なんじやこつやあ
でか過ぎるだろ

「キングもけもけ！――

キング・もけもけ・ウーブでエルフの剣士を攻撃して！――」

『キングもけもけ～～～』

「怯むな！――

ツバメ返しだ！エルフの剣士！――」

2100 - (1400 - 300) = 1000

キングもけもけから3体のもけもけが落ちてくる

「キングもけもけの効果を発動するよ
キングもけもけが破壊された時
自分の墓地に存在するもけもけを可能な限り特殊召喚する事ができる
る」

「「また?」」

またかよ

『『『もけもけ～～～』』』

うわ、クロノスの来てた変な服の顔の部分だ砕けた
なんちゅう威力や

「僕はハッピー・ラヴァーでエルフの剣士を攻撃するよ
ハッピー・ラヴァー!! ハッピー・バーニング!!

だからハートビームはどうした

「無駄だ」

$1000 - (1400 - 800) = 400$

三体のキレるもけもけ

だが

「この瞬間

怒れるもけもけの効果が発動
天使族モンスターが破壊されたことにより
もけもけの攻撃力は…」

「また3000か、遊輝」

「大丈夫だもけもけ一号でエルフの剣士を攻撃」

「つく」

$$4000 - (3000 - 1400) = 2400$$

「もけもけ一号ともけもけ三号で翻弄するエルフの剣士に攻撃」

「そうはさせない

ガード・ブロックを発動
もけもけ一号のダメージを0にして一枚ドローする

「だけどもけもけ三号の攻撃は当たるよ」

$$2400 - (3000 - 1400) = 800$$

「人海戦術の効果により

僕は再びハッピー・ラヴァーを守備表示で特殊召喚
さらに、トラップカード ホーリーエルフの祝福を発動
フィールド上のモンスター一体につき300ポイントライフを回復
する」

$$400 + 300 \times 4 = 1600$$

「まだまだあ！！！」

「俺のターン、ドロー」

「あれおかしいな？どうしてだろ？
なんでもまだやる気があるんだ？」

「当たり前だろ
こんな楽しいことやつてゐるのにあぐびしてゐる暇なんか遊輝にも俺に
も無いつちゅうの」

「その通りだ

俺はビッグ・シールド・ガードナーを攻撃表示で召喚
さらにシールド・クラッシュユを発動
ハッピー・ラヴァーを破壊」

「怒れるもけもけを発動
もけもけの攻撃力は3000になる」

「そんのかんけえねえ

俺は強制転移を発動

このカードの効果により俺はビッグ・シールド・ガードナーを選択
する

お前のフィールドにはどつちこしるもけもけだけだけ
もけもけでビッグ・シールド・ガードナーにもけもけウェーブで攻
撃」

「えーーー

（もけもけがあんなにやる気を出している）

1600 - (3000 - 100) = -1300

「うわあああ

「いいデュエルだつたな

お前も結構熱くなつてたじやん」

「これでも楽じゃないんだ

力を抜くのもね」

「分かるぜ

デュエルつてちつとく樂しいからな」

「確かに十代の言つとおつすつとく樂しいもんな

「たまには痴のように勝負に拘るのもいいもんだな」

「「だね」」

「でも今は、頑張りすぎたんで眠くなつてきちゃつた
おやすみ」

「「え――――――――!」」

お前はのび太か

「もう、なんでこうなる

十代、お前はももえヒジュンコ呼んでくれ

痴女を運ばせる

こつちは大原と神楽坂と大徳寺先生を呼んで
クロノス先生と三沢ともけ夫を運ぶのを手伝つてもらつ
呼んだメンバーが来たら俺が隼人、お前が翔を運んでくれ

「ああ、分かつた」

これからしばらくして来てくれた仲間にお礼を言いながら
俺らも隼人と翔を運んだあと寮に帰つたんだ
俺は昨日の夜と同じようにそのあと俺の精霊たちとパーティーを開
いた
それから眠つたんだ

第31話 頂を目指す雷 万丈目VSノース校オールスターズ? (前書き)

メリーカシミマース

わつはつはつは

なんだかんだと聞かれたら

答えてあげよう! 明日のため

フューチャー 黒い未来は独身の色

ユニバース 白い世界に正義の爆破

我ら未来にその名を記せない

恋仲の破壊者、ダイナマイト

独身の純情、ホース

無限の欲望、GMS

さあ集えR (リア充抹殺) 団の名のもとへ

(すいません

リア充に対する恨みとか

風邪気味の体調のせいで変なテンションになつてます)

第31話 頂を目指す雷 万丈目VSノース校オールスターズ?

Side万丈目

今俺はどこかの海にいる
霧に包まれ、此処が何処かなんて分からん

「クロノスめ
三沢大地め
遊城十代め
石崎遊輝め」

今でも思い出す
あの忌々しいやつらのことは

「ガツチャ楽しいテュエルだつたぜ」

遊城十代の幻覚が俺に声をかけてくる
本当に五月蠅い
負けたらこつちは終わりなんだよ

「五月蠅い!!

勝ちや楽しいだろつよ、何がゲロッパだ」

「言つてない、言つてない」

ふざけやがつて

幻覚の分際で俺を侮辱しやがつて

「もう一度

もう一度戦えば必ず、俺が勝つ……」

「無理だな、今のお前じゃ

俺にも十代にも勝てねえよ

今度は石崎遊輝の幻覚が侮辱してきやがった

「……」

俺はデュエルディスクで幻覚に攻撃をする
そうすると一人の幻覚は消えていく
だが、デュエルディスクの電源も切れ
赤く点滅し機能が停止してしまう

笑うしかないな

「ふつはつはつはつは

俺はペットボトルを取って水を飲むが

「この水で最後か」

「なあ、万丈目

早く帰つてこいよ

ふざけるな

「この俺とデュエルしようぜ」

お前とのデュエルに負けたから

石崎遊輝とのデュエルに負けたから
三沢大地とのデュエルに負けたから
俺はあの学園を出てこなくなったんだろうがーー！

「五月蠅いーーーー！」

俺は幻覚に向けてペットボトルを投げ

「ああーーーー！」

しまった、最後の水があ
俺は急いで水の入ったペットボトルを取るつもりするが
海の中に落ちてしまつ

「こやうだい（十代）、（元）やうつき（遊輝）
ぜつちやこちやおしてこやるー（絶対倒してやるー）（ひるせん）」

不味い

息が出来ない

俺はこのまま死ぬのか

そう思った時俺は意識を失った

『アニキ、アニキ』

う

『アニキ、アニキ
気が付いてくださいよ』

「ひ、ひひ」

『アニキイ〜〜

アニキつてばあ〜〜』

「あ、あ

此処は

「気が付いたか?」

「此処はどこだ?クジラの腹の中か?」

なんだ?こいつは

昆布お化けとでも言つべきよつなものが俺の田の前にいる

「誰だ貴様、いつたい何者だ?」

「はつはつは

わしの名前などどうでもいい
お前、デュエルリストなのか?」

あの昆布お化けが持つてるカードは、まさか
デュエルディスクを見てもデッキがない
やはり

「そのカードは俺のデッキか?

返せ、昆布お化け! !

「残念だが、びしょ濡れですべてダメになってしまった

そつまつて俺のデッキを水たまりに捨てただと

「この爺ー。」

殴りかからうとしたら畠布お化けが俺にカードを一枚投げてきやが
つた

何のつもりだ

「そのカードはわしからのプレゼントじゃ

「プレゼントだと？」

おジャマ・イエローだと
俺が邪魔者だとでも言いたいのか

「なんだ? このカードはーー。」

「こひーーー何をするーー。」

そのカードを捨てる後悔するぞーー。」

俺がおジャマ・イエローのカードを捨てようとしたとき畠布お化け
が急に大声を上げて俺に後悔するぞと言つてきた

一体何のつもりだ

そして、どうこう意味なんだ

「どうこう意味だ?」

「お前は強くなりたい、強くなりたい

とつなされておつたが?」「

「うなされていた? 僕が?」

「クロノとか、三沢とか、十代とか、遊輝とか言つておつたが

クロノ?

クロノス教諭のことか
うなされていたとはいえそんなことを言つとは

「俺様としたことが

「お前は本当に強くなりたいのか?」

「えへへへへ
言つたる、この学園で一番は俺だつて
今でもそんなことを言つ十代の声や
「今のお前じや俺らには勝てねえよ」
こんなことを言つ遊輝の姿が頭をよぎる
俺はあこづらを叫きのめすための力が欲しい

「当り前だ!

力を望まん男がどっこいる」

「その努力をする覚悟があるのか?」

「努力だと! 貴様誰に向かつて!
俺は万丈目 準! 万丈目さんだ!」

努力など下らんものは当の昔に溝に捨てたわ

「ふつふつふつふつふ

努力は嫌い、だが強くなりたい

呆れ果てたやつ

が、まあいい

お前には人と違った能力があるようじや
いい場所に連れて行つてやる」

なんだ

急に上から水が

「うわ、あ、ああ、うわ」

「しつかりやるんじやぞ」

つく

水面から出されたと思つたりビンかにたたきつけられた

「昆布お化けめ、無茶苦茶やりやがつて！」

次あつたら覚え…

此処はいつたい

「此処はいつたいどこなんだ？

あの建物は？

ふ、爺め！俺様を試す気か？

よからう、この万丈目 準を舐めるなよ

俺は建物のほうに向かつて歩いていく

俺は気付かなかつたがこの時何者が俺を見ていたんだ

「此処はいつたいどこなんだ？」

あの建物は？

ふ、爺め！俺様を試す氣か？

よからう、この万丈目 準を舐めるなよ」

お前なんて汚く舐めるかよ
俺は今、万丈目をつけている

理由は何となくというのと渡しておきたいカードが一枚あるからだ
まあ、あいつがカードを集めてからだけどな
ノース校のほうに向かう万丈目を俺は追いかけた

万丈目のあとを追つてノース校までたどり着いたのだが
なんだ、あの馬鹿でかい木製の扉は

「開けろ！おい誰かいないのか？開けろ！」

「無駄だ

此処はデュエルアカデミアノース校
その門は40枚のカードがなければ開かない」

どんな門だよ

最新式のセンサーでもついているのか？

「此処はノース校

俺はここに来るまでにテッキを失くしたんだ」

失くしたというよりおり失つたじゃないか
同じか

「扉は40枚のカードがなければ開かない
それが此処の入学条件だ」

「ふ」

お前もそうのんきではいられないぞ

万丈目

「だが、入る方法はある
この学園の周りのクレバスや洞窟にはカードが隠されている
それを見つければいい、でなければ私と同じ運命だ」

演技がうまいなあのおっさん

少し見習うか？

それにしても万丈目はどうしてこんな寒い場所で濡れた服を着て大丈夫なんだ？
俺でも結構きついぞ

「お前、それは？」

万丈目がおっさんのデュエルディスクを見てカードに気付いた

「このデッキには39枚しかない

これだけ集めるのにわしは体力気力を全て使い切つてしまつた」

そうは見えないが

「ふん、要はただの脱落者が
ならば、爺

これでそのカードを売れ」

そう言って緑色のカードを出す万丈目

あいつは馬鹿か

この環境で金なんかあつたって無駄なことも分からぬのか?

「嫌だ! これは私が生きた証なんだ!

お前はそれを奪うといつのか?」

「まあいい

自分の事は自分でやる」

昔の万丈目だと言わないことだな

この時点で多少変わり始めていたのか

「氣をつける

強いカードはより険しい場所にある」

そうして万丈目はカードを探しに行つた
じゃ、此処からは俺の番か

「これで一息か

わしも少し休憩できるな

「その前に一ついいか

「誰だ! お前は?」

いきなりだな

「俺は『デュエルアカデミア』本校の生徒
訳があつて顔は出せないが一ついいか?」

「本校?

偵察にでも来たのか?」

「ちげえよ

万丈目のことを頼む、それだけだ
あいつに渡したいカードも三枚あるからな」

「ふん、よかねえ

「では、俺は万丈目の様子でも見させてもいいよ」

そう言つて俺は去つて行つた

ちなみに俺の姿は黒いフードをかぶつて顔を見えなくしてあり
声は変声魔法をかけて変えている

さあ、万丈目

お前が変わるとこ見せてもらひ

Side auto

Side万丈目

爺と別れてから俺はあつちうのカードを探した
時には氷壁を上り
時には泳ぎ

さまざま動物と戦いカードを手に入れた

見てるよ十代、遊輝

必ずカードを集めてデッキを作つてやる

俺は絶対にドロップアウトなんてしない

といつこの信念を貫くために

そしてカードを集めきりノース校の入り口まで戻ってきた

「まだ居たのか、爺？」

あの爺、まだ居たのか
さつさと帰ればいいものを

「おお！帰つてきおつた
カードを40枚集めたのか

「ああ、北海のシャチと戦い（逃げただけだが）
果てしない断崖を上り（果ては見えてたか）
白熊と戦い（子供だつたが）
吸血蝙蝠と戦い（これも逃げただけだが）
ついにそろえたぜ！」

「そうか、でははれて門の中に入れられるのだな
よかつた、よかつた
わしは君が去つた後にずっと後悔しておつた」

「後悔？」

「何をだ？」

「わしはあの時君にカードを渡すべきだったのだ

若い君はわしのよつになつてはならん
だが、君は無事に戻つてきてくれた

さあ、行きたまえ

扉は君を向かい出でるだらう」

爺

ほんとは40枚しかないが
俺も変わつたな

「爺、お前も一緒に行くんだ」

「え？」

「俺のカードを一枚恵んでやる
それで、お前も40枚カードが揃うんだらう」

「な、なんと
わしにカードを? だが」

「41枚カードを揃えたんだろう

勘違いするな、俺のデッキには不要なカードだ」

そうしておジャマ・イエローのカードを渡そうとするんだが
どうした、俺の手が勝手に

「なんだ、くれるんじゃないのか?」

「な、なんだ
この手が、勝手に」

『ねえねえアーチキ

なんでおいらを他人にあげようとするんだよ』

「なんだ、お前！－」

おジャマ・イヒロー？

「どうかしたのか？」

「見えないのか？」

「何がです？」

『アニキにしかおいらの姿は見えないよお』

「なに！－！」

それじゃ俺が痛いやつみたいじゃないか
しまった、この爺に痛いやつに見られてるんじゃないかな

『ねえねえおいらを他人にあげたりしないでよ

「じゃかしい」

『お願いだよお

おいらには本当の兄弟がいるんだ
一緒に探してくれよお』

「えっと、カードをやるんだったな

ほら

「ああ、ありがたや
あなたのお名前は？」

「俺の名前は万丈目
万丈目 準だ
爺、先に行け
俺は疲れた」

本当はカードが足りなくなつてしまつただけだが
俺も本当に変わつたな
昔だつたらこんな爺無視していたものを

「おお！ 万丈目さん
あなたは優しい人だ」

「五月蠅い、早く行かないと
カードを返してもらひやぞ」

「では、お先に
先に中で待つておりますぞ！」

俺は爺が座つていたたき火のところに行く
爺は先に入つたようだな

「畜生
一枚足りなくなつちまつたぜ」

「えへへへ
お前いいやつじやん

「十代の頃つとおりだ
変わつたじやないか」

「五月蠅い、ふ、こいつは」

幻覚に殴り掛つたら見たのはカオス・エンドのカード
あの爺、気付いてなかつたのか？

「よくみ「待て」誰だ！！」

「俺が誰かはどうでもいい

貴様にこの三枚のカードをやる
お前についている黄色いやつの子孫とそのホームグラウンドだ
お前にいつか力を貸してくれるだる！」

「なに、この雑魚が見えるのか
それにこんなカードは見たことが…
消えた？ いつたい何者だつたんだ？
まあいい

では改めて入るとしよう

よく見る！ カードは40枚あるぞおー！」

扉が赤く光り開き始める

俺のデュエルディスクも起動を始めた
俺は中に入つていく

「此処がデュエルアカデミアノース校？」

まるで西部劇の舞台じゃないか

ガシャン

「うん？」

「うわ」

あれは！

「あ、おい爺！何があった？」

「万丈目さん！」

「ふつふつふ、ちょっと新入生を歓迎したまでよ」

「　　「　　「　　「　　「ふふふつふつふつふ」　　」」

「　　「　　「　　「　　「わつはつはつはつは」　　」」

「こいつらはもしかしてノース校の生徒か？
だが、歓迎とはどういうことだ

「ようこそ、デュエルアカデミアノース校へ」

「お前は？」

「俺がこここの生徒会長
人はキングと呼ぶ

新入生はこここのしきたりで歓迎を受けなければいけない」

「しきたりだと？」

歓迎を受けなければならぬい？
どんなしきたりだ

「名付けて、死の50人抜きデュエル！！

この学園は力こそが全て」

「厳格なランク付けが存在する」

「新入生は格付けが隠したのものから戦い」

「負けたところからランクが決まる」

「50人抜けたら」

「俺様が相手してやる」

でつかいのが話したら

モブA・B・C・Dが話しましたでつかいのが話してきやがった

「こいつは最初のデュエルに負けた
つまりこいつにな

だから一番ランクが下だ」

「存分に扱き使ってやるぜ」

「ふ、俺もしばらくぶりのデュエルだ
受けてたとう」

「てめえの最初の相手はこの俺だ！」

「てめえじやない！俺の名は

1
!

100!

1000!

L

なんか語呂が悪いな

サンダー、いいじゃないか次からこれにしよう

それからデュエルが開始され

「俺のターン、リミッター解除
デス・シザースの攻撃！！ラブポイズン！！」

2000 - 2000

「うわああああああああああああああああああああ」

「次は俺だ！」

それからまたデュエルをしていく

「うわああああああああああああああああああああ」

ああああ……。「」

ふ、口ほどにも無いじゃないか
そしてデュエルをしていき46人を片付けたところ

野郎！

「俺たちがこの学園の四天王だ！」

— キンケには描一本触れさせないせ！」

目に物見せてくれる！」

「ふふふ、一人一人は面倒だ

雜魚どもが

俺のことを見ぬすきたそ

それにして、あのモフA・B・C・Dが四天王とは笑えるな。まあ、本当はこれ以上俺が考えたタクティクスをばらしたくないのあるしね

「俺のターン、俺は切り込み隊長を召喚

特殊効果発動

このカードが場に召喚できたとき
レベル4以下の戦士族を特殊召喚する事ができる
出でよ、切り込み隊長」

『ひ』

「 「 「俺のターン」 」 」

そして奴らは全員同じことをしてくれる
ワンパターンな奴らめ

「切り込み隊長が場に一體以上出でているとき
相手は切り込み隊長を攻撃する事が出来ない」

「見たか？　

これが俺たち四天王の切り込み隊長ロックだ」

「文字通りハツ裂きにしてやるよ」

「ふ、そんなに同じやつがいたんじゃ、誰が隊長かわからんな」

「こいつらは隊長の意味を知っているのか？」

「俺のターン！…ドローー！」

俺はカードを一枚伏せ、巨大ネズミを守備表示で召喚

「そんな雑魚カードで守りきれると思うのか？」

「見えるぜ、俺にはお前たちのデュエルが

俺はカードを探し出すサバイバルの間に懸命に考え抜いた
間切られた手札で起きるであろうあらゆる状況を
そしてそれを打開するあらゆる方法を」

『かつこいい――――

アニキ、それつたおいらのことだよね』

『さすがご先祖様の相棒
かつちよい――――――』

『すげえええええ』

「なぜ、増えてる！ 黙れ！！

所詮、デュエルは力だ

弱いカードが強いカードに勝てるわけがないだろ
知つたのは雑魚には雑魚の使い道があるということだ』

「何を一人でわめいてやがる？俺のターン！！

マジックカード発動 連合軍

こいつは場にいる戦士族モンスター一体につき200
戦士族モンスターの攻撃力をあげる！！

よつて切り込み隊長の攻撃力は2800！！
決める、バトルだ！！』

「みんな一斉にやつちまえ」

「巨大ネズミの効果発動！！

デッキより地属性、攻撃力1500以下のモンスターを特殊召喚する
俺が呼ぶのは逆切れパンダ！！』

「攻撃力800なんざ問題じゃねえ！！』

「逆切れパンダの効果発動！！

こいつは相手フィールドのモンスター一体につき攻撃力を500ボ

「攻撃力アップさせる」

「攻撃力4800！？」

「さりにトラップ発動 破壊輪
このトラップはモンスターを破壊し、互いのプレイヤーにその攻撃
力分のダメージを与える」

「ここつ、俺たちと一緒に自滅する気か」

「いいや、速攻魔法！！防御輪！！
こいつが如何なるダメージからも俺を守ってくれる

3！

2！

1！

0！

「

ドローン

この戦略はかの海馬瀬戸も使用したことがあるとされる戦略だ
これほど有名な戦略を警戒してなかつたとは
ノース校の生徒もそれ程までに低レベルなのか

「ふ

4000 - 4800 = 800

4000 - 4800 = 800

4000 - 4800 = - 800

4000 - 4800 = - 800

「わあ、残るのはお前だけだ！」

「つふつふ、よくぞ生き残った
ここまで登りつめた気力、体力讃めてやるわ
しかし、これまでの戦いで手の内をさらし過ぎたな
身の程を教えてくれる」

『ひい〜〜』

「おお、強そうじやん
大丈夫があ万丈目」

「五月蠅い、万丈目さんだ」

また幻覚か

「あんな木偶の棒、今のお前の敵じゃないだろ？」「

「珍しくいい」と叫びじゃないか」

遊輝の幻覚の言つとおりだ
あの程度、今の俺の相手じゃない
それからあいつが歩いてきた
そして俺の前に立つ
ふ、いいだろ？
格の違いといつものを見せてやる

「「デュエル！！」

「俺のターン

俺はマジックカード デビルズ・サンクチュアリを一枚発動
二体のメタルデビルタークンを特殊召喚

この二体を生け贋に

出でよ、デビルゾア！！

さらにカードを一枚伏せターンを終了する
さあ、俺の前に屈するがいい万丈目！！

「万丈目さんだ！！

俺のターン！！

お前はあの男が俺に渡した！！！」

『万丈目のアーキ

おじやま三兄弟の子孫である

おれ、おじやま・ブルーの力も使ってくれ

「五月蠅い！！と言いたいところだが

確かにこの手札ならお前のような雑魚でも使えるな

俺はこのおじやま・ブルー雑魚を召喚

さらにカードを一枚伏せてターンエンドだ！！！」

「はつはつはつは

貴様のデッキには雑魚しかいるのは分かっている
俺のターンだ、さらなる地獄を見るがいい

トラップ発動 メタル化・魔法反射装甲！！

そして、魔法反射装甲を装備したデビルゾアを生け贋に
メタル・デビルゾア、召喚

『おお～～』

「まだだ！！

さらにトラップカード、リビングデッキの呼び声を発動
このカードは墓地より一体のモンスターを呼び覚ます
当然蘇るのはデビルゾアだ」

「うわあーー

攻撃力2600と3000のモンスターか？

さあどうする、万丈目」

「たかが2600と3000だろ
決めて見せろよ万丈目」

二人の幻覚は正反対のことを言つてゐるが

「ふん、おもしれえ」

「見たか？

貴様のデッキにはこの攻撃力をしのぐモンスターはない
このデュエル、貴様のデッキを把握した俺が圧倒的に有利というわ
けだ」

『ひい～～』

こいつ

だが、俺にはやつには見せていないコンボが二つ
その一つはすでに手札に揃つていて
それに賭けるしかない

「喰らえ！！

デビルゾアの攻撃！！デビル・エックス・シザース！！

『アニキ、後は頼んだよお～～』

「この時、おジャマ・ブル雑魚の効果を発動

デッキのおジャマと名のついたモンスターを一枚手札に加える

「だが、これで壁モンスターは消えた

喰らえ！！メタル・デビルゾアの攻撃！！

メタル・エックス・シザース！！」

「うわあああああああああ

4000 - 3000 = 1000

「貴様のライフはすでに風前の灯
勝負はついたな」

「それはどうかな？」

「うん？」

「俺はこの攻撃を待ってたぜ

マジックカード発動 ヘル・テンペスト！！！

このカードは3000以上のダメージを受けた時
お互いの墓地とデッキのモンスターを全てゲームから除外する

「デッキと墓地のモンスターを全てだと！！！」

「俺の手の内が読まれてるってんなら
このデッキのモンスターカードを全部デッキから取り除いてやるぜ」

「馬鹿め

勝負を捨てたか、俺の場には攻撃力3000と2600のモンスターがいる

これを倒さん限り貴様の負けだ
万丈目

「万丈目さんだ！！俺のターン、ドロー！！

貴様この俺

万丈目 準は戦いを挑んだことを後悔するかしい
マジックカード カオス・エンド発動」

石化するデビルゾアたち

「どうした、デビルゾア！」

「このカードは俺のカードが七枚以上ゲームから除外されているとき相手フィールドのモンスターを全て破壊する」

「何！」

「さらにフィールド魔法 おジャマ・カントリーを発動

そして融合発動

**手札の雑魚と雑魚を融合し
のジャマ・ナイト**

おジャマ・カントリーの効果によつておジャマとなるのについたモンスターが表側表示でいる限り

フィールド上のモンスターの攻撃力と守備力は入れ替わる

よつて雑魚の攻撃力は2500
おジャマ・ナイト

4000 - 2500 = 1500

「ぐわああああああああ！」

たた
俗の二二にはまた死る

「まだだ！」

さらに手札から速攻魔法
融合解除を発動

『おじやまフアミニリー推参』

「雜魚と雜魚で攻撃

論文卷之二

一斉攻撃！万丈目サンダースペシャル！！

『いやあん、行くわよお』

『ご先祖様、俺も行きます』

「ぐわああああああああああああああ」

1500 - 2000 = 500

「どうやら新しいキングの誕生じゃな」

「ああ？ お前ー！」

お前は鯨の腹の中で会つた昆布お化け……」

「校長の 一々瀬じや」

帽子とゴーグルを取る昆布お化けって
この人はそんな馬鹿な

「爺ーーこればどうゆうことだーー!」

門の前にいた爺が校長だと

「せへな
順に説明しよつ

まず、お前を飲み込んだのは鯨ではなくこの学園の移動手段じや

ところ」とは

「潜水艦?」

「お前にやつたカードが、お前が漂流していることを察知して助け
たのじや」

「寝ぼけたことを言つくなー!」

「まあ、よからつ

だが、お前が新しいキングになつたからには
お前がこの学園の代表ということになるな
デュエルアカデミア本校との対抗試合の」

「デュエルアカデミアとの対抗試合?」

デュエルアカデミア本校との対抗試合だと

「やつじや、じつちの代表が一年生になるだつたら向ひにも一年生を用意したやつじや」

「ねもん」

俺が此処のキンケになると最初から「

成程、仕組まれていたようなものか

「言つたろ？」

お前には人とは違つた力があると

「俺と戦う相手の名は？」

「確か、石崎あそびかる
いや、石崎ゆうかがやく」

「石崎？石崎遊輝か？」

ג' א' נ' ט' ע'

「せじひこ」

「遊輝、心心心心」

この俺にもう一度やつと戦うチャンスがきただと
ふつふつふふふふ、ふはっははははは

「おひなせりせりせりせりせり」

Side 遊輝

万丈目のこととも原作通り安心できそうだな
これで戻ってきたら、おジャマ系のカードを大量に渡して魔改造するかな
こりゃ楽しみだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4604w/>

転生物語

2011年12月25日13時50分発行